

kindkopr.ess.com
www.kindkopr.ess.com

海面超上昇
現代文明の毒唾 4

生野以久男

プロローグ

二〇××年

現代文明（現代科学技術文明）には「地球人抹殺実行計画」（現代文明の吐き出す「毒唾」による人類絶滅プロジェクト）が仕組まれていた。仕掛人デカルトが現代文明の暴走を直ちに止めるよう、警告を発した（『デカルトはテロリスト』）。

「デカルトの警告」を受け、現代文明から新しい文明への文明転換の試みが一部ではじまったものの、殆ど省みられることはなかった。

現代文明はひたすら暴走をつづけ、「毒唾」を撒き散らし、地球環境を悪化させていった。人びとは現代文明の暴走を放置したまま、ひたすら現代文明に溺れ、「毒」の盛られた「皿」まで食っていた。

現代文明に溺れた者たちは現代文明の暴走によって生じた地球温暖化などの地球環境悪化を予見することはなかった。たとえ予見していたとしても本気で食い止めようとしなかった。

地球温暖化がはじまり加速しだしても、知らないふりをした。目先のことに囚われ、気付こうとしなかったのだ。責任ある人びとの多くも急激に進行する地球温暖化を見て見ぬふりをした。

地球温暖化は完全に暴走状態となった。

さまざまな対策が考えられ、実行に移されるようになって、文明転換のような根本的な対策を避け、小手先の対策だけだった。現代文明のもとの地球環境との共生を謳い文句にした小賢しい小手先の対策がかえって事態を悪くした。

もはやいかなる対策も手遅れだった。人類は次第に深みに嵌まっていった。

グリーンランドにおいて、地球温暖化の暴走を食い止めるべく、「寒冷化プロジェクト」が秘密裏に決行された。北大西洋へ大量の淡水を放出して地球規模の深層海洋大循環（熱塩大循環）を操作しようとしたのだ。

だが氷床の大崩落によって数メートルの海面の上昇をもたらしただけで、完全に失敗に終わった。

数メートルの海面の上昇によって、沿岸低地は水浸しになり、世界中のデルタ地帯に被害が広がった。

ナイル川、ガンジス川、揚子江、黄河、メコン川、イラワディ川、インドス川、ニジエール川、パラナ川、マグダレナ川、オリノコ川、アマゾン川、ミシシッピ川、ポー川などのデルタ地帯の一部が水没し、一夜にして海岸線が数キロも後退した。

それだけではなかった。そのとき崩れ落ちた大小の氷塊は未知の「殺人ウイルス」に汚染されていたのだ。

海流に流された汚染氷塊が世界の多くの都市を襲った。

現代文明都市東京も広い範囲が冠水し、被害が広がった（『襲い来る殺人氷塊』）。

水浸しから復旧すると、現代文明都市では二酸化炭素の大量放出がふたたびはじまった。大気中濃度はすでに四〇〇ppmを大幅に超え、地球温暖化はさらに暴走しつづけた。

海面上昇による海面の拡がりと海水温の上昇によって、海水の蒸発が一段と盛んになり、大量の水蒸気が上昇気流に乗って上空へ舞い上がる。

赤道付近で形成された巨大な温水塊が海流に乗って北上し、高緯度海域

をそのまま通り抜け、北極海へ向う。

北極海の表面海水温が上昇し、グリーンランドの気温が急激に高まった。グリーンランド氷床の溶融速度が速まっていく。氷床の溶解と崩落が絶えることなくつづき、海面が上昇しつづける。

上昇気流に乗って上昇した大量の水蒸気が天空に包蔵され、「ノアの大洪水」の再来が懸念された。対策として天空に包蔵された大量の水蒸気を人工降雨によって取り除く試みがなされた。だが環境兵器開発を目論む軍の横やりで、失敗する。

この失敗と、グリーンランドや南極の氷床の急速な溶解とが重なって、地球のバランスが崩れ、ポール・シフトが発生し、地球の自転軸（地軸）が回転し出す。

南極大陸から大量の氷床が海洋へ滑落した。

落下の衝撃で大波が発生し、津波のように世界各地を襲う。世界中の多くの沿岸都市は大波に押し潰され、一瞬にして壊滅した。

大波につづき、海面が一〇メートル以上急上昇する。デルタ地帯に残っていた肥沃な農耕地は完全に海中に没し、沿岸域の何十億の人びとが土地を失い、家や財産が奪われた。

地球は完全に逆転し、かつての北半球を南半球にしたまま、公転をつづける（『地球逆転』）。

南極では氷床の溶融がつづき、依然として海面は上昇しつづく。沿岸都市は海中に取り残されたままだった。

急激な海の拡大と海面の上昇、それに地軸逆転とによって海流の方向や流量が変化したのか、地球上の熱バランスは完全に崩れ、地球の気候は極端から極端へと変動の振幅を広め、さらに大きく狂ってしまった。

強風が吹きすさび、砂塵を巻き上げると思えば、強烈な暴風雨が相次いで襲い、豪雨が表土を洗い流す。暴風雨が去れば、露になった岩肌だらけの地表を熱波が焼き尽くした。

温和な気候は地上から消え、地球は一層荒々しいものになった。かつての北極を南極にかえたまま、地球は自転をつづけていたが、気流や海流ばかりではなく、地殻やマグマにも目に見えない変化が生じつつあった。

海面上昇は海岸線の長い日本に飛び抜けて大きな被害をおよぼした。都市や工場が密集している太平洋ベルト地帯は大波の激しい影響をまともに受けた。日本海側も被害を免れなかった。

沿岸都市や沿岸地域の多くは水没したままだった。復旧の見込みはなかった。

一命を取り止めた水没都市の避難民はどこへも行く当てもなく、急造のテント村の避難キャンプに收容され、避難生活がつづいていた。

だがテントでの生活をいつまでもつづけるわけにはいかなかった。水没を免れた都市は、時を経るに従い、次第に落ち着きを取り戻しつつあったものの、つきからつきと押し寄せる避難民の対応に追われた。

そんななかで、現代文明からの文明転換を旗印に始まった「新しい文明村」運動がほそぼそとつづけられていた。

第一章

1

「喜久枝、立候補すべきよ」

北海道知事の任期満了が近づき、保守系の候補として佐東という男が取りだたされていた。M省の課長経験者だという。道州制となって国から種々の権限が移譲されたが、これを取り戻そうとするかのように、道州知事選挙への中央官庁の元官僚たちの立候補が多かった。

「こんなときになによ。そういうあなたこそ出ればいいじゃないの」

喜久枝は目を大きくして、清子を睨む。

二人は司法研修のときの同期生だった。気心の知れた仲で、二人とも最初から弁護士として、中海清子は東京、本田喜久枝は札幌をそれぞれの本拠地として活動をしてきた。住民側に立ち、環境訴訟で何回も共同して弁護を担当したこともある。

グリーンランド永床大崩壊にともない、東京が水浸しになったのを機に、清子は喜久枝のところに転がり込んだ。東京が復旧すれば戻るつもりでいたが、それ以来、一〇年余、彼女は喜久枝の弁護士事務所籍をおりたままだった。

清子には北海道で実現したい夢があった。

夢を追い求めて北海道を駆け巡っているとき、突然、大波が襲い、急激に海面が上昇した。

島国で海岸線の長い日本は、大津波のような大波の襲来と急激な海面上

昇とよって甚大な被害を被った。東京、大阪、名古屋といった沿岸の大都市は壊滅した。京葉、京浜、名古屋から四日市、それに瀬戸内の太平洋に面した沿岸に連なる工場や発電所、石油タンクや原料タンクなど、工業ベルト地帯も大波をまともに受けた。もちろん、日本海側も、沿岸都市はもちろん、工場地帯や臨海発電所も水没した。

つづいて一〇〇日余におよぶ暗闇の世界があった。ふたたび太陽が顔を出したとき、地球が逆転していた。地球の自転軸である地軸が一八〇度回転してしまっただ。

生きているのが不思議だった。日本全体が壊滅すると思った。

彼女は気が気でなかった。生きているうちに、どうしても夢を実現しておきたかった。さいわい、北海道は比較的被害が少なかった。それでも沿岸低地や平野部は水浸しになり、札幌にも海水が押し寄せてきた。苫小牧などの埋め立てて造成した工業地帯が水没し、沿岸の工場や発電所が操業不能になった。

「落下傘候補に立ち向かうには地元出身者にかぎるのよ」

「政治家たちとグルになってる連中には勝ち目がないわよ。やるだけムダだわ。いまさら私たちが出しゃばることはないわ。大体、日本が立ち直れるかどうかの瀬戸際に立たされている時に知事選挙が実施されるとは思えない。代行を決めて、選挙は当分延期よ」

「代行？ 誰が……」

「道議会か、それとも国が臨時措置法をつくってやるんじゃないの」

「北海道が食いものにされるわよ」

清子はおじゃまじゃ頭の右野を思い浮かべた。

「なにか企んでいるな」

受話器を戻しながら、右野は呟く。

「どうしたの」

中海はいつもの調子で椅子に座ったまま声をかける。別に返事を期待していたわけではない。

「新しい文明村」の本館事務所は休耕田が広がる山里の廃屋となった古い農家をリフォームしたものだ。縁側から突きだしてテラス風に造られたウッドデッキに、長方形の手作りの大きなテーブルと椅子が無造作に置いてある。

呼び掛けに応じて集まってきたかつての仲間と久しぶりに顔を合わせながら、彼女はなんとなく居心地が悪かった。自分だけが取り残されているように感じるのだ。

頭がすっかり薄くなつて一層風采が上がらない小男の地之木好夫、面長の顔の尖った顎が一層伸びた感じの左山朗、もじゃもじゃの頭にごま塩の無精ヒゲを生やした角顔の右野順、それぞれ年輪を重ねた男たちは「新しい文明村」の一員として地域にもすっかり溶け込んでいた。

地之木と右野は「新しい文明村」の運営のかたわら、地元大学の講師をも引き受けていた。左山は奥さんを呼んで診療所を開き、地域の医療活動を一手に引き受け、すっかり地域の顔になっていた。

彼女は三人の男たちの顔を一人ひとり見回した。自分もいれて、かつての四人組の顔が揃っているのに、彼女はなにかが欠けているような気がして落ち着かなかった。

東京の下町で、四人が共同で借りていたボロボルの一室の溜り場兼事務所が妙に懐かしかった。

グリーンランド水床大崩壊で、一帯が水浸しになった夜、ビルの事務所で地之木好夫と過した一夜が浮かんた。一〇数年が過ぎているのに、なぜかあの夜が生々しく蘇ってきた。

彼女は地之木の視線を感じて目を伏せる。

水が退くのを待って、彼女は地之木とともに、仲間たちの「新しい文明村」へやって来たが、すでに避難民で溢れていた。彼女はあらたな「新しい文明村」を求めて、ひとり喜久枝のいる北海道へ向かったのだ。

スローペースであったが、彼女はもくもくと「新しい文明村」の実現を目指した。北海道をくまなく回っているうちに、夢がさらに大きくなり、北海道全道を「新しい文明村」へ変革することを思い立った。

だが地球逆転による突然の大波の来襲と海面の急上昇が、彼女にのんびりと大計画を進める時間がないことを気付かせた。

彼女は昔の仲間の助力を得て、すぐにも北海道の「新しい文明村」化計画を実行しようと、何年がぶりに地之木たちを訪ねたのだ。

東京に近い内陸部の高原にある「新しい文明村」には地球逆転による大波や海面急上昇の直接的影響はなにもなかった。だが沿岸部から逃れてきた避難民が未だに大勢住み着いていた。ここを定住地と決めたものも多かった。

「企みって？」

彼女はもう一度訊ねる。

「彼らは国土の再建計画をつくっているが、中央集権化への逆戻りを図ろうとしているらしい」

「え？　すると道州制は廃止になるの」

中央集権型社会を変えるために、地方分権を進める方策として、都道府

県より広域の道州制が採用され、導入されたばかりだった。

「改革したばかりだから制度をすぐ変えることはしにくいだろうが、地方へ移した国の権限を取り戻そうと、彼らの都合のいいように骨抜きにしようとするだろうな。差し当たり、少なくとも今回のような大災害時には中央の方針を徹底しやすい形に地方をもっていこうとするにちがいない」

「それは困るわ」

彼らには北海道の「新しい文明村」化計画などんでもないこととうつるにちがいない。彼女はもっと早く仲間たちの助力を乞うべきだったと悔いた。

「それに、これはまだ推測だが……、彼らは北海道を食糧供給基地化しようとしているようだ」

地球逆転の大波襲来後、世界の食糧需給事情は急速に逼迫した。

一〇メートルを超える急激な海面上昇によって、河川や海岸に面した低地の農耕地の多くが水没した。水没を免れた農耕地でも干害や大雨被害が頻発して、農業生産がた落ちしていた。

これに加え、輸送面で問題が生じていた。大波で大小の殆どの船舶が陸へ押し上げられたうえ、突然の一〇メートルもの海面急上昇は世界中の港湾施設を壊滅状態に追い込んだのだ。

生産面と輸送面との問題発生によって、世界各地で深刻な食糧不足に陥っていた。ことに自給率が低く、長年にわたって海外からの輸入食糧に頼ってきた日本はそのおおりにまともに受け、瞬間に食糧不足が顕在化した。

価格が急騰したと思えば、翌日にはスーパーやデパートの食品売り場からさまざまな食料品が消えてしまった。

米だけは備蓄を取り崩して供給がなされていたが、これもいつまで続

くか分からなかった。買い占めや横流しが横行し始めた。食糧危機が目の前に迫っていた。

だが、いまだに大波や海面急上昇による被害の実態が正確に把握されていなかった。犠牲者数、罹災者数、喪失した農地面積、本年度の農作物の作付け面積など、不明なものが多かった。それでも当面の食糧不足対策として、食料の確保と増産計画が取り上げられていたのだ。

「地域ごとに自給自足態勢でいくべきじゃないの」

「地方にも水没都市から大勢の避難民が押し寄せてきて、すでに食料の自給自足態勢は破綻しつつある。避難民で急増した人口を養いきれないところが続出しているのだ。なんとかして食糧不足を回避したいところだが、実はもうひとつ問題があるんだ」

右野は声を潜める。

「輸送問題のこと？」

「いや、必要な港湾なら早急に整備すればなんとか解決できるだろう。緊急時には自衛隊の輸送機を使えばいい」

「すると別の問題……」

彼女はじつと右野の顔を見た。無精ヒゲのせいか、やつれて見える。

右野は以前キャリアー組の官僚であったが、三〇歳そこそこで退官してしまった。四人組が究極の環境問題対策として文明転換運動をはじめたとき、かつての同僚たちを集めて組織した研究会で、彼は現行システムの見直し対策を兼ねて新首都建設を提案したことがあった。温暖化による海面上昇を見越して、まえもって水没する首都の予備を用意しておこうというものだった。

そのときは誰も見向きもしなかった提案だったが、東京が水没して息を

吹き返した。いまでは各省庁でそれぞれの地位に就いているかっつての研究
会メンバーが、手遅れを省みず、右野に意見を求めているのだ。

「食料の絶対量が不足して、世界中で奪い合いになるだろう。それに備えて
できるだけ国内で食料を調達できるようにすべきだということで、北海
道の食糧供給基地化が考えられたわけだ」

「……………」

「それに日本は周りが海で、沿岸周辺は比較的漁場に恵まれている。高級
魚だけというわけにはいかないが、選り好みしなければ必要とするタンパ
ク源を魚介類で確保できるはずだった」

「え？ ダメになったの？」

「うん、彼らの話では、それができなくなったというのだよ」

「ホント、海面の急上昇で、お魚さんが逃げていったとでもいうの。そん
なことはないでしょ」

「実は、日本列島周辺に生息する魚介類がすっかり放射能や有毒化学合成
物質で汚染されてしまい、安全性上食用に供することができなくなるとい
うのだ」

日本列島は火山によって形成された島々で、陸地の七〇パーセントが森
林に覆われた山地だ。農耕や生産活動に適した平野部は残りの三〇パーセ
ントにすぎない。平野は沿岸部に集中する。

本州の太平洋側の沿岸部は、都市と工業地帯が連なり、工場やタンク群
が林立し、立錐の余地もない有様だった。ことに関東から関西にかけての
沿岸は凄まじかった。さらに瀬戸内海沿岸もこれに劣らず、開発が進んで
いた。

太平洋側沿岸の大都市、化学工場、原子力発電所、貯油タンクや製品貯

蔵タンクなどの諸施設が大津波のような大波をともに受けて多くが破壊
した。猛毒の化学合成物質や高レベルの放射性物質などの有害物質が大量
に流出した。ひきつづき生じた海面急上昇でこれらの施設は水を被り、水
中に取り残されたが、水中で猛毒の化学合成物質や高レベルの放射性物質
などの有害物質を吐きつつけるのだ。

日本海側の沿岸部でも、大波につづいてやってきた海面急上昇で、都市、
化学工場、原子力発電所、貯油タンクや製品貯蔵タンクなどが海中に水浸
しになった。これらの諸々の施設からも猛毒な化学合成物質や高レベルの
放射性物質などの有害物質の大量流出がはじまった。

これらの有害物質は海水域や海底を汚染しただけではなかった。突然侵
入してきた海水と反応して爆発したり、大気に触れて揮発し、広範囲にわ
たつて大気をも汚染した。また、大気中に飛散した猛毒化学合成物質や高
レベルの放射性物質が土壌を汚染し、生物生態系を破壊していく。

低地の農耕地はすべて水没してしまった。

「そうなの……」

汚染地域から離れた北海道を食糧供給基地にしようというのか。「新し
い文明村」にしようとしている北海道でじゃぶじゃぶ化学肥料や農薬をば
ら撒いて食糧を増産しようというのか。

出鼻をくじかれたような気がした。だが彼女にはなんとなく腑に落ちな
いところがあった。

清子は右野とのやり取りを黙って聞いている地之木と左山に目を向ける。
「実は、北海道を『新しい文明村』化してはどうかと思っていたのよ、ど
うかしら」

北海道を日本の食糧供給基地にしようとする思惑があることを知らされ、

彼女は躊躇しておれないと感じた。すぐにも北海道の「新しい文明村」化を具体的に進めたいと思ったのだ。

「日本から独立しようというわけ」

左山が目を輝かせる。

「地球逆転で現代文明の命運は尽きたわ。食糧供給基地化なんてダメよ。もはや命運の尽きた現代文明の肩をもつことはないでしょ。未来の日本、いや、未来の人類のために新しい社会をつくるのよ」

「どんなふうに考えているわけ」

右野が顎の無精ヒゲをつまみながら、呟く。自分の考えを纏めるときの彼の癖だ。

「取りあえず、知事の座を手に入れて、それから『新しい文明村』化政策を推し進めるの。具体的には、まず、食糧の自給自足と環境問題ゼロ社会を目指すことね。環境教育を拡充して、環境倫理を植え付ける。とにかく、『マイナス』最小化の徹底するわ。誰にとっても生きがえのある社会じゃないといけないわね」

彼女はちらっと地之木に目をやった。大きく頷く彼を見ながら、つぶける。

「……最終的には、『循環、共生、連帯』を基本とする誰もが自分の能力を十分発揮できるような人間環境の実現を目指すことだわ」

清子は遠くを見ているのか、焦点のぼけた目を窓に向けたままだ。こんな彼女を喜久枝は珍しそうにしばらく眺めていた。

海面急上昇によって石狩平野のかなりの範囲が水浸しになったままだ。事務所のあるビルからも広がった海が見える。

清子の目にその風景が映っているのだろうか。

喜久枝は彼女に声をかけようか迷った。

「さらに海面が上昇するのかしら」

喜久枝は呟く。清子の目は焦点がぼけたままだ。

「……地球はもとに戻ることがあるのかしら」

喜久枝は幾分声を高める。それでも清子は遠くに目を向けたままだ。

2

「右野さん、それはムリです。当面の食糧不足を解決するのが先決なので。世界の食糧事情を考えれば、早急に国内での増産態勢をととのえる必要がある。いまずぐ食糧の増産可能地域は北海道しかない……」

右野は小柄なせいか幾分見上げるような目を向る小山をじっと見た。かつて机を並べ、互いに言いたいことを言い、議論を戦わせたエネルギーシユな男も頭髪に白いものが混じり、首相補佐官らしい落ち着きがあった。

国家安全保障会議で北海道食糧供給基地化計画が提案されると聞いて、右野は小山を訪ねたのだった。官邸に派遣され、会議の事務局を担当しているという。

「日本の将来を考え、いまこそ、地域ごとの食料自給自足態勢を強化すべきではないのか。食料を自前で調達するなら地産地消方式に限る」

食料の自給自足は「新しい文明村」では当然のことであった。だがこの方式は大都市を生み出した現代文明では切り捨てられてしまったものだった。

現代文明流方式はモノは効率良く生産できるところで大量に生産し、大量に消費する大都市へ輸送してコストを安く仕上げるのだ。穀物や野菜などの食料も例外ではなかった。

だがこうした大量生産大量消費大量廃棄方式を世界中に広め、地球全体に適用した結果が大量のエネルギーを消費し、地球を急速に温暖化させ、急激な海面上昇を招いた元凶だった。

そのうえ、食料の大量生産方式にはさまざまな環境悪化のリスクがともなう。森林を伐採して自然を破壊し、大量の農薬を使用して大気を汚染し、水域を汚染する。地下水を枯渇させ、土壌の塩分濃度を高め、不毛化する。生物の多様性を奪い、生態系を崩壊させる。

現代文明は暴走し、地球温暖化の果てに、気候の異常変動を呼び、海面を急上昇させてしまったいま、さらに環境を悪化するようなことは決してすべきではないのだ。未来を見据え、人類の生き残りのために、いまこそ、現代文明流からの脱却を図るべきときではないのか。

「そんなことでいままで世界中から輸入していた分を賄えるとも思っているのか。貿易は完全に途絶え、一〇〇パーセント輸入することができないのだぞ」

日本の食料自給率は毎年下がりを続けた。穀物自給率は飼料用を含め、重量ベースで二五パーセントを割り込んでいた。米食をつづけているので、主食用穀物自給率はまがりなりにも六〇パーセント程度を確保しているが、小麦と大豆はわずかな国内生産を除き、大半を輸入に頼っていた。飼料用トウモロコシにいたってはすべてを輸入におおいでいたのだ。

とくに問題なことは、大半の輸入先が米国一国に限られていたことだった。それだけではなく、隣の韓国や中国も米国から食料を大量に輸入して

いるのだ。

北鮮を含めた北東アジアは食料を自給できない地帯であった。二一世紀に入ると、日本周辺地域は潜在的飢餓地帯と化していたのだ。

かつて農水省が行なったシミュレーション「もし食料の輸入が途絶えたらどうなるか」（一九九九）によると、自前で食料を調達することになれば、増産するイモ類で補うとしても、摂取カロリーは三割から四割減となり、小麦製品や肉類は一〇分の一程度に減ってしまうという。

だが現実はこのシミュレーションを超えていた。今回の地球逆転によつて、人口が一〇パーセントほど減少したとはいえ、人口はまだ一億人ほどいたし、水没による農耕地の喪失のほうが遥かに大きかった。

「当面の対策というが、そのさき、どんな見通しをもっているのですかね。まさか、当面の食糧不足を解消できれば、あとはひとりでもよくなることも考えているんじゃないでしょうね」

北海道で食料増産態勢をとつたとしても、実際にすぐ増産できるとは限らない。北海道には日本の農耕地の四分の一があり、コメや小麦の生産量は日本一であったが、これ以上増産できるか疑問だった。

新たに空き地や山野を開墾して、たとえ何年かイモ類を増産できたとしてもすぐダメになるのは目に見えている。これまでの農業は石油に依存していたのに、肝心の石油がない。増産できても保存や輸送はどうするのか。石油や電力が不足している。それに道路も危ない。港湾の整備は覚束ない。どうやって各地へ輸送するというのか。

問題を矮小化して、当面をなんとかしのぎ、問題を先送りすることは、前例のない難問に直面したときの官僚の決まったやり方だった。

右野は皮肉っぽい笑いを浮かべ、腰を浮かした。日本の未来がかかって

いるというのに、問題を先送りすることしか考えつかないとはどういうことだ。政治家はなにをしている。水没した選挙区のことしか頭にないのか。こんなところで油を売っていても仕方がない。彼は椅子からさっと立ち上がり、背を向けた。

3

小山は窓辺に近寄り、幾分突き出ている腹に両手をのせ、しばらく佇んでいた。

窓の外に広大な日本庭園が広がっている。首相官邸も大波の直撃によって破壊され、高台に残ったホテルに臨時の官邸が設営されていた。ホテルの建物は古かったが、コンクリートの塊のような頑丈な造りだった。

大波に襲われた首都圏は広い範囲が水没したままだった。ビルの間を縫って連なる高速道路が橋のように水面に浮かぶ。放置された自動車が数珠繋ぎになっている。

霞が関の官庁ビル群も水の中だ。三階から四階付近まで海水が押し寄せている。丸の内界隈、新宿副都心、六本木周辺の高層ビル群も水中に墓石のような姿をさらけ出していた。

水中に取り残されたマンションにしばらく留まっていた人びとも一人去り二人去って、いまでは殆ど人影がなかった。電気が切れ、水道が断たれて、ライフラインが完全に断たれたマンションは次第に傾き出し、崩れゆくただの箱でしかなかった。

小山は挨拶もせずふいに立ち去った無精髭の右野を思い浮かべた。一

〇数年前、右野が仲間の研究会で予備首都建設を提案したことがあった。それはいずれ襲い来る直下地震に備えて東京から離れたところに、もうひとつの東京を造っておくというものであった。

あのときは聞き流していたが、もし予備の首都を造っておれば、いまころは新しい官邸で執務していただろう。

こう思った瞬間、彼はふたたび右野の提案に逆らい、北海道食糧供給基地化構想を推し進めようとしていることに不安が湧いた。また間違いをおかすことになるのか。

大波の襲来は事前に予測され、警報が発令された。避難指示があった。南極での氷床大量滑落の報と同時に、太平洋津波警報センターから津波警報が全世界へ向けて発せられたのだった。

これを受けて、日本政府は直ちに各地方自治体へ向けて警報を発した。第一波が日本列島を襲うまで二〇数時間の余裕があった。このため、日本では大波とそれにつづく海面急上昇による人的被害は軽く済んだ。

だがそのあと、地軸の回転で四カ月にもおよぶ太陽を喪失した暗黒の日々に襲われた。避難生活をつづける老人と乳幼児に対して多大な犠牲を強いた。

ふたたび太陽が顔を出したとき、酷いところでは避難者の半数が消えていた。

臨時官邸のホテルの庭園にも救護キャンプが設営されている。

キャンプに入入りするさまざまな格好をした人びとを目で追いながら、小山はふと食糧供給基地化を進めるより、食糧不足に悩む避難民を増産要員として北海道へ直に送り込むほうが早道だと感じた。

「各地の避難民のデータを持ってきてくれ」

小山は秘書に命じた。

危機管理センターには各地から送られてくる被害データが集められ、集計がなされていた。今回の一連の大波による犠牲者は合計死者三五〇万人、行方不明者六五〇万人であった。二度目の大波が予想を遙かに超えて大きかったうえに、深夜に來襲したことが被害を大きくした。これによって一回目の被害者たちが避難していた高台のキャンプが軒並み被害を受け、大波に呑み込まれたのだった。

沿岸部には全人口の約半数が住んでいる。直接大波の影響を受けたのはその七〇パーセントほどだった。全国で約四〇〇〇万人が直接被害を受けたことになる。

「キャンプはまだ二万二〇〇〇カ所もあるのか」

小山はデータのコピーを捲る。避難先がないのか、出ていく気力さえ喪失したのか、全国でまだ一〇〇〇万人を超える人びとが避難キャンプに留まっていた。

二度目の大波の後、全国各地に避難キャンプが開設されたが、そのあと、約四ヵ月にわたる太陽が出ない暗黒の日々がつづいた。なかには半年を超えてキャンプでの避難生活を余儀なくされている人びともいるはずだ。

だがあまりにも被害が大きく、救済の手もいきとどかなかった。資金も不足気味で、誰にも先の見通しは立たなかった。

被害がこの程度で収まっているとは思えなかった。集計が正確になされているのか。完全に破壊され、水没してしまつて、いまだにセンターへ連絡できずにいるところが残されていないのか。

五月が過ぎ、六月に入った。以前の地球なら、二三度傾斜した地軸が北半球の中緯度にある日本に季節を演出し、春が過ぎ、夏を迎える頃だった。

だが地球逆転以来、日本は南半球になったし、地軸は太陽に対して垂直となり、楕円軌道を公転するので多少太陽から遠のいたり近づいたりするところがあつても、もはや北半球にも南半球にも季節の変化はなかった。

首相や災害担当大臣がたびたび被災地を訪れた。だが視察や激励はなんの役にも立たなかった。かえって被災者たちを苛立たせるだけであつた。政府は避難キャンプに備蓄米を配り、なんとかその場をしのいでいたが、それもいつまで持ちこたえられるか極めて不透明であつた。

また被災地域が全世界に広がっているため、他国からの救援は期待できなかった。

食料の輸入は一切途絶えてしまった。石油やLNGなど、海外に頼っていたエネルギーやさまざまな物資もいつになったら輸入を再開できるか分からなかった。

食料のほか、トイレットペーパーなどの生活必需品が逼迫していた。ガソリンや灯油をはじめ、日常生活を支えていたものが品薄となり、姿を消したのもあつた。あらゆる物価が急騰した。それでも手に入るうちはよかった。

現代文明のもとでモノの浪費癖のついた人びとにはモノの欠乏に耐えることができなかつた。いたるところで欠乏パニックが発生した。

キャンプ内では不平不満が爆発し、暴動が頻発した。ヤミ屋が襲撃され、モノが奪われた。

また、モノ欠乏症は内に向かい、神経を侵し、精神を蝕んだ。神経を病み、うつ病が多発した。

政府には打つ手がなかつた。もはや、厳重な価格統制や生活必需物資の配給制度を実施するほかないのか。

なんとかしなければならぬと思いつきながら、いいアイデアが浮かばなかった。

皮肉なことだが、大消費地である大都市の多くが壊滅して電力や石油などのエネルギー消費量が激減していたし、また多くの犠牲者で人口が激減したため、調達すべき穀物量も思ったほど多くなかった。このことが僅かに救いだっただけだ。

小山は苛立ちを抑え、重い足を引きずり、会議が開かれる会場へ向かった。

4

「以上が当面必要な物資と資金の概要であります。このうち、食糧確保が急務であります。外国に依存していた分がすべて輸入不能の状態です。世界の食糧事情から見ても、この状況は当分続きそうですので、わが国は早急に食料の自給態勢を強化する必要があると思われまします……」

小山には海面急上昇によって農耕地を喪失した状況下で、日本が、いや世界のすべての国々が食料を自給できるようになるのか、全然不明であった。

彼は資料から目を上げ、長方形の大きなテーブルの周りに席をとる委員の面々を見渡した。左側には首相を中心に、左右に主要関係閣僚が並び、向かい合って、衆参議員、専門家、有識者などから選ばれた委員が並んでいる。

三〇人もの委員を集めてなにをしようというのか。外部から選んだ五人

の委員候補者名簿を用意し、議長役の首相のもとに提出しておいたのに、いつの間にか委員が三〇人にも増えていた。

八方美人の首相は自薦他薦の厚顔な売り込み候補者に振り回されてしまったのか。これでは会議の度に目立ちがり屋の発言がつつぎ、収支がつかなくなるのには目に見えていた。委員の数が増えれば増えるほど、意見を集約するのに時間がかかる。いま必要なのは迅速な意思決定と実行だった。だがお調子者で人気取りしか頭にない首相に、果たして議長が務まるだろうか。

「本年度は水稻の作付け面積が激減しております。今後、天候が順調に推移しても、収穫量は平年の三分の一程度かと思われまします……」

石狩平野、根釧平野、仙台平野、新潟平野、関東平野、濃尾平野、大坂平野、岡山平野、筑紫平野など、平野の大半が水没してしまった。かろうじて水没を免れた農耕地も大波を被り、かなり被害を受けていた。

「それではわが国は食糧不足に陥ることになる。なんとか不足分を補うことはできないのか。タイやベトナムからコメを緊急輸入できないのかね。金を払えばなんとかならんんじゃないのか」

ゴロツキのような目した衆院出の委員が発言した。

全世界にわたり、一〇メートルにもおよぶ海面急上昇によってデルタ地帯に広がる広大な農耕地は殆ど喪失してしまっているのだ。港湾施設も破壊されている。それに地球逆転が農作物の収量にどう影響するのか。これらの事実をここに出席している面々はどう実感しているのか。

小山は一瞬、虚しい気分を襲われた。

「備蓄米も底を付きだしていますので、摂取カロリーを確保するためには、早急に国内でコメはもちろん、イモ類やトウモロコシなどを増産する必要

があります。それと食料の価格統制と配給制度をはじめめる必要があります
……」

小山は無視してつづける。

どこへも行く当てもなく、未だにキャンプに留まっている一〇〇万人
にもおよぶ避難民には飢えと疫病が待っているのだ。いまは残り少ない備
蓄米をできるかぎり長持ちさせるほかないのだ。

「なに、イモだと。それに価格統制と配給制度とはなんだ。N省大臣、本
当か」

古参の議員が目を開く。

「まあまあ、審議は提案説明が了えてからに願います」

議長の穏やかな声でした。

「食料などの価格統制や配給制度を回避するためには、必要な量の食料を
確保する必要があります。必要かつ十分な量の穀類や大豆を輸入できれば
問題ないのですが、まえにも指摘した通り、世界の食料需給は極めて逼迫
しており、厳しい状況です。とにかく、今回の海面急上昇によって、本年
以降、穀類などの収穫量が激減すると予想されており、世界における食料
の絶対量不足が避けられない状況にあります。これまでの輸出国において
も、各国とも国内向けを優先させることであります。従って、輸出で
きる余剰穀類などは殆どなくゼロとなるはずです……」

小山は大きく一息ついて、つづける。

「一部では、現在、大豆などの原料不足が顕現化していますが、早ければ、
本年末頃には全然手に入らないところが出ることでしよう。これに備えて、
わが国においても食料増産態勢を一日も早く整えることです。このために、
各地方自治体に食料増産を要請する一方、北海道を最重点食料増産地区に

指定して食糧供給基地化することを提案するものであります。提案内容の
詳細はお手元にお配りした資料に載せてありますが……」

何年も前から食糧不足が懸念され、食料の自給率を高めるべきだとい
う議論があった。これに対して、グローバル化のもとで、自由貿易を前提に、
食料はどこからでも輸入できるのだからその必要がないという意見が強か
つた。

日本人には食糧確保が国の安全保障条件だという意識が希薄なのだ。

嗜好の変化で米食が減り、コメの消費量が激減したことが致命的であ
った。米作の生産調整が実施され、全国的に休耕田が広がった。休耕田とは
名ばかりで、農耕の放棄であり、農耕地の荒地化にほかならなかった。

これにともない、年々、わが国の穀物自給率（飼料用を含む、重量ベ
ー）が低下し、すでに二五パーセントを割ってしまった。

主食である穀物の自給率がこんなに低い国は世界でも極めて稀だった。
先進工業国で自給率が一〇〇パーセントを割っているのは日本だけだった。
カナダの穀物自給率は三〇〇パーセントを超えているのに、日本はその一
〇分の一にも及ばないのだ。

日本だけではない。周りの近隣諸国も穀物自給率が低い。日本ほど極端
ではないが、韓国も穀物自給率を急激に低下させてきた。北朝鮮と中国も
長い間一〇〇パーセントを割り込んでいた。日本はいわば潜在的飢餓地帯
に取り囲まれているのだ。

小山は飢えた難民の大集団が世界を彷徨うイメージを浮かべ、近隣から
日本にだれだれ込む難民の大群に激しく身震いした。

食べものの奪い合いから、日本は食うか食われるかの闘いに巻き込まれ
ていくことになるのか。長年のツケが一度に回ってきたような思いだった。

今更北海道を食糧供給基地化するといっても、口で言うほど、簡単にいくことではないのは十分承知していた。だが急場を凌ぐためにはこのほかにないのだ。

日本人はいつの間にか、経済成長に酔い痴れ、金さえあれば、欲しいものを欲しいだけどこからでも輸入できると安易に考えるようになっていた。生命を維持する基本的な食料さえも同じように考え、自給率の低下に誰も気に留めようとしなかった。紙切れのドルがいくらあっても、ちっとも腹の足しにならないことをすっかり忘れてしまっていたのだ。

日本人の思考構造にはどこか欠陥があるのか。徒に、現代文明に溺れ、身もこころも失い、現代文明の言うままひたすらつき従い、危機意識を極端に欠き、生命維持に超然としている。時勢に流されるだけで、反射神経が鈍く、身を守るための冷徹な戦略がない。そのうえ、個々に生物としての種の保存意識が希薄で、ひとり滅びゆくことを潔しとするところがあった。

人類が滅亡するときは日本人が人類の中で一番早く滅ぶにちがいない、と彼には思えて仕方がなかった。

委員たちの資料を捲る音がつづく。

小山は紙を捲る耳障りな音が消えるのを苛々しながら待った。一心に資料を捲る委員たちが突然、鍋の中で特めく「茹で蛙」のように見えた。

蛙は鍋の中に水から入れられると、火にかけられて水温が上がっていくのになかなか気付かず、ついに飛びだすタイミングを失い、茹で上がって「茹で蛙」になってしまうという。

われわれ現代人は現代文明にとっぷり浸かり、甘い汁に酔い痴れ、現代文明の「毒唾」まで呑み込んでしまったのだ。今更、現代文明の魔手から

逃れようとどう足掻こうというのか。

彼は鍋のお湯の中で「茹で蛙」になっていく自分自身を実感していた。

5

「北海道を日本の食糧供給基地にするって、一体、どういうこと？」

喜久枝が目を剥いた。

「北海道にもっとジャガイモを作らせようということ」

窓を背に隣り合わせに二つ並んでいる執務机で留守中の郵便物に目を通しながら、清子は敢えて軽く応える。

「なんでそんなふうになるのよ」

「立候補しないからよ」

清子はなんとか喜久枝を説得したかった。「新しい文明村」で交わした仲間たちとの話をして、喜久枝は相変わらず興味なさそうに頭を横に振るだけだった。清子は刺激的な言辞を繰り返した。

喜久枝を知事選挙で当選させ、その勢いで一気に北海道全道の「新しい文明村」化を進めるのが清子の戦略だった。地球逆転直後の混乱時だ。あわよくば独立することもできる。だがこの戦略は不発に終わりそうだった。喜久枝には知事になる気が頭から無いらしいのだ。

地之木たちがもうじきやって来る。彼女は北海道全道の「新しい文明村」化を諦め、北海道のどこか目ぼしい地域に将来の全道「新しい文明村」化のための拠点作りに目標を変えようかと思っただ。

「食糧供給基地化って、なによ」

喜久枝がふたたび口を尖らせ、ムキになっている。

「北海道に本州の避難民救済のお手伝いをさせようというんじゃないの。なにしろ、食糧が不足状態だから」

「牧場やゴルフ場をイモ畑に変えろというの。北海道の針葉樹林を切り開き、原野を開墾してイモやトウモロコシをつくれというわけ」

「佐東候補が知事になれば、間違いなくそうなるわね。彼は中央政府の代理人で、中央の言いなりよ」

清子は「そうなんてもいいのね」と言いたかった。でも喜久枝が少しでもやる気になっているのならそっとしておくにかぎる。へんなことを言えば、気の強い喜久枝は必ず反発するにちがいない。ここは自分で考え、決断させることだ。

清子は横目で喜久枝を盗み見る。

ふと彼女は不安になった。北海道知事選挙で本当に勝てるだろうか。

彼女は当然勝てるものと決めていたが、喜久枝の立候補の気配に急に不安が湧いてきた。全道をくまなく歩いて地球温暖化に対する関心の強さを感じていたし、今回の地球逆転にかかわる大波来襲や海面急上昇が追い風になると思い込んでいた。だが増産態勢へのあの手この手の勧誘や奨励金の大盤振舞いに北海道民はどれだけ抵抗できるだろうか。

北海道は被害が少なかつたといっても、石狩平野は水浸しだったし、根釧平野も水没したままだった。十勝川の流域も広い範囲が水没していた。苫小牧工業地帯も水浸しで、製油所のファイアステックがかるうじて水面から頭を出しているだけだった。

夏が過ぎればすぐ冬が来る。地球逆転で冬がくるのか、冬が来てもどんな冬になるのか、全く見当がつかないが、住民たちは海の中の貯油タンク

をみて、今冬の暖房用の灯油すら確保できるか不安がった。

清子は喜久枝の顔を横目で窺いながら、負けるかも知れないのなら、これ以上ひとに勧めず、自分が立候補すべきじゃないのかと思った。

6

「このまま終わるとは思われないな」

ウッドデッキのテーブルでお茶を飲んでいるとき、池田はぼつんと言いだす。地之木の目をじっと見た。

池田は担当講座を継がせようと期待していた掃木をACARに送り出した後もしばらく大学に留まっていたが、掃木がなかなか戻ってこないのにしびれを切らしたのか、定年までまだ間があるのに、彼は突然大学を辞めた。同時に政府や関係省庁の審議会の委員もすべて辞してしまい、地之木の「新しい文明村」にやってきていたのだった。

「というところ……」

彼は池田の目の奥に挑むような光が隠されているように感じた。かつてはアカデミックの塊のような男だったが、大学を辞めてからがらりと変わった。黒かった頭髮も白くなり、青白かった額も日焼けして黒光りし、学者然とした風貌も農夫のようだった。それに思ったことをズバズバ言う。

「ポール・シフトのことだけ……」

「いまは落ち着いているようだが……、また回転し出すのかね」

地之木は一時疎遠になっていた大学時代の友人が無精髭をのばして突然やってきた日のことを思い出した。

そのとき、池田は「掃木のやつ、飛んでもないことを考えているようだ」と言ったきり、なにを聞いても口を噤んで開こうとしなかった。しばらくしてぼつんと「星占いはやめたよ」と言った。

一〇数年前、彼を研究室に訪ねたことがあった。当時、国の気候変動シミュレーションプロジェクトの主査をやっていた彼は仕事に追われ、そのときも古びた研究室の机でキーボードを叩いていた。蛍光灯に照らされた薄暗い空間で一心不乱に気候変動の予測モデルをいじくり回している彼の姿はまるで星占いに熱中しているように見え、地之木はからかい半分にそういったことがあったのだった。

池田は若くして気象科の講座担当教授になった。地球温暖化による気候変動予測プロジェクトに担ぎ出され、予測モデルシミュレーションの責任者となった。

大気中の二酸化炭素濃度の増加とともにリニア（直線的に）に気温上昇が進むモデルで、気候変動の予測を手掛けた。かつて世界最速を誇った大型コンピュータ「地球シミュレータ」を駆使して、一〇〇年後に世界の平均気温が二度から五度の幅で上昇するなど予測していた。

この予測モデルに対して、目に掛けていた助手の藤原が異論を唱えた。今後生起する地球温暖化は大気中の二酸化炭素の増加に応じて「リニアに緩慢に進行するタイプ」ではなく「急激に変動するタイプ」にちがいないと言いつつ出た。米国の研究所（ACAR）へ飛び出していったものの、彼はグリーンランドの調査後謎のウイルスに感染し、志半ばにして死亡してしまった。

しばらくして、後継者と目していた講師の掃木有平が飛んでもないことを言い出した。夜光雲が「ノアの大洪水」を起こす兆候だというのだ。学

会を騒がせた掃木を米国の同じ研究所へ送り出してから、しばらくして池田は大学を辞めたのだった。

「まあね」

池田は白くなった長く延びた髪を無造作に掻き上げる。「で、いつだ。いまずぐっていうことはないだろうな」

地之木は明日にも北海道へ向かうつもりだった。彼は相変わらず木製の椅子の背にもたれたまま、いつ戻るか分からない旅を思い、ぼんやりと遠くに連なる山並みを眺めていた。

山村の一角にある「新しい文明村」はまるで世界から隔離された別世界だった。時間が悠々と流れ、鉢植えのパンジーに飛んでくるミツバチの羽音が響く。彼は時の刻むのを忘れ、真空のような気分浸っていた。

「北海道へ連れて行ってくれないか」

口を開くのを忘れてミツバチの動きを見とれていた池田が、突然、思い出したようにぼつんと言った。

「え？ ポール・シフトと関係があるのか」

「関係があるといえればあるし、ないといえはない」

池田も遠くの山並みを見ているが、目には周りの風景が入っていないようだった。

「それで、地球は……」

「このままおさまるとは思えない。いずれ動き出す」

「いずれって、いつだ。近いのか、遠いのか」

「人間がバカなことを仕出かさなければ、しばらくこのままかもしれない」

マグマの動き次第だな」

「バカなことってなんだ」

「地球システムに影響をおよぼすようなショックのことだ」

「ショックか……」

「地球システムには脆いところと強靱なところがある。脆いところは極めて弱いショックでも大きく影響する。とんでもなく遠くまで影響がおよぶこともある」

「考えるバカなことって、なんだ」

「核の暴発だ。小惑星との衝突なんていうこともありうるな」

「SFじゃあるまいな」

「オレのシナリオはこうだ」

池田は地之木から目を離し、しばらく遠くを見ていた。それからこんなことを言い出した。

地球逆転による大波と海面急上昇で、世界経済は手痛い打撃を受けた。多くの沿岸都市も壊滅した。これで大量生産大量消費大量廃棄もおさまり、エネルギーや資源の浪費も一段落し、人間活動が吐き出す二酸化炭素の排出量も激減することだろう。一方、海面が広がり、二酸化炭素の吸収量も多少増えるかもしれない。

だがこの程度では大気中の二酸化炭素濃度が激減することにはならない。二酸化炭素の大気中濃度は徐々に減っていても、いまず地球温暖化がおさまり、寒冷化へ向かうことはありえない。大気中における二酸化炭素の寿命はかなり長いから、なんらかの拍子に濃度が急激に激減するようなことがないかぎり、二酸化炭素の寿命が尽きるまで現在のような状態が何十年もつづくだろう。

問題は海面急上昇によって、かなりの規模の陸地を失ったことだ。人間の経済活動拠点であり、生活の場であり、農業や漁業などの生業の場でも

あった陸地や浅瀬が奪われてしまった。これは大勢の犠牲者とともに、人間の生存のための場所が広範囲にわたって喪失したということだ。このことが世界に大混乱を招きつつある。大混乱が狂気を生み、人間社会は破綻に瀕することだろう。

「ところで、急峻な地形を流れる日本の河川と異なり、世界の大河は大平野をゆったり流れるタイプが多い。水流が豊富でも流れの勾配があまりないのだ。このため、海面急上昇の影響をモロに受ける。河川の奥の奥まで海水が侵入していく。河川水が徐々に塩水化して、汽水化する。最後に、河川が上流まで海になるのだ」

こうして河川の周りに広がる農耕地は塩性化して不毛の地となり、人びとは飲用水にも事欠くようになっていく。

池田は食糧不足に加え、水不足によって、世界中が熾烈な紛争にまきこまれていくことになるという。

「戦争となり、核の暴発によってすべては終わりを告げるだろう」

「高レベルの放射能チリの雲が世界を覆い、暗黒の日がつづくということか」

「そのまえに、放射された強烈な中性子が、一瞬のうちに世界中の電子機器類を破壊しつつ、現代文明の息の根を止めてしまうかもしれない」

「……………」

地之木はすべてが静止する世界を思い描く。

冷蔵庫やエアコン、テレビなどの家庭用電気器具から金融システム、交通システムや発電・エネルギーシステム、各種生産システムなど、あらゆる分野に使われているIC基盤が一瞬のうちに破壊され、すべてが機能不全に陥るのだ。

地軸の回転によって四カ月におよぶ暗黒の世界に見舞われたときでさえ、こんなことはなかった。太陽が顔を出さないだけで、電灯は灯り、電気器具を使用できたが、それらが完全に途絶えてしまうことになるのだ。

「そのうえ、世界は長い間、放射能子リの雲に覆われてしまうことだろう。だがこれだけでは終わらないだろう……」

「まだ、あるのか」

「暴発規模にもよるが、大きければ多分、地殻変動や火山活動を誘発するかもしれないな。地震や火山噴火が一斉に、あるいは連鎖的に起こることだろう。アラスカから始まる北米大陸の火山帯が南米大陸から南極大陸へと連鎖しているし、一方、アラスカからアリューシャン列島、カムチャツカ半島へ連なる火山帯が千島列島から日本列島へ連なり、さらに、台湾、フィリピン諸島、ニューギニア、ニュージーランド、そして南極大陸へと連なる。不気味なことに、双方とも、いま北極に位置しているかつての南極大陸を指している。もしかしたら、分厚い氷床に押さえつけられていた南極大陸の火山群が覚醒し、大噴火を起こし、大量の溶岩を流出するかもしれない。こうなれば、ふたたび、地軸が動きはじめることになるかどうか」

「地球は温暖化の果てに、地殻大変動を迎えるというのか」

「火山噴火によって大量のマグマが流出し、南極大陸の氷床が一挙に溶融すれば、瞬く間に、海面が一〇〇メートル以上上昇することになるな」

池田は呟くように言う。

「それがシナリオか、人類滅亡の……」

地之木は「いつだ、はじまるのは……。なんとかして核の暴発を防止することはできないのか」と言おうとして顔を向けた途端、池田の錐のよう

に尖った鋭い視線と正面衝突し、口を噤んだ。

「だから、オレは北海道へ行きたいんだ。なんとか生き残る方法を探るためにね。今度は多分、まえの四カ月の暗黒の世界よりもっと厳しい試練が待っている。この試練に人類は耐えられるかどうか」

地之木は考え込んでしまっている池田をじっと見守った。

7

「知事選への立候補は諦めました。遙々いらしていただいたのに、申し訳ありません。もっと早くご連絡すべきでしたが……」

中海清子は改まった口調で言い、少々太り気味の短軀を無理やり折り曲げ、深々と頭を下げた。

ぎりぎりまで説得を試みたがダメだった。なぜか喜久枝は固辞しつづけた。一度は自ら立候補することも考えてみたが、とてもムリだった。

「ところで……」

一言謝ると、いつもの屈託ない清子に戻った。

目の前の三人をゆっくり見渡す。小男でいまいち風采が上がらない地之木、白髪の混じったもじゃもじゃ頭に無精ヒゲの右野、それに白い長い髪の毛の池田だ。

居候の身でありながら、事務所では清子は喜久枝と同等のスペースを使用している。窓を背に、隣り合わせに両袖の執務机が二つ、ひとつが通れるほどの間隔を置いて並び、それぞれの前に、専用の応接セットがあった。境は曇りガラスが嵌め込んである移動可能な衝立で仕切られているだけで、

話は筒抜けだった。

「喜久枝、こっちに来ない」

清子は座ったまま、短い首を回して呼んだ。清子にはふたつの思惑があった。地之木に喜久枝をもう一度説得してもらうことと、地之木が池田を連れてきたことの理由を知りたかったのだ。

「こちらは本田さん。こっちが池田くん」

初対面同士のはずなのに、地之木の紹介はそっけなかった。彼は池田が人類生き残りの最後のチャンスに賭けようとしているなんていうつもりはなかったし、池田本人にも「人類滅亡のシナリオ」を二度と口にしないことを条件に北海道への同行を許したのだった。

だが喜久枝は池田をじろじろ見ている。

「知事選なんて、辞めたほうがいい。地球は逆転したままだし、地球温暖化も以前に増して激しい。こんな状況では、誰も選挙なんか真剣に取り組もうとしないだろう。明日なにか起きるか分からない状況では、住民だって知事選どころじゃない。多分、延期か、暫定的な措置がとられることになるにちがいない」

「そうよね。わたしもそう思っているのよ」

喜久枝はそれ見たことかという目付きで、清子を振り返る。

「それよりも、早急に拠点となる『新しい文明村』の建設してはどうかかな」

清子が苦々しい顔をしているのに気付き、地之木は急いで付け加えた。

彼には清子におもねる気は毛頭なかった。彼は池田の話聞いて、彼女らにむしろ立候補を思いとどまるように説得しようと思っていたのだった。北海道全道を「新しい文明村」化できればそれに越したことはないが、時

間が掛かる。その間、事態は「人類絶滅」へ向って進行していくのだ。時間との競争だった。

「でも……」

清子は戸惑いを露にし、口ごもる。

「そのほうがいいわよ。いまさら知事選なんて」

喜久枝は身を乗り出して応える。

「北海道を食糧供給基地にしてもいいのね」

清子は逆襲に出る。

「知事選を止めたほうがいいと言ったけど、一寸、言い過ぎだったかもしれない。選挙に勝って北海道の『新しい文明村』化を進めることができれば一番いいと思う。だがそのための時間がない……」

ふたりのやり取りをじっと見ていた地之木が口を挟む。

「時間がないって……」

言い合っていたふたりが同時に叫んだ。

地之木は困惑して、池田に目をやる。池田は俯いたまま、素知らぬ顔をしている。右野は興味深そうに目玉をきよきよと左右に動かす。

「まあ、いつなにか起こるか分からない。太陽のでない暗黒の日が何日もつづくことだってありうる。だから一刻も早く準備を始めるべきだということだよ」

「……………」

ふたりは腑に落ちないといった目を向け、地之木をじっと見ている。

「以前と異なり、地球はいま、北極と南極とが入れ替わり、自転も右回りに変わっている。現在の地球の状態は必ずしも安定しているものとは言い難い。ふたたびポール・シフトが起こり、地軸が回転することも考えられ

る。そしてわれわれを襲った一〇〇日以上におよぶ暗黒の日々が再来するとも限らない……」

地之木の話の途中から、ふたりの視線が池田に注がれた。だが池田は相変わらず素知らぬ振りを装っていた。

「池田さんはあの気候変動予測をなさっておられた池田教授じゃありませんか……」

突然、喜久枝が叫んだ。

「そうよ。池田教授よ。先生はなぜこちらへ……。いまのことと関係あるの」

清子は地之木と池田に交互に目を向ける。

「別に……」

池田が顔を上げる。

「そういえば、先生に掃木さんというかたから電話があったわ」

「喜久枝、誰のこと」

「いつですか」

「今朝、皆さんがお見えになる前に……」

「それで……」

「池田教授なんて知らないし、今日、お出でになるとも思わなかったから、直ぐ切ったわよ」

池田は喜久枝をじっと見つめ、「ヤツ、日本に帰って来ているのかな」と小声で呟いた。

地之木は口を閉じたまま、しばらく池田の様子を見ていた。池田の顔色には別に変わったところはなかった。

「と言うことで、だから、これから北海道で手掛ける『新しい文明村』は

『ノアの大洪水』のときの箱船みたいなものをめざすべきなんだ」

地之木はふたりの視線に応えるように言う。

「これから起こる大災難を生き残るためのシエルターとなるような『新しい文明村』づくりをしようというわけね」

「そうだ。われわれ二人はそのためにもこちらに移住することも考えている」
思ってもみなかったことが地之木の口をついて出た。

「でも、国は北海道を食糧供給基地化にしようとしているのでしょ。これと『新しい文明村』づくりは真っ正面から衝突することになるのではないですか……」

清子が心配そうな目をしている。

「逆に、それを利用すればいい。できるね、右野くん」

「え？ そんなことができるの」

「国は食糧供給基地化のために北海道へ多額の資金を投入するはずだ。それを『新しい文明村』づくりに利用するのだよ。本格的に食糧供給基地化を進めるつもりなら、農家への奨励金や補助金などでお茶を濁すようなことはしない。むしろ、積極的にヒトとモノを投入してくるだろう。そのため開墾の費用や土地の手当てなどは『新しい文明村』づくりとかなりダブることになるからね」

地之木はにやっとした。

「食糧供給基地化を通して北海道を『新しい文明村』化しようというわけ」

清子はまだ半信半疑の面持ちで、頭が薄くなっています風采が上がない地之木を見つめていた。

「一体どうしたんだ」

右野は叫んだ。

「右野さんの言う通りにすることにしたんです。自己責任で食料を自給自足してもらおうと思ってるね」

受話器の奥から、のんびりした小山の声が流れてきた。

突然、北海道へ大量の避難民がやってきた。政府が食糧増産のキャンペーンを張り、首都圏の避難キャンプに收容されていた避難民を半ば強制的に送り込んだのだった。

急造の仮設岸壁に接岸した大型ヘリは数千人の避難民を下船させるとすぐ引き返し、ふたたび避難民を満載して接岸した。ピストン輸送が繰り返された。

各地の避難キャンプでも同様の措置が取られた。休耕田などのある近郷の市町村に協力を要請し、避難キャンプの撤収がはじまった。

政府の食糧増産計画に反対していた政治家たちも、ようやく世界の食糧事情が当分改善しないことを認識したようだった。

水没した都市の復旧は見送られたままだった。海面上昇がつづいているし、今回の海面急上昇は以前のものとは比べもつかない酷いものだった。いくら排水ポンプを回しても、海水が減る気配はちつともなかった。

食糧事情が悪化をたどる一方なのに、このまま、これ以上避難キャンプに大勢の避難民を抱えておくことは治安上問題であった。営々と築き上げてきた唯一の財産である家屋敷を一瞬に失い、絶望に打ちのめされ、無気力な状態に落ち込んでいる多くの避難民たちが不満やストレスからいつ暴

徒化するかもしれないのだ。

政府は食糧増産計画に併せて、避難民のテント生活を解消させる作戦に出たのだった。これには避難民問題と食糧不足を同時に幾分でも軽減しようとする戦略のほかに、別の思惑が潜んでいた。

グローバリゼーションによって世界中に蔓延した市場原理主義に基づく原始的資本主義を信奉する多くの多国籍企業が国際協調を蔑ろにし、自社の保身と利益追求に明け暮れていた。各国とも次第に、協調よりも競争を意識し、隣国同士で助け合うゆとりを喪失していった。

地球温暖化が暴走しだし、グリーンランドや南極大陸の氷床が大量に融解しつづける一方、海水温の上昇による海水膨張によってさらに海面が上昇しているのにかかわらず、未だに各国は一致して地球温暖化対策にあたらうとしなかった。

地軸が回転し、北半球が暗黒の冷凍世界と化しても、また、南半球が真昼の灼熱世界になっても、各国は自国の国益を最優先して他国を省みることとはなかった。各国とも今回被った自国の被害の対応に大童で、国際的援助活動はおろか、国際協力さえも期待することはできなかった。

日本政府は決断を迫られた。

秋の収穫時になれば今年の穀物収穫量が明らかに、食糧不足が歴然とする。そのまえになんとか手を打つ必要があったのだ。

海外から大量に輸入していた食料は完全に途絶えた。輸出国の被害状況を見れば、当分の間輸入が再開できるとは考えられなかった。東南アジアの米作地帯で海中に没した水田をふたたび耕作することは絶望的だった。

いままで米作などに従事していた農民が食糧を求めて彷徨う飢餓難民と化してしまっていた。

飢餓難民はバンングラデシユなどの東南アジア諸国、中国、韓国、北朝鮮に溢れ、数千万人から数億人に膨れ上がった。いくつもの巨大な難民集団が国境を越え、徒党を組んで略奪を行い、当てもなく彷徨う。

このような情勢のもとでは、たとえ日本が金に任せて食料を調達できたとしても、無事日本まで運んでくることは極めて難しかった。陸上では銃器を持った山賊が横行し、海上には大砲を備えた海賊船が待ち構えていた。

北海道が食糧供給基地となれば、食糧を求める難民の格好な標的となるだろうし、また北海道で増産した食糧を首都に運ぶときにも危険がともなう。日本近海には密漁船に混じって国籍不明の不審船が出没し、領海侵犯を重ねていた。

最後まで決定が持ち越された案件は水浸しになっている首都圏の復旧についてであった。復旧するかそれともこのまま放置するか、もし復旧するとすればどのようにするかについて検討がなされた。

被害による損失と復旧のための費用とが細かく計算されたものの、議論が分かれ、容易に纏まらなかった。首都圏の周囲に巨大な堤防を築く案が出されたものの、堤防を巡らす範囲についての議論がいつまでも終わることがなかった。

そうこうしているうちにも海面上昇がつづく。水のなかに取り残されている高層ビル群が徐々に沈み、傾いていく。

目に見えて広がる海に復旧の議論も次第に尻つぼみになっていった。

だが避難キャンプが問題だった。復旧ができなければ、どこへも行く当てもない避難民はいつまでもキャンプに留まり、いま以上に不自由なキャンプ生活を余儀なくされるのだ。備蓄米も底を突き、かといって秋の収穫も期待できなかった。

政府には猶予がなかった。

避難民をキャンプで越年させるわけにいかなかった。食糧不足のうえ、地球が逆転したまま、海面上昇がつづいている。いつなにが起こるか分からないのだ。

そこで、食糧増産計画の実施を機に、避難民問題を一気に解決することにしたのだった。

9

「核戦争か」

掃木有平は一見好々爺然とした池田の口を突いて出てきた言葉に一瞬たじろぐ。彼は隣で身動きもせずじっとしているひとり娘の真有を気遣いながら、もう一度かつての指導教官の目をじっと覗いた。

一〇数年前、研究室に教授を訪ねたときの情景がまざまざと浮かんだ。あのとき、教授はどんな気持ちで後継者と目していた男を米国にある大気に関する研究機関ACARへ送り出したのだろうか。

ACARでの研究が思わぬ展開を見せ、一年か二年かで帰る予定が一年を超えてしまった。彼の地球温暖化に関する特異な研究が軍関係機関の関心を引き、米国に留まることになったのだ。そのため、娘の真有とも一〇年余も離ればなれとなってしまったのだった。

「いいえ、でも分かりません。いま言えることは、偶発的な核戦争や核暴発の危険が非常に高くなっているということですよ……」

掃木は関心があるのか判然としない池田の顔色を窺い、どこま

で話せばいいのか、思いあぐねた。師弟の間にも一〇年もの長い歳月が壁をつくってしまったのだろうか。

地球逆転を招いた南極大陸氷床の大崩落と、これによる大波で真有たちを乗せた「箱船」が暗黒の海を漂流することになったこの一年は、彼にとつて一〇〇年にも匹敵するものだった。彼の色白で面長の顔立ちには、どちらかといえば澆刺とした若づくりで、一見派手な感じを与えるものだったが、いまでは若さはすっかり影を潜め、澆刺としていた顔面もすっかり黒ずみ、皺だらけで萎れてしまった。

一〇〇日余の漂流の末、ようやく救出されたときには、「箱船」の三人の搭乗者は生死の境にいた。年老いた義父は力尽き、母代わりの叔母は直ちに病院へ搬送された。若い真有だけがすぐ回復したものの、年老いた二人は彼の顔を見て安心したのか、義父は救出直後に一言言い残し、叔母はしばらく病院での療養生活を送ったのち、前後して去って逝った。

彼は義理の父と叔母の遺骨を携え、娘真有を伴いて久しぶりに帰国した。早速訪ねた大学には池田の姿はなかった。そこで、生まれたばかりの真有と過した北海道へ足を伸ばし、教鞭を取っていた大学を訪ねていた。

池田からの連絡を受け、彼は真有を連れて本田喜久枝法律事務所へ駆けつけたのだった。

彼はふたたび池田に視線を投げる。研究室の書類を山積みした机でパソコンに向っていたところの色白で孤高然とした面影はなく、白髪の長い頭髪は形よく整い、日焼けした顔に柔和な目が微笑んでいる。

曇りガラスの衝立の向こうで、人影が動いた。

「打ち合わせをやっていたんだよ。すると、やはり、核シエルターをつくる必要があるかな」

池田も曇りガラスの衝立に映る黒い人影に目を向けた。

「そうでしたか。実は、軍関係者の話によると、地球逆転によってミサイル用の計算ソフトやデータがダメになったおそれがあるというのです。弾道タイプは若干の修正で済むかもしれないが、誘導タイプではそうはいかないらしい。なにしろ、地球逆転で南半球と北半球とが入れ替わってしまったので、従来のデータ精度を維持するには、全地球測位システム（GPS）衛星や地球スパイ衛星もそれに応じて軌道をシフトする必要があります。が、軌道修正するか、それとも新規の地球探査衛星を打ち上げることにするか、まだ結論が出ていないようです。再逆転に備えてこれらはこのままにしておくほうがいいという意見が結構根強いらしいのですよ。まあ、地球の再逆転を心待ちしているひとが多いということですか。かといって、GPSなどをそのまま放置しておくことはできないんですね。逆転した地球に合致した精密なデータがなければ地上のナビゲーションシステムは十分機能しない。となれば誘導タイプの巡航ミサイルの命中精度も落ち、使用することもできないらしいのです。ですから、目下のところ、軍は先制攻撃を恐れて、相手の動きに極めて敏感で、ピリピリしているそうですよ」

「うむ……」

「もうひとつ厄介な問題があるのです。大波によって多くの沿岸都市が壊滅したり水没したこともあってターゲットの変更も考えなければならぬし、それに今回の海面急上昇で水浸しになった地下式のサイロもあるらしいのです。これらの処理が結構難しい。難しいというより危険を伴う面倒な細かな作業が必要だそうです。ここにも偶発的危険が潜んでいるのです」

「そんな問題があるのか。原発や再処理施設などの核施設が水浸しや水没しただけじゃなかったのだな」

池田は天を仰ぎ、大きな溜息をついた。

一発の暴発から、米国、ロシア、中国、フランス、英国が保有する総計何万発もの核弾道ミサイルが天空を飛び交い、互いに標的を目指す。このなかには一基のミサイルに複数の核弾頭を搭載し、それぞれを個々の標的めがけて誘導できる多弾頭タイプのもも多いのだ。

地上から発射されるものばかりではない。ほかに、原子力潜水艦や戦略爆撃機からも無数の核弾頭の攻撃が加わる。

一端、核戦争が始まれば、地球上の核弾道ミサイルは最後の一発まで自動的に打ち尽くすシステムが完備されているのだ。

意図しようがしまいが、核弾頭は自動的に世界中の都市や工業地帯を襲い、森林や農耕地を焦土と化す。二〇億トンにもおよぶ貯蔵化石燃料をも一瞬うちに消失させ、部厚い黒煙が地球を覆い尽くす。舞い上がった大量の死の灰が地上に降り注ぎ、やがて地表を覆い、死の世界となる。

「これが核を生み出した現代文明の避けられない結末なのか。なんとしても未然に防がなくては……、国連はどうしている？ なんらかの動きはあるのか」

「いいえ、いまのところ、殆ど、機能してません。各国とも国内問題にかかりつきりといった状態ですから。二、三の国が動いても全然影響はありません。それにこういった問題は秘中の秘事項ですから、なかなかタッチできません。問題の存在すら秘密ですからどうにもできないのです。二国間あるいは核保有国同士の問題として処理できればいいのですが、それも無理でしょう」

ふたりはしばらくじっと黙り込んでいた。

「ところで、核の暴発のまえに地球再逆転が起こることはないのか。きみ

はどう考えているんだね」

池田が重い口を開く。

「地球再逆転……ですか」

一瞬、掃木は予期しない話題に戸惑った。池田は視線を宙に浮かせ、遠いところを見ている。

地球再逆転といっても、一瞬でもとに戻ることはあるまい。地軸がゆっくり回転しはじめるのか。左回りか、それとも右回りか。回転ではなく、長い間ふらふらとあちこち彷徨いながらもとに戻っていくのか。地球再逆転といっても地軸がもとに戻ることも、そのプロセスが問題なのだ。

ふと、彼は池田が地球再逆転問題で世界各国の関心を引き起こし、連携を図ろうと意図しているのではないかと思った。

「わたしは一年間の休暇中ずっと日本にいるつもりです。その間、この大学で研究ができるようになっていきます。先生も研究にお戻りになりませんか」

一〇数年前、教官をしていた北海道の大学で、そのときの教え子が教授になっていたのだ。

研究室を拠点に「地球再逆転」の予測情報を世界へ向けて発信するのだ。「地球再逆転」が近づいていることを知れば、核戦争を始めようとは誰も思わないだろう。偶発的な核戦争にも注意が行き届き、起こりにくいようになるかもしれない。いや、「地球再逆転」をまえに、全世界に向けて、人類全体が戦争を放棄し、核兵器を廃絶することを訴えることもできるのだ。

「……………」

「また投機的な研究と批判されますかね」

掃木は笑った。彼は一〇数年前、北海道での夜光雲の出現に「ノアの大洪水」を予想したことによって、投機的研究者のレッテルを貼られ、日本の学界から追放されたのだった。

「かもしれないね。でも今度は誰もきみを追放しようとはしないだろう。とにかく、核戦争を防止するのに役立つなら投機的研究でもなんでもいいじゃないか」

「先生は近々『地球再逆転』があると思いますか」

「近くあるか分からないが、ありうることだと思う。条件さえ揃えば、明日とはいわず、いまずぐにも起こるだろう」

「条件ですか」

「そうだ。もっともどんな条件なのか正確には不明な点もあるがね。それらも追々明らかにすることができらるだろう」

「先生、それじゃ、いまから始めましょうか」

「おいおい、オレは『新しい文明村』づくりのお手伝いに北海道へやって来たんだよ。もう大分まえにリタイアしているので、頭が錆び付いてしまっ
て再回転するかどうか。一度、みんなと相談しなきゃならないなあ」

池田は満更でなさそうな表情を浮かべた。

10

「うん……、という事です」

池田は衝立の隙間から顔を出し、掃木と真有の紹介を終えると、仲間を見渡し、にやっとした。どうせ衝立のかげの四人には二人の話は筒抜けな

のだ。くどくど繰り返すこともあるまい。

喜久枝と清子の好奇心に満ちた目が一瞬光り、地之木と右野は軽く頷いた。

四人は立ち上がり、境の衝立を完全に押しやり、二組の応接セットを寄せた。六人は思い思いに席を取る。

「真有ちゃんもどうぞ」

一人だけが立ったまま、黒目がちの円らな大きな目でみんなの動きをじっと見ている真有に清子が笑顔を向けた。

「避難民が大挙押し寄せている。これじゃ、計画はおじゃんだ」

右野は忌忌しそうな顔をした。

「食糧供給基地化はどうなるの」

「その代わりに避難民を送り込んできたらしい。彼らに自前で食糧を調達させようということらしい」

「ここを食糧供給基地にすれば、周辺国から飢餓難民が押し寄せることに
気付いたんじゃないのか」

「まさか。まわりは海だ。海賊どもが来襲するというのか」

「中国北東部の飢餓難民が国境付近に集まって北上しようとしていると耳にしたことがあります。カナダ、アメリカには豊富な食料があるという噂
が広まっているらしく、越境した難民が集団でアラスカをめざして移動しているというのです」

掃木は寒くなれば飢餓難民は陸上ルートを海上に変える可能性があるという。そうなれば北海道もターゲットになるだろう。

「避難民たちがどう言いくるめられて北海道へやってくる気になったのか
分からないが、こうなった以上は彼らを食糧増産要員にするほかないだろ

う」

「都会人の彼らに芋を作らせようというの。それは無理じゃないの」

「清子、そんなこと言っていちゃダメ。やらせなけりゃ。生き残るには食べるものは自分で獲得しなければならぬのよ。核戦争と地球再逆転とが同時に起こるかもしれないでしょ。誰にも人を助ける余裕はないんだから」

「でも、そんなに簡単に核を使うかしら。世界中が放射能で汚染されてしまうことになるんですよ。核戦争が起これば……」

「何十万、何百万、何千万の飢餓難民が食糧を求めてつきからつきと国境を越えて押し寄せてきたら、どうする。海面急上昇で広い範囲にわたって領土が水没してしまったバングラディッシュからの難民が続々とインド国境付近に集まって一部が越境しはじめている。難民の大群が越境しはじめてたら衝突は免れないだろう。これを阻止するのに放射能汚染が限定的な小型戦術核兵器が使われるかもしれない。インド、パキスタン、北朝鮮などが無造作に核を使い出すと怖い。そうなれば米国やロシアなどの核大国でも国境を越えて押し寄せる飢餓難民に対して小型核兵器を使用する誘惑に駆られることになるだろう」

「掃木さん、それよりも小競り合いや紛争から核暴発の恐れほうが可能性としては高いじゃないんですか」

「そうかもしれません。それもなんとして防がねばなりません。もし防ぐことができれば……」

池田は掃木の額にこれまで見たことのない深いしわが刻まれているのに気付いた。世界が深刻な食糧不足に陥れば、方々で飢餓に苦しむ民族が他の民族を襲い、食糧を奪い合い、紛争が頻発する。やがて全面的な戦争

へと発展することは目に見えていた。食糧不足ばかりではない。水不足やエネルギー不足も国際的紛争の火種となっている。これらの紛争を核戦争へ発展させないためにはどうすべきか。

「地球の危機を訴えるはどうですか」

右野は低い声で呟く。

「地球再逆転による暗黒の世界の再来襲を訴えてはどうかしら」

「清子、ホントなの」

「あてずっぽうでも構わないわよ。世界中が危機を乗り越えようと一致するなら」

「掃木さん、地球再逆転の可能性はどうですか。近い将来あるのですか」

「起こるでしょう」

娘を気遣い、曖昧な笑いを浮かべている掃木に代わって、池田が応えた。

「ホントですか。でも地球温暖化の暴走は収まりつつあるのではないのですか」

「喜久枝、そんなことないわよ。北海道でさえまだまだこんなに暑いじゃないの」

まだ五月なのに、部屋の中はむんむんとし、半そで姿なのにみんなの額には汗が光っている。

「たしかに今回の出来事で人間のエネルギー使用量は激減するでしょう。

人為的な二酸化炭素排出量が減るので、大気中濃度もこれまでのように増えることはないでしょうが、大気中に蓄積された分はそのまま留まるので、当分の間大気中の二酸化炭素濃度が急激に減ることはないのです。なにしろ大気中では二酸化炭素はかなり長寿命なんです。もしかしたら現在大気中に存在する二酸化炭素は数十年から数百年はこのままかもしれませんよ」

「そんなに……」

「条件によってはね」

「そうすると、地球温暖化も当分解消することがない……」

「そういうことになりますね。地球の気候にもまだまだ荒っぽい動きがつづくことでしょう」

「それじゃ、世界の食糧不足は当分改善することはないわね。ますます悪くなっていくのかしら。すると核戦争も……」

清子が大きな目でじろりと池田を見て、呟く。

「とにかく、われわれは世界へ向けて、地球再逆転の予測について発信することにします。これで世界中が一致団結して核戦争回避や核暴発防止へ向かえばしめたものです。でもこれまでの人間の行動を考えれば、それは奇跡を待つようなもので、あまり期待すべきことではないでしょう。ですから、一刻も早く、核戦争や核暴発に備えてシエルター用の『新しい文明村』をつくってください。一人でも多くの人びとが生き残って、こんどこそ現代文明に代わる新しい文明を構築することです。掃木さんと一緒に、あらゆる手段を講じて核戦争の回避を世界へ働き掛けますから。その一方で、核暴発に対する十分な備えもやるほかないでしょう」

「核兵器が造りだしながら、管理できないのだから世話ないな。結局、現代文明は自ら総決算する破目に陥ることになるのですかね、これを創り出した人類ともども……」

右野はぼつりと呟いた。

第二章

11

「がっかりだわ。『新しい文明村』には誰も関心がないのよ」

久しぶりに事務所を顔合わせた仲間たちに中海清子が諦め顔に呟く。

地之木らは「新しい文明村」のネットワークを通して、世界中へ核戦争の防止と地球再逆転への備えを訴えた。その一方で、つぎつぎと送り込まれる水没都市からの避難民を収容できる「新しい文明村」の建設をはじめようとしていた。

避難民たちが核戦争と地球再逆転を生き抜き、現代文明に代わる「新しい文明」を構築する担い手となればしめたものだ。送り込まれた大量の避難民を排除することも、また送り返すこともできないのなら、可能な限り最大限利用することだ。これが地之木らは戦略だった。

だが避難民が押し寄せるなかで「新しい文明村」を建設することは無鉄砲なことだった。彼らは大波と海面急上昇の疲れた被害者だった。彼らには未来への希望も意欲もなかった。彼らが欲しいのは暖かい食べ物と安息の場だけだった。これらをまるでコンビニで買い物かごに入れるように容易に手に入れることを望んだ。

原野を開墾し、作物を育てるより、海辺で貝を拾い、魚を獲るほうが彼らの性に合っていた。直ぐ成果が出ることにしか興味が湧かないのだ。

沿岸の漁港は大波と海面急上昇で破壊され、漁村は崩壊した。漁船は丘の上に打ち上げられたままだった。漁民の多くは漁業を放棄した。浅瀬に

は魚介類が豊富に繁殖し、避難民の素人魚獲りにとって格好な漁場となった。

近海に不審な船舶が出没し出した。はじめは密漁しているだけだったが、そのうち多数の難民を乗せて接岸し、上陸を試みるものも出てきた。

食糧基地北海道が近隣諸国の飢餓難民の目的の地になったのか。各国とも難民の不法侵入による社会や経済の不安定化をおそれ、極力排除していた。だが周囲が海の北海道には監視の行き届かない無人の砂浜はいくらでもあった。

ホタテとホッキガイが異常に繁殖した。これを目当てにひとが集まってきた。海の近くに小屋を建てる者が出た。小屋が建て増しされて住居になっていった。

ひとの住まない沿岸や大波の被害にあつて放棄された集落あとに、新たな集落が生まれていった。

「海辺に新しい家が建っているけど……」

右野が地之木に目を向ける。黙っている地之木にたたみかける。

「……このままではまた同じことを繰り返すことになる」

地球再逆転で発生するかもしれない大波や海面上昇を心配しているのだ。

「人間は何度も同じ過ちを繰り返してきたよ。自分でやったことは自分でリスクを負うほかない」

地之木はいささか投げやりに言う。

「小山が会いたいわって来た。官僚時代の仲間だ。大量の避難民を送り込んだ元凶だ。ケシカランヤツだ」

右野はほそつと言う。清子は一瞬目を光らせる。だが地之木は相変らず全く無反応だった。

地之木は大量の避難民を収容するという考えを棄て、大規模な「新しい文明村」を建設することを諦めてしまった。避難民の受け入れは市町村に任せればいい。避難民を利用することは止めるのだ。

彼はむしろ分散型の小規模な「新しい文明村」をできるだけ多くつくり、ネットワーク化することを考えていた。参加を希望する者のみだけでいい。遊び半分なら、必ず襲ってくる試練を耐えることはできないのだから。

「もっと奥地を探そう。少なくとも標高は二、三〇〇メートル欲しいな。盆地より見通しがきく吹くさらしの台地がいい」

地之木は地図を広げ、候補地に印を書き込んでいく。

これからつくる「新しい文明村」は新しい文明を構築するためにつくるのだ。単に、核戦争と地球再逆転を生き抜くためのものだけではない。

だがもし核戦争と地球再逆転とが相次いで生起すれば、地球にどんな事態が生じ、どんなことがもたらされるかわからない。死の灰に覆われた死の世界か、真昼の灼熱地獄か、それとも暗黒の冷凍世界か。

それは短くとも一カ月、長ければ一年、あるいはもっと長くつづくにちがいない。外部から断絶した狭い閉ざされた空間で耐えるほかないのだ。運良く生き残っても、そのあとにくる過酷な世界を生き抜きことができるのか。

ふと、人類が死滅することになるかもしれないという思いが彼の頭をかすめた。

果たして、人類は現代文明に抗して生き続ける必要があるのか。人類が現代文明とともに滅びるなら、それはそれでいいのではないか。現代文明を創り出し、謳歌し、思う存分享受し、堪能したのだから、現代文明が終止符を打つなら、甘んじて運命を共にすべきではないか。これが人類に課

せられた最後のリスクじゃないのか。

だが人類を滅亡させてもいいのか。現代文明をエンジョイしたのは現代を生きただけではないのか。その現代人が人類全体を滅亡させようとしているのだ。

地之木はどうしていいのかわからなくなった。意識が朦朧としてきた。

清子が無言にか言っているようだ。だがなにも聞こえなかった。

右野がソファから立ち上がるのが見えた。

彼は朦朧とした意識のなかで、ひとりの人間としての自分が消え、人類としての自分を感じ始めていた。

12

「パパ、へんよ」

シャワーで濡れた長い髪をバスタオルで拭きながらソファでテレビを見ていた真有が手を休め、テーブルの父に大きな黒い瞳を向ける。

「真有、どうした？」

コヒーカップを手に、掃木はテレビのまえに移動する。

ーカシミールに近いインド・パキスタン国境付近で、突然、小型の核爆弾が炸裂した……

領有を巡って長年続いていた小競り合いが、飢餓難民の越境が続発し出したことを契機に紛争へと発展し、両国の軍隊が軍備を固め、国境で対峙していた。そこへ戦術核ミサイルが打ち込まれたらしい。

両軍の兵士のほか、大量の難民が犠牲になった模様――

掃木はテレビに釘付けになったまま、身動きできなかった。

彼は地球再逆転を回避するために核戦争をどうしても未然に防止する必要があること、そしてそのために自分の考えていることを真有に話したばかりだった。

「地軸が回転して、ふたたび逆転することになったら大変なことは分かるけど……、核戦争が起きるなんて、ピンとこない」

と応える真有に、彼はできることならそうあってほしいと思わずにおれなかった。

だが彼の願いは完全に裏切られた。それにしても懸念していた核兵器がこんなに早く使用されるとは予想できなかった。彼にはせめてこれが全面核戦争へ発展しないことを祈るほかなかった。

彼は日本への出発前日の夜、ジュディ・ワイズに「南極大陸の氷床がなくなったら、地球は再逆転するか」と問いかけたときのことを思い浮かべた。

「南極大陸にはまだ氷床が大分残っているはずね。あれが全部溶けるまでにはかなりの時間がかかるわよ」

ジュディ・ワイズは額に垂れたブラウンの長い髪をかき上げ、腑に落ちないというような目で掃木有平を見た。

時間も遅かったせいか、レストランには殆ど人影がなかった。カウンター横に若いウエートレスが一人、手持ちぶたさに立っている。

ジュディ・ワイズはACARの研究員で、彼のプロジェクトの一員だっ

た。地球逆転が近づくある日、彼女と一夜を共にしたこともあった。彼は新たなプロジェクトを立ち上げることを考えていたので、地球システムに詳しい彼女に是非一度意見を聞いておきたかったのだ。

「徐々に溶けるのであれば、何百年何千年、いや何万年もかかるかもしれない」

彼は大きく頷き、相づちを打つ。

もし大量の氷でも何千年何万年もかかって徐々に溶けるのであれば、全部溶けたとしても果たしてポール・シフトが起こるようなインパクトとなるだろうか、と彼女は訝っているのだ。

だが南極大陸に残っている氷床が一挙に崩壊し、全部一度に溶ければどうなるか。地球のバランスが狂い、ポール・シフト（極移動）を起こし、地球の自転軸がふたたび回転しだすことにならないのか。

「たとえば、全面的な核戦争が起こるとか、なんらかの大きな衝撃があれば、それが原因となって地球システムになんらかの変化が生ずるかも……」

「やはり、核戦争か」

地球温暖化が暴走中だとしても、南極大陸の氷床が融解するよりも、世界的な食糧不足のほうに核戦争の引き金になる可能性が遥かに高いのだ。

「滅多に核戦争が起こるとは思えないけど……」

「とにかく、核戦争を見合わせ、世界を地球再逆転の備えに向かわせたいのだ」

「有平の意図は理解できるわ。でも地球再逆転のための備えといっても、どんなプロセスで地球が再逆転するのか分からないし……、それがいつどんなふうになるか分からないから、対策といっても具体性を欠くわね。それに、国家レベルでも対策はさまざまだろうし、まして個人レベルとな

ればなおさらよ」

「われわれの行動が、たとえば、国連などの場で地球再逆転対策の国際的な協調や協力を取り決める契機になりさえすればいいんだよ。具体的にどうこうということはみんなが集まって考えればいいんだ。われわれは地球再逆転の可能性について国際社会に警告を発し、問題提起さえすればそれで十分だと思うよ」

「それだけでいいの」

「それ以上のこともできればいいけど、差し当たってわれわれにできることは世界に向けて警告を発信する程度しかないだろう」

ふたりはしばらく黙ってじっと相手の目を見つめていた。

周りのテーブルには一人の客の姿もなかった。ウエートレスもいつの間にか消え、カウンターのなかで中年のバーテンダーがのんびりとグラスを磨いている。

不意に、荒野と化した地球が浮かんだ。草一本生えていない瓦礫が一面に広がっていた。一人の男が背をまるめ、あてもなくとぼとぼと歩いてる。

「全面核戦争になれば生きものは全滅だろうな。かといって、差し迫って地球再逆転の可能性がないのに、明日にも起こるようなことは言えないよね……」

「そうね。科学者である以上は……」

「科学者でなければいいのか」

「……………」

ジュディ・ワイズは探るような目をして、彼の目を覗き込む。

「ところで、ジュディ。現在、地球システムは安定に向かっているのか、それとも不安定化に向かっているのか、どっちだと思う？」

「システムとして存在する以上、システムはつねに安定化を指向するものじゃなくって。もつとも寿命が尽きれば別だけど……」

「うん、そうだね。質問が悪かったようだ。地球システムもつねに安定化を指向しているはずだけど、いまの地球システムの状態、すなわち、地球の自転が逆転して左回りになってしまっているが、そうなっている状態が安定化を指向していることに合致していると考えられるのか、どう思うかね」

「地球逆転した状態がシステムとして安定化の過程にあるのか、ということね」

「そうだ」

「このままで落ち着くか、それとも元に戻ろうとするか、どちらかということね……」 彼女は目を大きくして左右に動かし、それから彼に目を据えた。

「……どちらの可能性もあると思うわ。でもこのまま落ち着くには何事もないことが条件ね。いまは不安定な過程にあるから、システムとしてこのまま落ち着くにはこの過程を何事もなく安定的に通り過ぎることができかにかかっていると思うわ」

「いまは不安定な過程にあるんだね」

「ええ、地軸が逆転した結果、公転軌道での地球の自転は現在、これまでと逆の方向に回転しているわね。これは軌道をまえに進むように回転しているわけね。このため、いままでとは方向ばかりではなく、加わる力が変わることもあるんじゃないかしら。公転のスピードが極僅かだけど速まることになるかもしれない。このことが地球システムにどのような影響をおよぼすことになるのか判然としないけど、当分の間は不安定な状態にあると

考えて間違いないわね。だとすれば、なんらかの力が作用すれば、容易に元に戻ろうとする動きが生じるかもしれないわ」

地球は自転しながら太陽の周りを回っている（公転）が、これらの運動は地球を取り巻く大気の流れや地球表面の七〇パーセントを占める海洋における海流、地殻やマグマ、マグマに浮かぶコアやコア自体にも大なり小なりさまざまな影響をおよぼしている。それゆえ、今回の地球逆転によって運動に変化が生じた以上、影響にもなんらかの変化が生じている可能性があるのだ。

地球の自転そのものの回転方向には変化がないが、地軸が逆転したため、楕円の公転軌道上で地球が逆になり、これまで地球が公転軌道上を右回りで自転していたのが、逆の左回りで回転するようになったからだ。

「軽い衝撃でも容易にポール・シフトが生じるということか……、核爆発によってもその可能性はあるのかなあ」

「程度によるだろうけど、ありうるんじゃないかしら」

掃木は彼女に目を向けたまま、身動きせず、じっと見つめた。だが彼の目は彼女を見ていなかった。背後から彼女を包み込もうとしている暗闇を見ていたのだ。

食糧不足の世界で食糧争奪の果てに、核が暴発し、地球の地軸がふらつきはじめる。死の灰に覆われた地球がふたたび地軸を回転させ、人類を暗黒の冷凍世界へ引きずり込もうとしているのだ。

「なんとしても核の暴発を防がねば……」

彼はどんな手段を弄しても核の暴発を防ぐことができればそうしたいと思った。たとえ、科学者としての生命が奪われようとも構わなかった。

「ああ、真有……」

彼は衝撃に打ち震え、唇を震わせるだけで言葉が出ない。

核の報復がはじまるのか。両軍の核兵器による戦争がエスカレートして核保有国を巻き込み、全面核戦争へと発展するのか。

彼の目にテレビの画面一杯に広がったキノコ雲が焼き付いて離れなかった。ふたたび地球は放射能チリに覆われ、暗黒の世界に逆戻りするののか。

彼はかつて地球が南極を太陽に向けて地軸の回転を停止し、北半球が長い暗黒の世界に入ったときのことを思い浮かべた。そのとき、真有は大波に攫われ、何カ月も「箱船」に閉じ込められたまま冷たい海を彷徨っていたのだ。

真有に二度とこんな「箱船」生活をさせたくなかった。いや、真有だけじゃない。すべての人びとに核シェルターに閉じ込められた生活なんかしてもらいたくなかった。

13

「わざわざ北海道くんだりまでやってくるとは、一体、なにを企んでいるんだ」

右野は小山を見付けるなり、大声で言う。

「今日は隠密行動だ」

小山は声をひそめて、右野を制した。

「なんだって……」

隠密行動なら、なぜ人目につくロビーで待ち合わせたんだと思い、右野

は辺りを見渡す。ロビーはもちろん、ホテルの広いエントランスホールにも人影はなかった。

「実はもうひとりを待っているんだ」

小山はそわそわと落ち着かない。

「誰だ、待ち合わせているもうひとは……」

「きみもご存知の……、あ、いらしたよ」

小山の視線を追うと、身体を揺らしてあたふたと近づいてくる池田の姿があった。

「将来、さらに海の潮位が上昇するのであれば、それに備えて予備の首都を東北地方か北海道に建設しておこうかと思うのです。これに関してご意見を伺いたいというのが、ご足労を頂いた趣旨です」

会議用にごじんまりとした小さな部屋が別に用意されていた。中央に長方形のテーブルがあった。奥の壁側の椅子に池田と右野が並んで腰を下ろすと、向かい合って席を取った小山が改まった口調で言った。

「これは首相補佐官としての仕事か。それとも……」

「右野さん、今日はザックバランにお聞きしたいのですよ。いろんな情報が入っていますが、混乱しているようで、判断がつかないでいるのです。思惑や推測が入り乱れているようで、どれが信頼できる情報か分からない状態なんですよ」

「……………」

池田と右野は互いに顔を見合わせた。小山がそんなことで北海道までふたりを追ってきたとは思えなかった。右野は黙ったまま、小山の目を覗き込む。

「お聞きしたいことを用意していますので、わたしのほうから質問させていただきます。よろしいですか」

小山は一息入れた。

「そのまえに、掃木有平がいま北海道にいる。わしは引退した身だ。彼の方が……」

池田が口を挟む。

「ホントですか……。いずれお力添えを頂くことになるかと思いますが、今日は先生のご意見を拝聴したいのです。単刀直入に参ります。地球温暖化はどうなるのか、海面がどの程度まで上昇するのか、地球再逆転はあるか、それはいつか、知りたいことはこんなところですが……」

池田はしばらく小山のごじんまりとした浅黒い顔をじっと見つめている。右野は池田の口が開くのをいまかいまかと待った。

「分からん。データがないのだ。だが地球温暖化は当分続く。地球上の氷床が全部溶けるか海中へ落下すれば、海面は最大一五〇メートルは上昇するだろう。地球再逆転は起こる可能性は十分ある。起こるとすれば一〇年以内だろう。もっと早いかもしれない。二〇年以上なにも起きなければそのまま落ち着く可能性もある」

「地球温暖化はまだつづくのですか」

「二酸化炭素の人為的排出量がゼロになっても、今後一〇〇年ないし二〇〇年はつづくだろう。そして徐々に寒冷化へ向う」

「地球が再逆転する可能性は……、発生の蓋然性は……」

「年々低くなるが、ここ数年は極めて高い。切っ掛けがあれば、すぐにも動き出すだろう」

「切っ掛け？」

「そう、切っ掛けだ」

「核戦争も切っ掛けになりますか」

「核戦争？ そんな動きがあるのか」

右野が割り込む。

「いや、たとえばだよ」

小山は即座に否定する。

「全面的な核戦争になればその可能性はある」

池田は何事もないようにつぶける。

「そうですか。とにかく、できるだけ早く予備の首都を用意して備えておくに越したことはないということですか」

小山は言い訳するようにわけのわからないことを言い、顔を右野の向ける。

「建設するとすれば、北海道がいいですかね」

「……………」

右野はじっと小山の顔を窺う。予備首都建設案には見向きもしなかったのに、急に豹変したのはなぜか。なにか特別の情報をもっているにちがいない。

「旭川から稚内までの中間あたりに適地はあるかな」

「札幌はどうなの」

右野はカマをかける。

「あそこはターゲット、いや、ヤバイ。もっと標高が高いところがいいんじゃないのかな。それに都市部は避けたい。空港からそうと遠くない山間地がいい。首都といっても当面は政治の中枢機能が中心で、他は追々追加していく。一旦緩急あったときの備えに、さし当たり、『臨時の官邸』を

用意しておきたいのだ。一〇〇人規模で一年間籠城できる程度のもを確保したい」

「核シエルターか」

右野は小山に目を据え、呟く。

「いや……、地球再逆転の備えに、自給自足の方式のもので……」

小山は一瞬ぎよっとした表情をしたが、すぐに食わぬ顔で言う。

「最近、北海道の沿岸には得体のしれない船がしょっちゅうやってきている。難民も上陸して住みついているところもあるようだ。こんなところに『臨時の官邸』を造っていいのか」

右野はじっと小山の目を覗き込む。

小山が予備首都の候補地として北海道と東北地方をあげたときから、彼は東北地方は当て馬に過ぎないことを見抜いていた。彼はなぜ北海道なのか、それも旭川よりもさらに稚内寄りなのか、小山からはつきり理由を聞いておきたかった。理由如何によってはなかば容認していた国外からの難民の浸入も阻止され、「新しい文明村」づくりからも彼らを排除しなければならぬかもしれないのだ。

「新しい文明村」では基本的に参加したいものは参加できるオープン方式だった。新しい文明の構築を目指すかぎり、国外からの難民でさえも受け入れることにしていたのだった。

「やはり、東北地方よりも北海道のほうが安全じゃないのかな。それに……」

下北半島には再処理施設や原子力発電所などのほか、米軍の基地もあって、核施設や弾薬庫などが多い。また宮城県から福島県の太平洋側には大容量の原子力発電所が連なる。これらの核施設や原子力発電所は、現在な

かば水没しているものの、全面核戦争になればこれらが攻撃対象となるおそれが十分あるのだ。

海面急上昇によって海中に取り残されているこれらの諸施設から現在でも海水中へ放射性物質が漏れ出しているが、核ミサイルで攻撃されて破壊されれば、さらに大量の放射性物質が周辺に撒き散らされることになる。

「核戦争が起こると思ってるんだな」

「転ばぬ先の杖だ。ヘタすると、日本国がなくなってしまう」

「送り込んだ大量の避難民をどうするつもりなんだ」

「当面は市町村のキャンプか避難所で生活してもらおうが、予備首都が本格化すればそちらへ移ってもらおうつもりだ」

小山は計画の詳細や実施方法などについて話したが、右野はなにも聞いていなかった。核戦争を想定しているなら、ほかにも何箇所かに「臨時の官邸」や予備首都を用意しているにちがいない。

右野は小山の企みをあれこれ推し量っていた。

14

国境を挟んで両軍のにらみ合いはつづいたものの、自制が保たれ、一時的にせよ、核の報復合戦は回避された。

不思議なことに、印パ両軍とも核兵器を使用していなかったのだ。

核ミサイルがどこから発射されたのか不明だった。だが一発の核ミサイルが世界を極度に緊張させた。国際的テロ組織の挑発だったのか、と疑わられたからだ。

世界の食糧不足は相変わらずつづいていた。だが不足しているのは食糧だけじゃなかった。

世界のいたるところで、水不足が深刻化していた。飲み水が不足し、衛生状態が極度に悪化した。農業用水が不足して耕地が乾燥し、農耕が不能となった。農民は飢餓難民化していった。

食糧不足は海面急上昇による単なる農耕地の喪失だけが原因ではなかった。農耕地があっても、農業用水が足りなくて農耕ができなくなるように、さまざまな要因が相互に絡み合っているのだ。

石油が不足すれば、機械力に頼っている大規模農業は立ちいかなくなってしまう。大量の農薬や化学肥料に依存している農業は、合成原料やエネルギー不足でこれらの生産が滞ったり、価格が急騰すれば、農耕が放棄されることになりかねないのだ。

その一方で、海面急上昇によって河川の流れが滞り、平野を流れる河川の水位が上昇した。堤防から水が溢れ、洪水が広がった。川岸の市街地は水浸しとなり、農耕地が湿地と化した。海水が奥地まで遡上し、河川水が塩水化して農耕ができなくなるケースも多かった。

北米大陸ではミシシッピ川流域が酷かった。南米大陸ではアマゾン川とラプラタ川の流域が広範囲にわたって浸水した。

ナイル川、ガンジス川、揚子江、黄河、メコン川、イラワディ川、インダス川、ニジェール川、パラナ川、マグダレナ川などの流域でも浸水域が広がっていった。

広がった湿地帯で蚊が大発生し、住み家や農地を失った人びとを襲った。デング熱、マラリアや西ナイルウイルスなどの感染症が蔓延していった。

シベリアの針葉樹林地帯にもオビ川やエニセイ川などの河川から水が溢

れ出した。流れ出た河川水が広い範囲を覆い、モミや落葉松の大き木が枯れだし、森林生態系が破壊された。動物たちが餌を奪われ、棲息地から追いだされた。

農耕地を失った農民は飢餓難民となった。棲息地を失った動物たちは餌を探して彷徨う。

地球温暖化は相変わらず暴走しつづけ、異常気象が頻発した。

食糧不足はますます深刻化していった。

どこの世界でも食べ物強いものが独占する。富裕国は世界中で食料を買いあさり、貧困国では飢餓難民が増えていく。

食糧が絶対的に不足しているなかで、国際機関を通して飢餓難民へホームやトウモロコシが提供されたが、輸送の途中で山賊や海賊に奪われたりして、僅かな食糧さえ飢餓に苦しむ難民のもとに届くことはなかった。また不正が横行し、行政当局の関係者や係員によるネコババや横流しも日常茶飯事だった。

飢餓に耐えられず、難民のなかに集団を組んで、略奪に走るものが出た。

武器を持って金持ちを襲う。商店や倉庫が破壊され、食料が強奪された。

治安が乱れ、経済が滞り、社会が崩壊していく。

各国とも難民に悩まされ、国境に軍隊を派遣して不法侵入に備える一方、都市には軍隊を出動させ、治安の維持にあたった。だが難民グループのなかには、軍隊くずれや反政府軍からの脱走兵など腕に覚えのある若者たちで組織化されたものまで現れ、武器をもって正規軍と対等に渡りあうものさえ出てきた。

15

「きょうはここまでにして帰ろうよ」

「あすから当分休みになる。遅くなくても最後まで片づけておこう」

年かさの男が黙々と砂袋を運ぶ。

「クリスマスイブなんだぜ、今夜は」

「途中で放り出すわけにはいかない。折角ここまでやったのに、止めればもどに戻って、休みの間にまた水浸しになってしまう」

作業服のふたりの男は堤防の崩れ落ちた箇所を補修をつづける。溜まった水をポンプで汲み出しながら、漸く水位すれづれまで砂袋を積み上げたところだった。だがまだ砂袋の間から水がしみ出ている。さらに砂袋を数段積み増しする必要があった。

砂袋の堤防は浸水に備えて造られた急拵えのもので、数キロ四方の軍の施設を取り巻いている。付近一帯が洪水に襲われ、軍の施設も水浸しになったことがあった。それ以来、有刺鉄線で囲われた軍の施設の外側に砂袋を積んだ仮堤防が築かれていた。

海面急上昇後、河川から水が溢れるようになって、付近の平原一帯に水溜まりができ、一面湿地帯と化した。水がふたたび基地をとりまく仮堤防に押し寄せ、砂袋を浸したのだ。

「ここはいずれ廃止するんじゃないか。少々浸水してもかまわないよ」

「仕事を請け負っている以上、責任を果さなければならぬ」

夕暮れが迫っていた。いまごろの時期なら、気温は氷点下になっているはずだが、地球温暖化のせいでまだ暖かい。

「この調子じゃ、今年も雪のないクリスマスか」

若いほうは相変らず無駄口が多い。

遠くから微かに唸るようなエンジンの音が響いた。

ゲートに通じる舗装された道路を一台の幌を掛けたトラックらしい車両がライトも点けずにゆっくり近づいてくる。

「なんだ、あれは。軍用車じゃないようだが……」

「ん？ ヤミ商人の車だろ」

基地は一時極東の要と位置づけられたこともあったが、基地の再編で廃止の方針が決まり、撤退に向けて縮小計画を実施中だった。要員や施設等の整理が開始された。配置転換で要員は毎年減少し、いまでは往時の一分の以下となってしまった。

近くの商店街も寂れる一方だった。基地周辺は閑散とし、人影も疎らだった。

基地の不用品や不良品が放出され、一部が売り出されて一時業者で賑わったが、それも収まり、業者の車も余り見かけなくなった。

それでも時折折汚れた古びたポロトラックを見かけることがあった。基地からでるゴミや廃棄物の回収車だった。廃棄物のなかには横流しの銃器もあった。

兵士のなかにも武器の横流しが横行していた。闇夜にまぎれて安値でそれを買い付けるヤミ兵器商人が基地周辺にも出没していたのだ。

業者によって引き取られた旧くなった武器が闇市場を通して一般へ流れ、テロ組織や難民集団の武装用となった。

車両はゲートのまえで、一端停止した。

ゲートが開かれた。車両はなかへ入り、さらにさきへ進む。明かりが灯っている建物のかげに隠れるように車両が止まった。

助手席からひとりの男が下りた。男は明かりの洩れている窓に近づき、なかを窺う。男は窓のなかを覗いたまま、右腕を背後で大きく回した。

車両の幌のなかから黒い人影がつきつきと下り、薄闇に消えた。

しばらくすると、銃撃に続いて、方々から爆発音が響き、大きな火柱が立った。

後方で、特別大きな轟音とともに、巨大な火柱が尾を引いて上昇していった。

16

「大統領、U-123基地から弾道ミサイルが発射されたようです」

メガネを掛けた痩せた長身の男が足早に大統領に近づく。第一補佐官だ。

「なんだと、あそこは閉鎖の予定じゃなかったのか」

「その準備を進めているところです」

「事実を確認しろ」

マクラウド大統領は左腕を後ろに回して腰を押さえ、大きい身体を揺るようにして執務機の回りを忙しく動き回る。

「やはり、二分前に発射されています。基地司令官はテロに急襲されたといっています。核の起爆装置は取り外済みですが、ターゲットへの飛行軌道は従来のまま設定されています。コントロール機能と爆破装置の回路がすでに取り外されており、着弾位置の変更も爆破処理も不可能です。ホットラインでブルース大統領とお話下さい」

補佐官が受話器を大統領へ差し出した。

「大統領閣下、不幸なことが起こりました。テロの攻撃に遭い、当方のミサイルがU-23基地から貴国のM-3ミサイル基地へ向っています」

「本当ですか。それで」

「当該ミサイルは廃棄処理途中のもので、核爆弾は取り外し、爆薬も一切搭載していない空の弾頭を付けたロケット本体だけです。燃料を抜いて撤去するばかりのものでしたが、コントロール装置や爆破装置の回路基板も取り外しており、このまま飛行をつづけるほかないのです」

「ほう」

「一〇数分後に貴国上空に達すると思しますので、迎撃ミサイルで撃墜願いたいです。飛行軌道等の詳細データにつきましては担当官があたります」

マクラウド大統領の額に大粒の汗が浮いている。受話器を置くと、彼は足早に隣の補佐官の部屋に入ってしまった。

「早急に、U-23基地の件の詳細を調査報告すること。ミサイルを追尾して、その結果を報告せよ。関係機関に米国と同盟国の動きの注視を命じ、一時間ごとに報告するように。すぐ安全保障会議を招集したまえ」

マクラウドは執務室に戻っても落ち着かなかった。本当に核を搭載していないのか。起爆装置のみ取り外しただけで、ウランやプルトニウムはそのままなのか。

「まさか……」

マクラウドは一抹の懸念を抱き、椅子に座っては立ち上がる。彼は何度も同じことを繰り返した。

17

「極東のU-23基地からミサイルが飛来する。アラスカ上空で迎撃し、必ず撃墜すべし」

ブルース大統領は「あの、バカが……」と呟きながら、空軍あがりの完全保障担当補佐官に命じた。

ホットラインの内容はすでに関係箇所へ伝わり、全軍は初動態勢を整え始めていた。M-3ミサイル基地司令官にも伝えられ、万一に備えて、自治体を通して近辺住民に対し避難の要請が下された。

「安全保障会議のメンバーを招集しております。会議をはじめますか」
補佐官は当然なこのような顔を向ける。

「ふむ、そうだな」

ブルース大統領は胸を張り、いささか肩を怒らせて、隣の会議室に入ってしまった。胸を張って肩を怒らせるのは、小柄で細目の体躯を少しでも大きく見せるための彼なりの工夫だった。

「すでにご存知の事態が発生した。ご意見を承りたい」

ブルースは補佐官が席に着くのを待たずに、副大統領、國務長官、国防長官ら委員の面々を順次見渡し、発言を促す。

「アラスカで撃ち落とせなかったらどうなるのか。そのまま、M-3基地へ突入することになるのか」

「多分、そうなることでしょう」

補佐官が大統領に代わり応える。

「テロの仕業だというが、あの国が故意に仕組んだことではないのか」

「もし、アラスカで迎撃に失敗すれば、当方の防衛能力の程度が公になる。」

それに乗じて新たな攻撃を仕掛けてくる可能性があるのではないか」

「弾道ミサイルがM-3ミサイル基地に命中すればどうなるのか。新たな攻撃を誘発する可能性があるのか」

「とにかく、結果的に、今回のミサイル誤発射でわれわれの能力が試されることになるわけか。これは慎重に対応策を考える必要がある」

「時間がないのだ。アラスカでの撃墜に失敗したら、M-3へのミサイル着弾と同時に、わが軍がつぎの行動をとれるように用意しておくべきだ。もしかしたら、これが先制攻撃かもしれないからな」

委員の発言がつづく。

「大統領、ご決断を」

黙って耳を傾けている大統領に補佐官が促す。

「そのまえに聞いておきたいことがある。そのミサイルがM-3基地のサイロに命中したらどうなるのか。サイロのなかにセットしてある当方の核弾頭ミサイルが核爆発を起すのか。たしか、あそこのサイロには多核弾頭弾道ミサイルが格納されているのではなかったか」

「今回は誤発射されたミサイルには核爆弾や火薬などの爆発物が一切搭載されていないということです。もしそうだとすれば、M-3ミサイル基地で核爆発を誘発するようなことは考えられません」

「そう願いたいね」

壁いっぱいには広がっている大型スクリーンの左上片隅に弾道ミサイルらしい物体が映し出された。ようやくカメラがミサイルを捉えたらしい。

迎撃ミサイルが発射された。

白い尾を引いて迎撃ミサイルが上昇し、炸裂した。

弾道ミサイルが迎撃ミサイルの攻撃をくぐり抜け、猛スピードでスクリー

ンを横切っていく。秒速一〇数キロメートルになっているのか。

委員たちは呆然としてスクリーンを見上げている。

迎撃は失敗の終わった。

M-3ミサイル基地が映し出された。動きが慌ただしくなった。車が猛スピードで走り去る。

ミサイルの影らしい映像がふたたびスクリーンの左上に現れた。つぎの瞬間、小さな砂煙が立った。黒い物体が飛んだ。

「M-3基地からかなり離れているようだが……」

副大統領が呟く。

「少し離れたところに格納サイロがある。サイロに命中したのだ」

国防長官がかすれた声を発した。

映像をズームアップしていく。ミサイル落下の砂ぼこりが収まると、大きな穴が現れた。穴のなかで巨大な物体が揺れている。

揺れが徐々に激しくなった。

「どうしたんだ。M-3ミサイル基地と連絡がとれないのか」

鼻からズリ下りたままの目がねを直そうともせず、国防長官が叫ぶ。

大統領はじっとスクリーンに釘付けになったままだ。なにが起きているのか見当もつかないらしい。

穴から白い煙が噴きだした。

「核弾頭ミサイルが……飛び出そうとしている」

ミサイルのつるつるに磨かれた円形の尖端が顔を出した。つぎの瞬間、白煙の尾を引いて上昇し、見る間に小さくなっていった。

「大統領閣下、不幸なことが起きました」

「不幸なことはつづきますな」

マクラウド大統領は大きな手で受話器のくびれを鷲掴みし、ホットラインの奥から受話器を通して流れてくる甲高いブルース大統領の声に抑制の効いた低い声で応える。

マクラウド大統領はM-3ミサイル基地の動きをすでに把握していた。

「貴国のミサイル攻撃に自動的に反応して当方のミサイルが発射されたようです。目下大気圏外に飛びだしたところで爆破処理を試みる準備をしています。当方は最善をつくします。これ以上予期しない不幸なことが起きないことを祈ります」

「了解いたしました」

ホットラインの内容は即座に招集中の安全保障会議に報告された。

「確か、M-3サイロのミサイルは多核弾頭タイプのはずだ。うまく処理できるのか。失敗したときに備えておく必要がある」

マクラウドの隣の黒縁のメガネをかけた、一見、神経質に見える男だ。

「もし、空中でいっせいに複数の核弾頭が爆発したらどうなるのか」

太った国防相が目を光らせてつづける。

「……もし領空で爆発するなら、ほぼ間違いなくわが領土全土が放射能で汚染されてしまうことだろう。これはわが国に対する甚大な侵害行為だ。

反撃を考えるべきだ」

「テロとはいえ、当方のミサイルの誤発射が発端だ。命中精度が抜群の技

術によって飛びだした『しっぺ返し』ミサイルのために全面核戦争に突入することだけは避けるべきではないか」

「大統領、『しっぺ返し』ミサイルは敵の策略かもしれませんが。ミサイル攻撃に対して故意にミサイルを打ち返したのかもしれない」

「なにを言うか。きみたちもスクリーンでM-3ミサイルサイロの様子を見ていたではないか。スクリーンを見たまえ。冷静に願いたい」

「大統領、時間がありません。」決断を」

「ミサイル爆破の残骸が落下する可能地点を管轄する司令部へ警戒態勢を取るように命じる」

大型スクリーンに映し出された上昇中のミサイルのエンジンが停止し、本体が角度を変えて弾道軌道に乗った瞬間、爆発が起こった。ミサイルが破壊され、残骸が白煙の尾を引いて落下しはじめた。

つぎの瞬間、ひとつの残骸がふたたび破裂した。巨大な火の玉が生じた。と同時に、スクリーンの映像が消えた。

「どうしたんだ……」

「大統領、核爆発で電磁パルスが生じ、電離層が攪乱したのじゃないかと思いますが、只今、確認しているところです」

「うむ」

大統領は不吉な予感に襲われた。

補佐官が戻ってきた。

「東シベリア海からラプテフ海にかけての大気圏外で核爆発がありました。前後計六回あったようです」

「それで……」

「爆発の瞬間、電磁パルスの発生のほか、強烈な中性子が放射された模様

です」

「中性子爆弾だったというのか」

中性子は工場や建物などのコンクリート構造のインフラを破壊せずに、そのなかにいる人間や生物を殺傷する。またコンピュータなどのIC機器をも損傷するのだ。

「爆発よって破裂した本体や弾頭の破片の一部がわが領土にも落下し、広範囲にわたって散乱する可能性が大です。このため、シベリアのかなりの範囲が放射能で汚染されることとなります」

「……………」

大統領は苦悩の色を浮かべた。

「それに空中に飛散した微細な放射性浮遊粒子が長時間にわたって上空を漂い、しばらくの間大気中に留まることになると思いますが、やがて広い範囲にわたって徐々に降下するものと思われれます」

「これは謀略だ。自国内で爆破せずに、故意に、わが領土上空に達するのを待って核を爆発させたのだ」

軍人あがりの国防相はウオッカ焼けた赤ら顔をさらに紅潮させた。

「シベリア全域に国家災害警報を出し、地区の軍、自治体および関係団体に対して放射能汚染区域からの避難命令を発せよ。緊急に住民を安全な場所へ誘導し、安全に避難させること」

大統領はさらに爆破破片等の早急な回収、高濃度汚染地域の特定と立ち入り禁止措置、河川や湖沼からの飲用水取水禁止、農作物の採り入れと食用禁止、牛乳や牛肉等放射能汚染のおそれのある食品の検査強化等の徹底を指示する。

「軍が暴走することがないように厳重に監視すること」

大統領は国防相に念を押す。

19

「マクラウド大統領に繋いでくれ」

「大統領、ホットラインが繋がりません」

「ほかのラインはどうか。なんでもいいから、とにかく、マクラウド大統領を呼びだしてくれ」

ブルース大統領は後悔していた。弾道ミサイルの爆破処理が遅れ、領海上空になったことを率直に謝るほかにないと思った。

自国に被害が生じるおそれのあるアラスカ上空での爆破処理を避け、北極海（以前は北極に位置していたが、地球逆転でいまは南極に位置しているのだ）上空で大気圏外へ出たところでの爆破を選択したが、それは誤りだった。核弾頭暴発による自国の危険を回避するための一瞬の躊躇が後れを取ったのだ。

その結果、シベリア全域を放射能汚染に巻き込むことになってしまった。ミサイルが上昇を始めたとき、即座に爆破処理を命ずべきだった。

「まだか」

ブルース大統領は落ち着かなかった。自国の小さな国益を守るために、自国おろか、世界中を破壊の淵に追い落とすことになったのではないか。彼は気が気でなかった。

「だめです。爆発の際に生じた電磁パルスの影響か、あるいは放射された大量の中性子で広範囲にわたって通信や情報処理のハードウェアがダメー

ジを受け、機能停止しているのかもしれない」

核爆弾が高高度で爆発すると、放射したガンマ線やX線などによって空気がイオン化されてEMP（電磁パルス）が生じる。電磁パルスは無線やレーダーを妨害する。

また核爆発で発生する中性子は生物やIC機器などにもダメージをおよぼす。その目的のために、とくに強烈な中性子を放射するように改造された中性子爆弾も開発され、実戦に配備されていたのだ。

「あのミサイルの弾頭には……」

「はい。通常の核爆弾のほかに、中性子爆弾も装備しているハイブリッドタイプの多核弾頭型です」

先に中性子爆弾が中性子を放射して、まず兵士など戦闘員の抵抗を排除し、つづいて通常の核爆発で施設を破壊するのだ。

「とにかく、ロシア領空内での核爆発は当方の作ではないことだけを早く伝えなければ……、誤解を招いては取り返しがつかないことになってしまふ。あらゆる手段を講じて一刻も早く連絡を取るようにな」

大統領は補佐官に命じると、執務机を離れ、隣の会議室へ向った。

大型スクリーンには白黒の乱れた線のみで、手に取るように見えていたいつもの地球の映像はなかった。

「地球探査衛星も電磁パルスか中性子でダメージを受けたのか、それとも強烈な放射能を帯びたチリの雲に覆われているのか」

彼は一瞬、暗黒の世界に突き落とされたような不安を感じた。

暗闇の世界はしんとして音がなかった。音がないのに、何者かが闇のなかで声を潜め、目を凝らしてじっと見つめているような感じがした。一寸でも動けば一撃を喰らいそうだった。

大統領は反撃をおそれた。かといって自分から攻勢に出るわけにいかなかった。

多数の乗客を乗せた五機の国際線ジャンボ旅客機と核爆弾を搭載している一機のB2型戦略爆撃機がたまたま北極海上空の成層圏を飛行していた。

そのとき、M-3ミサイル基地から発射した多核弾頭弾道ミサイルが大気圏外で爆破し、つぎつぎと核爆発を起した。

電磁パルスが発生した。大量の中性子が放射された。

ジャンボ旅客機は一瞬、強烈な中性子を被爆し、核爆発の激しい衝撃を受けた。

つぎの瞬間、一機のジャンボ旅客機は大きく傾き、バラバラに分解した。

他の四機は急激な失速によって、北極海へ墜落していった。

B2は突然失速した。北極海の上空で失速したB2は、コントロールを失い、コントロール不能のままロシア領空へ浸入していく。

緊急発進の命を受け、飛行場を飛び立った二機のミグ戦闘機がB2を追う。領空侵犯のB2は急速に速度が落ち、みるみる高度を下げた。

戦闘機は着陸を指示するが、B2からなんの応答もなかった。

戦闘機が警告のミサイルを二度つづけて発射した。ミサイルはB2の横をかすめて前方で炸裂した。

B2爆撃機は図体を右に傾むかせたまましばらく飛びつづけていたが、ついに完全にコントロールを失った。

機体の一部が剥がれ落ち、黒煙を吐いた。左翼で小爆発が起きた。つづいて大爆発が起き、胴体に亀裂が走り、真二つに割れ、墜落していく。

大爆発とともに、搭載されていた核爆弾が放り出され、落下していった。

二発の核爆弾が連なって地表へ向って落ちていく。一発目が空中で炸裂した。連鎖して二発目の核爆発が起きた。

巨大なキノコ雲が立ち上った。これが合図となって、国中のミサイル格納サイロの蓋を開放し、臨戦態勢にあった多核弾頭弾道ミサイルが一斉に発射された。

第一のターゲットは軍事関連施設だ。ICBM等の核兵器発射関連施設（ミサイル基地）、核兵器貯蔵所、空軍基地、陸軍基地、海軍基地（軍港、潜水艦基地）、指揮・管理・レーダー、早期警戒システム、ソース（対潜水中聴音機網）などが第一撃の目標だった。

つぎのターゲットは、都市（人口）関連、経済・産業・エネルギー関連、海峡封鎖等交通通信関連の諸施設だった。

攻撃ターゲットは必ずしも交戦当事国のものに限定されなかった。攻撃ターゲットは交戦当事国のほかに、非交戦当事国にもおよんだ。

核のターゲットは戦後の世界情勢をも考慮し、世界中を攻撃の対象として戦略的に決定するのだ。核戦争後、非交戦国が「漁夫の利」をえて国際政治を支配することがないようにするためだった。

交戦国共倒れ型核戦争においては、交戦当事国非当事国の区別がなかった。必然的に全世界を巻き込み、全面核戦争へとエスカレートしていくのだ。

20

「旅客機が……」

「どうしたんだ。テロか」

掃木はテレビにかじりついている真有に目を向けた。

シベリア海上空で、数機の国際線ジャンボ旅客機が相次いで墜落したニュースが世界を駆け巡っていた。事故原因についてはあれこれ推測されていたが、未だ全く不明だった。

「旅客機が数機一緒に墜落するなんて、信じられない」

真有は目をテレビに向けたまま、呟く。

掃木は真有を連れて、大学の研究室に入り浸っていた。

彼に与えられた二〇平方メートルほどの研究室にはこじんまりとしたキッチンや洗面用の設備が完備してあった。収納型簡易ベッドをも備え、寝泊まりできる仕様になっていて、夜を徹して作業することが可能だった。

テロで小型核兵器が使用されたことを知ってから、彼はどこへ行くにも真有を伴った。彼は真有と離ればなれになることを極度におそれた。

一体、なにが起きたのだろうか。数機の旅客機が同時に被害を受けたのなら、落雷などではあるまい。核兵器によるテロだったのか。それとも地球の上空になにか奇つ怪な現象が発生したのだろうか。

掃木にはその正体が分からなかった。ただ得体のしれないなものか、両手を広げてじわじわと迫ってくるようだった。彼は払い除けようと必死にもがく。だが勢いよく払った手は空しく宙をきるだけだった。

突然、窓際の机の上で、これまで一度も鳴ったことのない電話のベルが踊りだすようにけたたましく鳴った。

掃木は現実に引き戻された。机に近づき、受話器に手をかけた。もしかしら間違い電話じゃないかと思ひ、もう一度ベルが鳴るのを待った。

「掃木くん、大変なことになった。すぐ、来てくれ」

池田だった。彼は右野とともに、予備首都建設に加わっていた。最初に手掛けたのは小山の注文した核シエルトの機能を合わせ持つ「臨時官邸」だった。

臨時官邸には情報通信センターが付属して設置され、池田は責任者に予定されていた。センターができれば、掃木も大学の研究室からそちらへ移動することになっていたのだ。

「どうしたんですか」

「詳しいことを話している時間がない。そちらへへりを回したから、もうすぐ着く。それに乗るように。もちろん、お嬢さんも一緒だ。いいね」

こう言うと、池田は一方的に電話を切った。

一体、大変なこととはなんだろうか。池田がセンターの設備について意見を求めてきたとき、掃木は臨時官邸の建設に格好な鍾乳洞が見つかり、自衛隊の作業員総出で建設がはじまっていることを知らされた。完成をみて、竣工の最終チェックの立ち合いか。だがそれにしてはへりですぐ来いとは大げさ過ぎる。

一瞬、不吉な予感が彼の頭を過った。

「真有、ここから移動しなければならぬことになった。すぐ用意しなさい」

真有は怪訝な顔をして、大きな目で彼をじっと見たが、緊急事態であるらしいと察したのか、急いで椅子から立ち上がり、鞆を取りだして準備を始めた。

なにが起こったのだろうか。池田が特別な情報に接して、彼に核シエルトへ避難させようとしたのだろうか。すると旅客機墜落はやはり核爆発が原因だったのか。

「さあ、早く……」

へりの爆音が近づいてくる。

21

「大統領、ロシアが弾道ミサイルをつぎつぎと発射しています。二〇分後には第一弾が領空に突入します」

安全保障担当補佐官があたふたと大統領執務室に飛び込んできた。

「なんだと。マクラウド大統領にはまだ繋がらないのか。妨害しているのは誰だ」

ブルースは猜疑の目を向け、苛々して大声をあげる。

「誰も妨害してません。うまくいかないだけです」

「ジョン、きみがやってみたまえ。どのラインでもいいから、繋ぐのだ」

ブルース大統領は傍らの首席秘書官に命じた。

「大統領、マクラウド大統領閣下です」

「不幸な出来事がつづいているのですか。貴国の領空で当方の核が爆発したのは全くの不測の事態でした。心からお詫びいたします。ところで、貴国のミサイルが当方へ向って飛来しているようですが、宣戦布告を発したわけではないでしょうね。もし、宣戦布告がまだでしたら、発射した貴国のICBMを即刻爆破処理してください。食い止めることができなければ、世界が全面核戦争へ突入することでしょう。そうなれば、われわれだけでなく、全人類が滅亡の危機を迎えることになります」

「分かりました。軍の一部が暴走し出しているのかもしれませんが。最善を

つくしてみます」

マクラウド大統領は発射したICBMの詳細データの提供を約すると、ラインは切れた。

「ロシアのICBMを迎撃せよ。迎撃だけだ。決してロシア本土へミサイル攻撃してはならない」

ブルース大統領は国防長官に命じた。

「ICBMが命中すれば、わが軍の反撃能力がゼロになってしまいます。それでもいいのですか」

「反撃能力がゼロになるというのか。大げさに言うな。敵のICBMに合わせて当方もICBMを打てばどうなるか。いくらロシアのICBMの命中精度がよくても、世界中で作戦行動している二〇隻余の戦略原潜までが一撃で全滅するわけでもあるまい。たとえ、それらが全滅したとしても、国際社会が黙ってはいまい。とにかく、落ち着け。落ち着いてロシアの第一撃のみを迎撃するんだ。その結果を見てから、必要ならそのとき反撃を考えればいいのだ」

「戦略原潜のミサイルはまだ……」

国防長官は自説を唱えだす。

ブルース大統領は国防長官に背を向け、隣室へ入っていく。

大統領には国防長官がなにを言いたいのかわかり切っていた。彼は以前から地球逆転によって生じたGPSデータの問題点を指摘していたのだ。

大統領は大型スクリーンの前に立った。攪乱していた映像がおさまり、地球の姿を映し出していた。

ブルースは賭けに出たのだった。彼はICBMの一斉発射はマクラウド

の指示によるものではないと踏んでいた。

わが国が絶対優勢な戦略原子力潜水艦を擁していることはマクラウドも十分承知している。これには多数の弾道ミサイルが搭載されており、たとえば、GPSデータに不備があっても、当方がまだまだ圧倒的に優位にあるのだ。だから、マクラウドは自ら手を出すようなこと決してしないはずだ。

だがとかく軍は独走しがちだった。武器を持たなければ使いたがる。絶対的な巨大な力を持つ核兵器となれば、なおさら使いたくなるのだ。

情報が不足し、あやしい雰囲気になると極めて危険だった。視野狭窄に陥り、疑心暗鬼に囚われ、ついには盲目となって自己抑制を忘れ、自己制御の効かない救いがたい症状を呈するのだ。そして敵よりも早く手を出そうともがく。

ブルースはスクリーンを見ながら、固く両手を握りしめた。

標的となっているサイロへの攻撃は先制攻撃でなければ有効ではない。ミサイルをいまから発射しても、すでに発射されてもぬけの殻となってしまうサイロを攻撃するだけだった。

ブルース大統領はこころのなかに巣造りを始めた疑心暗鬼と闘いながら、じっとスクリーンを見入っていた。

第三章

22

ICBM（大陸間弾道ミサイル）やSLBM（潜水艦発射弾道ミサイル）が世界の空を飛び交い、世界中がキノコ雲に覆われた。

米国、ロシアはもちろん、西欧諸国、東欧諸国、カナダ、日本、中国、韓国、北朝鮮、インド、パキスタン、イラン、トルコ、イスラエル、オーストラリア、東南アジア諸国、それに南米大陸やアフリカ大陸の主だった国々の軍事施設が核攻撃を受けて一斉に炎上した。大都市も一瞬のうちに破壊され、経済・産業・交通通信・エネルギー・浄水関連の諸施設も炎につつまれ、灰燼に帰した。

一瞬の出来事だった。

一〇メガトン級の核爆弾が上空四〇キロメートルを超える高高度で爆発し、電磁パルスと中性子の雨を降らす。と同時に、軍事施設を攻撃する核爆弾が地表で炸裂した。

つづいて、世界中の人口二〇万人を超える都市と主だった経済・産業・エネルギー・通信交通関連施設の上空数一〇〇メートルで核爆弾が空中爆発した。

いたるところで、巨大な火球が出現し、キノコ雲が立ち上った。

海洋では原子力潜水艦を狙って投下された核爆弾が水中深くで破裂し、水柱を立て、海面を持ち上げる。

核戦争は交戦当事国間だけの戦争ではなかった。

核ミサイルの打ち合いには勝ち負けがない。交戦当事国双方が核ミサイルを打ち合い、互いに破壊し合い、双方が壊滅する、いわば心中型戦争なのだ。

この種の闘いでは、当事国だけが攻撃し合えば戦争をやった自分たちだけが致命的なダメージを受け、戦争に加わらない非戦闘国が無傷で残る。これでは交戦国が自ら滅んで、非交戦国の天下盗りを手助けすることになってしまう。これでは交戦国にとってなんのために戦争をやったのか分からない。核戦争では必然的に非戦闘国をも巻き込む全面戦争へとエスカレートしてしまうのだ。

地上、空中あるいは海中での核爆発で、地球の大気圏、水圏、陸地圏のすべてが放射能で汚染し尽くされていく。

核爆発による放射能汚染にはいくつかの段階があった。

爆発時のエネルギーの大半は爆風と熱線となって放出するが、核爆発ではその約一五パーセントが電離放射線となって放射するのだ。

電離放射線の約三分の一が核爆発から一分以内に放射される初期放射線だ。残りが残留放射線といわれるもので、放射性物質（放射性降下物）から放出されるといふ。爆発で上空に舞い上がった放射能を帯びた物質（放射性物質）が放射性降下物となって地上に落下し、長期にわたって地球環境を汚染する（地球環境放射能汚染）のだ。

初期放射線は主に中性子やガンマ線だ。爆心地から数キロの範囲に放射し、大量被爆すれば急性の放射線障害を引き起し、死にいたる。

一方、放射性降下物は核爆発によって生じた放射性物質で、成層圏まで舞い上がって浮遊しつづけ、広範囲かつ長期にわたって地球環境を汚染す

る。放射性物質がいつどこにどれほどの量が降下するかは爆発の状況や風速、風向などの気象条件に左右されるのだ。

放射性降下物は核爆発の高度の違いによって、構成が異なる。

地表もしくは地表に近いところで爆発すれば、爆発時に生じる火球によって地表から大量の土壌やさまざまな破片が吸い上げられ、表面に放射能が凝縮して放射化し、放射性物質となる。こうしてできた放射性物質は粒子が比較的大きいので、一日かそこらで地表へ落下する。降下する範囲は爆心地がら数百キロ程度で、「初期」あるいは「局地的」放射性降下物と呼ばれる。

これに対して、爆発高度が高く、火球が地表に接触しない場合にはガス状核分裂生成物が凝縮して粒子状になるが、粒子は極めて小さい。これはなかなか降下せず、成層圏を吹く風に流され、地球規模に拡散する。何カ月もかかってようやく地球全域に広く降下することになるが、この種のものには「遅延」あるいは「地球的」放射性降下物といわれている。

軍事施設や経済・産業・エネルギー施設とともに、世界中の人口二〇万人以上の大都市のすべてが核の標的となった。

つぎつぎと標的目掛けて核弾頭ミサイルが発射された。ほんの一瞬のうち、世界中で合計二万余発の核爆弾が発射され、爆発破裂した。

大都市に対しては、約二〇〇発もの核弾頭を搭載する戦略原子力潜水艦からミサイルが矢継ぎ早に放たれた。電磁パルスの洗礼を受けて電子機器類は破壊され、すでに発電施設が機能停止し、交通通信がマヒした都市上空で、核弾頭が爆発した。

巨大な火球とともに、爆風、熱線、放射線が放出した。火球は土壌を蒸

発し、爆風で細かく破壊した都市の破片を吸い上げ、巨大なキノコ雲となって上昇する。

爆風は数千口先の建物をもなぎ倒し、超高温の熱線があらゆるものを焼き尽くした。多くの人びとが即死した。残った人びとは致命的な熱傷を負い、大量の放射線を被爆した。一面は焼け野原と化した。

爆発の瞬間に放射される初期放射線の中性子やガンマ線が人体に当たると、吸収されて放射線被爆が起こる。量が多ければ、急性放射線症で死亡する。

核爆撃を受けた世界のすべての都市では、上空で核爆弾が爆発し、爆風、熱線、初期放射線で人口の約半数が瞬時に死亡した。世界人口が一挙に三分の二に減った。

しばらくして、雨や雪とともに大量の放射性降下物が落下し、生き残った人びとに降りかかった。

地表に降下し蓄積した放射性降下物は放射線を放射して、何年何十年にわたってさまざまな障害を引き起す。

放射性降下物には一日程度で比較的狭い範囲に落下するものと、長い時間を掛けて広範囲に落下するものがある。前者は比較的大粒の放射性降下物で、狭い範囲で人々に重い障害をおよぼす。これに対して、小粒の放射性降下物は空中を浮遊して拡散し、広い範囲の人間集団に対して障害をおよぼすのだ。

だが全世界を巻き込んだ全面核戦争では、世界中で同時にいくつもの核爆発が起こる。小粒の放射性降下物でも空中へ舞い上がる量は多くなり、降下量はかなりなものとなって、障害も重大化する。

二万発もの核爆発によって、現代文明都市は爆風、熱線、放射線で瞬時に破壊された。つづいて空から降り注ぐ放射性降下物によって、地球は広

く長期にわたり放射能で汚染されることになってしまった。

だがこれだけでは済まなかった。

23

「外へ出てみようか。もう一週間経ったから、放射線量も大分減ったろう」

突然、池田が呟く。

核爆発から生じたさまざまな放射性核種は放射線を出して急速に減衰していく。核爆発後の六カ月間をみると、放射線量が一週間後に一〇分の一なり、七週間後には一〇〇分の一になるといふ。多くの放射性核種は放射線を放射して崩壊し、別の核種へ変わっていくのだ。

「まだ危険じゃないですか」

パソコンのままで作業している掃木がディスプレイに目を据えた向まま応える。

「危険？ こんなことになって、いまさら危険もないぞ。こんなところについてまでも閉じ込められていては運動不足で身体が鈍ってしまうよね、真ちゃん」

池田は立ち上がって腕を回しながら、ディスプレイのままで地球探査衛星からの映像を見入っている真有に目を止めた。

「先生、この黒い雲はなんですか。だんだん広がっているようですが……」

池田が退屈して話相手を欲しがっているのに気付いて、真有は笑顔を向ける。

掃木と真有は池田が差し回したヘリに乗って、間一髪のところ、できた

ばかりのシエルターへ避難したのだった。

臨時官邸付属の情報通信センターだけあって設備は最新で、申し分なかった。自家発電装置を備えた大容量の超高速のスーパーコンピュータが設置されており、世界中との情報のやり取りが瞬時に可能だった。地球探査衛星からのデータを直接受けて処理することもできた。

掃木のほかに、三人のスタッフが加わる予定だったが、そのまゝに核戦争が勃発してしまった。

スタッフが不足していたものの、世界中で連続する核爆発の影響で電離層が攪乱しているのか、電波が乱れ、仕事にならない日が続いた。

やがて核爆発が途絶えると、手不足が露になった。掃木は真有を動員して地球探査衛星からの映像データのチェックに当らせた。

「火災の煙じゃないのかね」

核爆発で形成された何千何万の火球から放射された熱線が、広範囲にわたって激しい火災を引き起したのだ。

都市、工場地帯、石油タンクヤード、石油・ガスパイプライン、森林、農地、油田、ガス田、石炭採掘場など、いたるところから黒煙が立ち上り、巨大な黒い雲となって地球を覆っていた。

時折、タンクが爆発して備蓄していた原油が燃え上がり、赤い炎を噴き上げる。

「これは酷い。太陽光線が遮られてしまうぞ」

池田の驚きの声に掃木もそばに寄る。

油田地帯では採油装置や送油パイプが破壊され、洩れた原油に引火して炎上し、黒煙を上げて激しく燃えつづけていた。

何条もの黒煙が長い帯となって天空へ昇り、空一面に広がっている。探

査衛星のカメラが真上に差し掛ると、画面から地球の映像が消え、黒一色となった。

「あー……、太陽が無くなる」

真有の口から悲鳴が洩れた。大波に攫われ、「箱船」で暗黒の海を漂った日々が蘇ってきたらしい。

「油煙か。何日つづきますか」

「少なくとも数週間はつづきそうだね」

「先生、核戦争はもう終りですかね。日本は交戦国でもないのに、北海道にも相当数ミサイルが飛んできたようですが……、軍事基地ばかりでなく、ほかにも相当被害が出たところがあるんでしょうね」

北海道では一〇数箇所に核弾頭が飛来した。札幌、旭川の上空で核爆発があった。巨大な火球が一面を火の海にした。千歳、函館、釧路も攻撃を受けた。苫小牧の工場地帯で石油タンクが炎上しつづけていた。

日本には近海を含めて二〇〇発を超える核爆頭ミサイルが打ち込まれた。

日本列島には未だに米軍基地が点在していたし、自衛隊駐屯地も各地にあった。これらのほか、通信基地や民間と共用している空港や港湾など軍関連施設が第一撃のターゲットになった。

つづいて、都市、工業地帯、経済・産業施設、通信交通施設、エネルギー施設が標的に選ばれた。ダメージ拡大のために、なかでも核再処理施設や原子力発電所などの核関連施設への攻撃が徹底して実行された。

日本列島の海岸に連なって建設された原子力発電所や核再処理施設は海面急上昇の被害を受け、一部が水没したものもあり、殆どが休止状態であったが、核ミサイル攻撃にあり、徹底的に破壊された。日本列島の沿岸は核爆発と原子力施設から放出された大量の放射性物質によって完璧に汚染さ

れつくしてしまった。

たとえ日本が米国の同盟国でなくとも、世界第二の経済力を保有する日本が全面核戦争の埒外に置かれ、攻撃対象から外されることは考えられなかった。交戦国とは無関係の国に対しても、将来の脅威を理由に核ミサイルが容赦なく打ち込まれるからだ。

今回発射された二万発余の核弾頭ミサイルは、数千発が米国を中心に北米大陸と南米大陸へ向かい、数千発がロシアを中心にユーラシア大陸へ飛んだ。数千発が西欧や東欧を中心にヨーロッパ全土とアフリカ大陸を襲った。数千発が中国大陸、日本列島、朝鮮半島、インド亜大陸、アラビア半島、中東や東南・北東アジアなどアジア全土とオーストラリア大陸、ニュージーランドを目標指したのだ。

「双方とも核ミサイルを打ち尽くしたと思うけどね。小山くんの話では、海中を潜航している原子力潜水艦にはまだ核弾頭がかなり残っているらしい……」

戦略原子力潜水艦は二〇〇発もの核弾頭ミサイルを搭載でき、先制攻撃に対する有効な反撃手段のひとつだった。常時、世界の海を三〇数隻もの各国の原子力潜水艦が回遊していたのだ。それ以外に核を搭載できる通常の潜水艦も多数就航していた。

海中深く潜航する原子力潜水艦に対する攻撃には核爆弾を使用する。水深八〇メートル以深で五〇〇キロトンもの核爆弾を爆発させるのだ。

「じゃ、まだ日本近海は危険なんですね。日本海溝は原子力潜水艦のルートになっているんですよ。でも深海での核爆発は……」

掃木の頭を不安が過った。彼は地球再逆転が気掛りだった。すでに何回か深海で核爆発があったのではないか。

ウラジオストクにロシアの潜水艦基地がある。日本列島の太平洋側に日本海溝が走り、それが千島・カムチャツカ海溝からアリューシャン海溝へと連なっている。ここは米口原子力潜水艦の潜行ルートだった。

地球はサッカーボールのように、互いに接する一〇数枚の岩でできたプレートで覆われているが、プレートはその下にあるマンテルの動きによって年数センチのスピードで移動する。海溝はプレートとプレートが接し、両者がぶつかり合い、その一方が沈み込んでいくところに形成される溝だ。水深六〇〇メートルから一万メートルほどの深いところに形成される。

日本海溝は太平洋プレートと東北日本が乗っている北アメリカプレート（もっと小さいオホーツク海プレートだという説もある）がぶつかり、太平洋プレートが潜り込むところだ。太平洋プレートとフィリピン海プレートがぶつかっているところには伊豆・小笠原海溝がある。このようなところは地震多発地帯でもあった。

もし、日本海溝に潜んでいる原子力潜水艦をめぐって海中核爆発がいついたら、どうなるか。二〇〇発もの核弾頭ミサイルを搭載した原子力潜水艦が海溝の割れ目で大爆発を起したらどんなことになるのか。

彼は核爆発で地球システムを揺るような影響が生じないか、心配だった。

24

「核爆発から最低一〇日間は屋内に避難していたほうがいいんです。本当は半年位外に出ないほうがいいんですけどね……」

地之木は避難してきた二組の老夫婦と一緒に、薪ストーブを取り囲んでお茶を飲んでいた。突然、一番年老いた夫婦がどうしても家が家へ帰りたいと言いついたのだ。

彼は窓の外に目を移す。雨滴の跡で窓ガラスが白く汚れている。

「少なくとももうしばらくここにいなければなりませんよ。まだ強い放射能を放つ放射性物質が降っているから、いま外へ出てはいけません」

彼は必死に押し止める。

かつては二〇数人の子供たちが学んでいた小学校の分校の教室だった。老夫婦たちの子供もここで学んだにちがいない。

地之木は池田らと別れ、「新しい文明村」を建設するために北海道北部を訪ね回ったとき、山間部にある廃村あとに格好な空家の建物を見付け、中海清子とともに移り住んだのだった。

集落には一〇数軒の古家が点在していたが、殆ど空家だった。二組の老夫婦だけが息子や行政の説得にもかかわらず、ひっそりと生活をつづけていた。

集落から離れた高台に古びた小さな分校があった。二人はそこを借り受け、拠点とした。

右野は時折顔を見せるが、小山から押し付けられた予備首都建設プロジェクトの仕事が忙しく、現場にいるほうが多かった。本田喜久枝は弁護士稼業からなかなか足を洗うことができなかったが、核戦争直前にあたふたと駆け込んできた。

彼らは一番大きい教室を選んで、核シェルター造りを始めた。放射能に汚染した空気が浸入しないように破れた窓を補修し、目張りをした。外気取入れ口にフィルターを重ねた。

籠城用に、薪と食料と水を確保する必要があった。薪は近くの山にいくらでもあった。馬鈴薯などは近隣の町村まで買い出しにいった。問題は水だった。古井戸があったが、水が出ない。水槽に貯めてみたが、凍結する恐れがあった。ポリ容器に小分けして教室の片隅に置くほかいい考えがなかった。

「なんか不穏な動きがあったらしい。基地の米軍があわただしく出撃準備を始めているそうだ」

右野は小山から米口の動きを知らされて、すぐ地之木へ連絡してきた。

そのことを清子に告げると、彼は同じ集落に住む老夫婦たちを迎えに行き、無理やり分校へ避難してもらったのだった。

避難してすぐ電気が切れた。地鳴りのような響きが遠くでした。空が急に明るくなった。それから黒い雲が空一杯に広がった。

日中でも夕暮れ時のような薄暗い日がつづいた。時折、雨が降った。

「今年は雪が遅いのう」

老夫婦たちが窓の外を眺めている。

地球逆転以来、日本に四季がなくなった。地球が逆転したとき、地球の自転軸（地軸）が太陽に対して垂直となって、四季を生みだしてた地軸の傾斜がなくなったのだ。

かつて北半球に位置した日本の一月は冬であったが、反対の極の南半球は真夏だった。地球逆転で極が逆転し、南半球に位置するようになった日本はいま冬ではなく、真夏の筈であった。だが地軸の傾斜がなくなったために四季もなくなり、北半球と南半球とで季節が逆転することもなくなっていた。

「冬がなくなったのよ」

喜久枝が口を挟む。

「この雨はガラスを汚すのかねえ」

窓ガラスに黒い小さな粒が付着していた。

大気中に浮遊する微粒子が雨滴に捉えられ、雨となって降ってきたらしい。

核爆発で森林や石油タンクが燃え、無数の細かい粒子が飛散して飛んできたのだと説明しても、老人たちは誰一人信じようとしなかった。一日中薄暗いのは厚い雨雲のせいだと言い張った。空が灰色に見えるのもそのせいだ、と信じて疑わなかった。

「天から降ってくる雨が危険だなんて……」

テレビもラジオも途絶えていた。電気も止まってしまい、いつ復旧するのかさえ分からなかった。

地之木にさえも核戦争がいつ始まって、いつ終わったのか判然としないのだ。いや、老夫婦たちを相手していると、核戦争があったのかさえ分からなくなっていくようだった。

25

「まるで夜みたい」

分厚いガラスの小さなのぞき窓越しに外を見て、真有が呟く。

シェルターのうえに黒煙がたなびき、午後になると射込んでいた弱々しい陽光を完全にさえぎり、夕闇に閉ざされたようだった。

掃木はディスプレイから顔を上げ、真有に目を向ける。真有は一点を凝

視して動かない。一〇〇日以上つづいた「箱船」での海洋漂流生活がふたび蘇ってきたのだろうか。

彼にはまだ真有を十分理解できないところがあった。三歳のとき、強引に引き裂かれるようにして別れて以来、妻の父親である祖父と大叔母のもとで育てられた。高校へ進学を控え、ようやく彼が引取ろうとしていたとき、祖父と大叔母と一緒に避難していた「箱船」もろとも大波に攫われたのだった。

彼はなんとか真有のころのなかを知りたいと思いつつも、長いプランクの日々が妨害して、どうしていいのかわからず、ただじっと見守るだけだった。

シェルターでの生活はまだ二週間ほどしか経っていなかった。だが彼にはとても長い間閉じこもっているように思えた。一日も早く、真有をシェルターの生活から開放してやりたかった。

かといって、二万発もの核爆発で上空高く噴き上げられた大量の放射性物質が天空を彷徨いながら落下の機を窺っていることを思えば、シェルターから出ることはまだ危険なことだった。

日本の大都市は徹底的に破壊された。人口二〇万人を超す規模の都市は殆どが標的となった。攻撃を受けた都市では爆心地を中心に大量の犠牲者が出たが、海面急上昇に際して都市から避難した者も多かったことが幸いして、沿岸都市では予想したほどの犠牲者が出なかったところもあった。工場地帯、空港、港湾は徹底的に破壊された。どうしたのか、ひとつの都市に何発もの核ミサイルが打ち込まれたところもあった。

彼はふたたび、ディスプレイに目を戻す。

原子力潜水艦への核攻撃が気になってしょうがなかった。海溝で核爆発

が起これば地殻やプレートにどんな影響が生じるだろうか。

彼は発生可能な現象をいろいろ想定し、影響を推し量る。

日本列島の太平洋側を南北に日本海溝が走る。原子力潜水艦の通り道だ。

日本海溝へ向って太平洋プレートが迫り、東北日本が乗っている北アメリカプレートとぶつかり合って日本列島の下に潜り込んでいるのだ。そこで核爆発が起これば、プレートに対してどんな衝撃がおよぶのだろうか。

プレートとプレートが接しているところの溝に水が入り込み、岩石が水を含むと、岩石の接触面が滑りやすくなってプレートの沈み込むスピードが早まるらしい。もし核爆発の衝撃で太平洋プレートと北アメリカプレートの接触面に大量の海水が流れ込んだらどうなるか。

プレートが滑り出すのか。太平洋プレートが滑り出して、プレートの他方の端の辺りで激震が発生するのだろうか。それとも太平洋プレートが潜り込んでいる東北日本が大揺れするのだろうか。

もうひとつ厄介なことがあった。水を含んだ岩石がプレートとともに深く沈むと、岩石が化学変化で水を放出するという。

水はプレート境界の性質を変えたり、マントルの岩石を融解させたりするらしい。また水そのものが地中深い高温高圧下で変貌し、超臨界水となる。これらによって、地殻やマントルにさまざまな動きや変化が生じることになるのだ。

彼は海溝での核爆発が地球再逆転を誘発するのではないかと恐れた。ディスプレイを睨み、その兆候がないかと必死で探した。

だが地表の観測機器は破壊され、ディスプレイには宇宙衛星から送られるデータのほか、これといったデータがなかった。

彼は暗中模索しつづけた。一瞬黒い影を見たような気がした。

「ああ……」

日本海溝に黒い細長い物体が横たわっている。原子力潜水艦だ。核攻撃を受け、航行不能となって沈没したのにちがいない。多数の核爆弾を搭載したまま、一万気圧もの水圧に耐えきれなくなって押し潰されていく。

何発もの核爆弾が一斉に爆発する……。
全身に戦慄が走った。

26

「掃木くん、どうも変だ」

池田が右野を従えて、あたふたとワーキングルームへ駆け込んできた。

「え、どうしましたか……」

一度、海溝核爆発のことを詳しく話しておこうかと思っていた矢先、突然池田が目の前に現れた。掃木は驚いて椅子から立ち上がった。そんな彼を椅子に押し返し、池田はディスプレイに地球を写しださせた。

「まだ、戦争が終わっていないらしいのだ。日本の近くのどこかで、核爆発の兆候はないかね」

何度か爆発音らしい響きを身体に感じたというのだ。

地球探査衛星の画像は黒煙に妨げられて不鮮明なところがあったが、どこにも新しい核爆発があったらしい痕跡は見当たらなかった。

「いつですか。わたしには感じませんでしたか……」

「確かにあったな」

池田は右野を振り返る。右野は軽く頷いた。

ディスプレイの画像をズームアップして何度もチェックしたが、それらしいものは見つからなかった。

「もしかしたら海中での核爆発かもしれませんがね、日本海溝での……」

彼は身体が震えるのを感じた。

「え、まさか……」

驚く二人に、彼はいままで考えていたことを話した。

「原子力潜水艦には約二〇〇発もの核弾頭ミサイルが搭載されているんです。半分でも残っていれば、艦内には核爆弾が一〇〇発もあることになりま。これが一度に爆発すれば、一万メートルの海底でもかなりの衝撃を発するんじゃないですか」

「……」

二人は顔を見合わせている。

「こんなことが起こるとは考えられないかもしれませんが、もしこのようなことが起これば……、本当に日本海溝の底で核爆発があったなら……」

彼はふたたび戦慄を覚えた。

「地球再逆転の恐れがあるんだな」

池田の目を見て、彼は頷いた。

「それじゃ、小山にそのことを伝えておこう。いいですね」

小山は首相とともに、核戦争の勃発と同時に奥多摩に設営した臨時官邸におり、地球再逆転に備えて用意した北海道の臨時官邸にまだ移動していなかった。予備に設けられた臨時官邸は北海道のほかにも長野や福島にも予備的に用意しており、そのときの情勢によって移動先を決めることになっているらしい。

「右野さん、あくまで、その恐れありという程度にしておいてください。」

地球再逆転までいくかどうか、いまのところ予測できません。地軸が多少揺れる程度で収まるかもしれませんし……」

「掃木くん、この際、少々オーバーでもはっきり言ったほうがいいんじゃないかね。日本は核爆弾で大被害を被っているんだ。さらなる試練に躊躇していてもはじまらない。日本の将来が掛かっている」

池田は顔を紅潮させて、急ぎ立てる。

「先生、そんなことを言われても、データが全然ないのですよ」

「まあ、いいじゃないか。政治家の阿呆どもは脅かしておけばいい。それより海溝で核爆発があったかチェックしよう。右野くん、小山補佐官に連絡したついでに、太平洋岸で海の色や潮位になんかの変化がなかったか聞いて貰えないかね」

言い終わると、池田はディスプレイのまえに椅子をもってきて、ふたたび熱心にチェックしはじめた。

27

「ジュディか……、無事だったか……」

掃木は声がつづかなかった。衛星通信のせいか、声不鮮明だった。だが確かに彼女の柔らかい声だった。彼女の声だと分かったとき、彼は込み上げるものを感じた。

機会あるごとに、彼は何度もジュディを呼びつづけていた。だがこれまで返事がなかった。全面核戦争も終わったらしいのに、いくら呼んでも返事がなかった。

ACARの通信衛星用の受信アンテナが破壊されてしまったのだろうか。それともACARが被爆したのだろうか。

彼は不吉な予感を抱きながら、何度もディスプレイに北米大陸の中央部を写しだし、チェックを重ねた。

地球探査衛星のカメラが写し出した地球はどこどころが黒煙で覆われて判然としないところが多かった。透けて見える地表はいままで見たことがないようにすっかり変貌していた。

核爆撃を受けたところはまるで月面のようなだった。いくらズームアップしてもどこにもかつての都市の面影は残っていなかった。崩壊したビルの瓦礫もなかった。コンクリートの塊、ガラスの破片、鉄筋などの金属片といった残骸の一切合切が核爆発の巨大な火球に呑み込まれて蒸発してしまったのだろうか。

黒煙が空を覆って地表の画像に不鮮明な箇所もあったせいか、長年彼が研究をつづけていたACARのビルディングを探し出すことはできなかった。彼には米国全土が廃虚と化したように思えた。

それでも彼は黒い煙の下にジュディがいるような気がして諦めきれずにいた。彼は未練がましく、機会あるごとに、折りたたみ携帯電話を開いて、もう一回、もう一回とジュディ・ワイズを呼びつづけていたのだった。

「有平、ああ、有平ね。ご無事だったのね……」

彼女の声を耳にした途端、彼の脳裡に彼女のなんとも言えない匂いのした柔らかい感触が突然蘇ってきた。体中を熱いものが駆け巡った。

「ああ……、きみも無事だった……」

すぐにも会いたかった。

「ええ、真有は……、『箱船』後遺症は治ったかしら」

真有は急に震え出すことがあって、ジューディは後遺症にちがいないと言
い張っていたのだ。

「元氣だ。ところで……、地球の動きが変わったことはないかな」

彼は真有の視線を感じて、科学者に戻った。

「五時間ほどまえ、カリフォルニア沖で大地震があったらしいわ」

「本当か。もしかしたら……」

彼は日本海溝での原子力潜水艦爆発と太平洋プレートとの関連について考
えていたことを話した。

「分かったわ。わたしも今回の戦争での核爆発が一方の半球に集中してい
たので気にしていたのよ。注意して地球の動きをしてみるわ。観測デー
タも有平へ配信するようにするから。津波に注意して……」

彼は電話を切ると、急いで右野を探した。

地震発生が五時間まえだとすると、早ければ数時間後、遅くとも一〇数
時間後には第一波が日本列島へ押し寄せてくる。

「カリフォルニア沖で大地震があったそうだ」

右野は隣の部屋で電話中だった。彼は構わず大きな声を出した。

「え？ 一寸待って下さい」と言っ、耳から携帯を離すと、「掃木先生、
小山が電話口にあります。代わって説明してくれませんか。地球再逆転がな
ぜ問題なのか」と言い、携帯を差し出した。

「掃木です。カリフォルニア沖で大地震があったようですが、そちらに情
報が入っていますか。津波が押し寄せてきます」

「え？ 今度は津波ですか」

小山の間延びした声が衛星通信のせいで一層間延びして聞こえる。

「日本列島の太平洋岸に大津波がやってくるかもしれません」

「いつですか」

「一寸正確には分かりかねますが、多分、数時間から一〇数時間後でし
ょう」

ハワイの太平洋津波警報センターも日本の気象庁も核戦争の被害を受け、
いまだ警報を発令することができなかった。

「そうですか……」

そう返事したきり、小山は長い間押し黙ったままにいる。

「早く津波警報を出して、関係市町村へ連絡を……」

掃木はやきもきして叫ぶ。

「は、はい……」

小山の返答を聞く前に、彼は携帯を右野へ突っ返した。

右野はにやにやして受け取ると、そのまま切ってしまった。

「彼は地球が再逆転してもとに戻るなら、なにも問題はない。むしろ願っ
たり叶ったりじゃないのかというんだ。むしろ早くそうなって欲しいと又
カすんだ」

「……………」

「なにしろ、今回の大被害で動きがとれないらしいんだ。自衛隊を動員し
て遺体処理や負傷者の治療を行なっているようだが、自衛隊にも大被害が
出ているし、爆心地ではまだ強い放射線を放射している。防護服を着ての
作業が大変らしい」

「ちらりちらりと視線を走らせながら低い声で呟くように言う右野を、掃
木はぼんやりと眺めていた。

「いつになったら晴れるのかね」

分校の教室を改造した避難所で、老夫婦が窓から空を眺めていた。

「そのうち、晴れますよ」

ストーブの脇で、地之木が声を掛ける。

「もう、何日なるべ」

「一〇日、いや、二週間以上だな」

急に大粒の雨が降ってはしばらくするとからりと止んだ。こんなことが一日のうちに何回の繰り返しされた。だが黒煙は去らず、夕暮れのような薄暗い空は日中でも一向に明るくならなかった。

地之木にはなにが起きているのか分からなかった。

停電で電灯は点かず、テレビは消えたままだ。乾電池が切れたわけでもないのに、ラジオも受信できなかった。なにも発信していないのか、それともアンテナや電波の状態がわるいのか分からず、北海道にもなにか大変なことが起きているらしいとだけ感じていた。

右野からの情報で本田喜久枝が分校へ飛び込んできたことで、核戦争が間近に迫っているらしいことは薄々感じた。

しばらくして、はじめて外へ出たとき、念のため持ちだしたガイガーカウンターの音がなり立てるように鳴った。急いで屋内に戻ったが、そのとき近くでも核爆発があったのかと思った。

「雪になったぞ。積もるぞ」

老夫婦の一人が窓に寄って叫んだ。

薄暗くて気をつけないとなかなか見分けがつかないが、黒みがかった雪

がうつすらと一面を覆いはじめている。

核爆発によって生じた火災の黒煙や大気中に飛散し浮遊する放射性微粒子で日射が阻害され、気温が極端に低下したらしい。

「牛にも餌をやらなければ……」

一人が呟く。

「あの雪、黒っぽいでしょ。あれは空気が汚れているからです。油煙の煤もあるでしょうが、放射性降下物を相当含んでいると思いますよ。もうしばらくここに留まっていたほうがいいと思います……」

地之木は何度も同じことを繰り返した。

「ばあさんはどうする。ここにいろか。わしは家や家畜の様子を見てくる。

一緒にくるか」

積雪を見た老人は頑として聞き入れようとしなない。

「じゃ、放射能を計って確かめてみましょう」

彼は簡易の防護服を纏い、ガイガーカウンターをもって外へ出た。

旭川に核爆弾が投下されたとしても、分校までは二〇〇キロほど離れている。問題は放射性降下物による放射能汚染だった。

彼は地表に舞い降りた放射性降下物がどれほど蓄積しているか、分校の周囲を計って回る。道路など雨水で洗い流されたと思われる地点は放射能レベルが低く問題なかった。だが道路から一步牧場や畑に入るとまだまだレベルが高い。

「お家を一通り見て回ったら、また、ここに戻ってくるのですよ。いいね」

清子の声を背に、地之木は老夫婦と一緒に外へ出た。久しぶりの外出のせいか、老夫婦は地之木を置いてどんどん先へゆく。

「牧草を牛に食べさせると牛乳が飲めなくなりそうですからね。牧場に生えて

いる牧草はダメ、いいね。干し草だけですよ」

地之木は大声を出した。

核爆発によってさまざまな核種が大気中へ放出されるが、半減期の長い核種が遠くまで風で運ばれ、広い範囲を汚染する。なかでも半減期が八日のヨウ素131が問題だった。

ヨウ素の放射能が10分の1に減退するのに約四週間かかる。もしヨウ素131に汚染された牧草を牛が食べると、牛乳がヨウ素131で汚染される。それを飲めば、体内に放射性物質（ヨウ素131）も取り込まれて体内に蓄積する。

放射能汚染による障害には、体外から放射線を受けるいわゆる外部被爆によるもののほかに、牛乳などの食物摂取や呼吸を通して放射性粒子を体内へ取り込むことによって生じるいわゆる内部被爆によるものがある。半減期の長い核種が体内に取り込まれて蓄積すると、長い間体内で放射線を放射しつづけるので、その間内部被爆がつづくことになるのだ。

核分裂から生じる放射性降下物にはヨウ素よりも半減期の長い核種が多い。ことに、ストロンチウム90やセシウム137が問題だ（半減期はそれぞれ二八年、三〇年と長い）。

ストロンチウム90は体内に入ると、骨に沈着する。セシウム137は軟組織に取り込まれるが、そこでベータ線やガンマ線を放出して内部から身体を被爆しつづけるのだ。

地之木は老夫婦が家の中に入るのを確かめると、一瞬、この足で、近くの街まで出掛けてなにか起きたのか調べようかと思ひ、坂を下り始めた。

時折、雪まじりの冷たい風が吹く。顔に吹きつけた雪が水滴となって頬を濡らす。

彼は足を止めて空を見上げた。

空を覆っている暗い灰色の雲から大きな雪が落ちてくる。

彼は帰りの雪の山道を思い、途中から引き返して分校へ戻っていった。

29

「火災の煙かしら」

突然、真有が大きな声を発した。

「どうした……」

掃本は真有の背後からディスプレイを覗き込む。

ディスプレイに写し出された大陸の一部からもくもくと煙が立ち上り、空いっぱい広がっている。目を凝らすと、いくつかの煙の帯が上空で広がって一緒になっているようだった。

「どこ……」

「エクアドル、ペルー、いや、チリかしら」

「あ、噴煙だ」

噴火しているのは、エクアドルのコトパクス山とサンガイ山。それにペルーのミステイ山か。

一日置いて、チリのカプリコ山、ピジャリカ山、チリ・アルゼンチンのマイポ山などが噴火した。

前後して、ジャワ島やニューギニア島で火山の噴火がつづいた。さらに、ニューギランド北島へ飛び火した。

「どうしたのかな」

掃木の連絡を受けて飛んできた池田が怪訝な顔でディスプレイを覗き込んだ。

「かつての南半球だけの火山が活動期に入るというのも変ですが……」

「うむ、核戦争の影響かね」

「そんなことがありますか」

「核爆発の九九パーセントがかつての北半球で起こった。地球の半分だけに、巨大な衝撃を与えたんだ。それも西と東ヨーロッパ、北アメリカ東海岸と西海岸、東アジアといった狭い範囲に核爆弾の八〇パーセントを打ち込んでいる。それに反発して、南半球が反応しているのかもしれない」

「先生、そんなこと言っていていいんですか」

掃木は半ば呆れて、まじまじと池田の顔を見た。

「きみ流に言えばそういうことになるんじゃないのかね」

掃木の思考方法はひらめき型で、インスピレーションを重視するものであった。これに対して、池田は論理を重んじるタイプだった。だが近ごろの二人はなぜか逆転気味なのだ。

「かつての北半球上空は核爆発で生じた放射性物質や油煙などのさまざまな浮遊性微粒子で覆い尽くされ、日射が遮ぎられてしまっているが、南半球の空はまだからりと晴れて雲ひとつない。強烈な直射日光で地表は暑くてしようがない。そこで火山を噴火させ、噴煙で天空を覆うことにしたのさ。空を彷徨う核爆発の微粒子もいずれ地球全体に広がり、いま噴き出している火山性微粒子と一緒に、天空全体を覆い尽くしてしまうことになるだろうかね」

彼は池田の珍説をにやにやして聞いていたが、ふと、核爆発と火山噴火とになんらかの因果関係があるように思えてきた。

両者間にどんな因果関係が考えうるか、彼はディスプレイを見ながら必死に考えつづけた。だがこれといったいい考えはなかなか浮かばない。

彼は噴火している火山をひとつひとつ確かめるように順々と追っていた。エクアドル、ペルー、チリへと動かしていった彼の目に南極大陸が飛び込んできた。

彼は目を転じて、ジャワ島、ニューギニア島、ニュージーランド北島へと順を追う。ふたたび目の前に南極大陸が現れた。

海面急上昇後においても、南極大陸の大半は未だに氷床で覆われている。

南極大陸の氷床は、地球逆転の際、かなりの量が海中へ滑落して海面を急上昇させたが、まだ大量の氷床が残っているのだ。だが氷床には多数の亀裂が走り、氷床はいまも大崩落を繰り返しているのだった。

海面急上昇によって世界の多くの沿岸都市が水没した。今回の全面核戦争で大半の都市や工業地帯などの人口稠密地帯は灰燼に帰した。

これらによって、人為的な二酸化炭素の排出量が激減した。だが、大気中の二酸化炭素量は殆ど変化なく、地球温暖化は惰性のようにつづいていった。ただ空を覆う黒煙が日射を妨げ、地表にとどく太陽エネルギーが三分の一から半分程度減少したので、かつての北半球はこのところ、気温が低下傾向にあった。

彼は南極大陸の画像を目で追いながら、このままの状態がしばらくつづけばいずれ地球温暖化も解消し、氷床の亀裂も氷で塞がれていくだろうと思っただ。そうなれば氷床の大崩落もなくなって、海面上昇も収まることになるかもしれない。

彼は目を転じた。

そのとき、氷床の一部が薄赤褐色を帯びて見えた。彼は火山灰が降り積

もったのかと思い、目を凝らした。

一瞬、ニュージーランド沖からチリの先端に至る太平洋に面した南極大陸沿岸に連なる火山群が不意に火を噴き、大爆発したように感じた。

30

「有平、地軸が揺れ出しているみたい。データを送るからチェックしてみ
て」

ジュディ・ワイズだった。

掃木はデータを受け取ると、すぐチェックをはじめた。彼女から送られてきたデータは一見同じ数値が羅列してあるようにみえた。だがよくみるとところどころに幾分大きな数字が混じっている。

彼はふと逆立ちコマを思い浮かべた。最初は普通のスピードで回っているコマが突然逆立ちするのだ。逆立ちしたコマは何事もなかったかのように逆立ちしたまま回りつづける。

回転するコマが逆立ちするとき、微かに揺らぐ。

彼は地軸の微かな揺らぎが地球再逆転の合図かもしれないと思った。

「パパ、ヘンよ。南極大陸が爆発している」

真有だ。いつものようにディスプレイのまえに座って、地球探査衛星の画像チェックをしていた。

「うん、どこ」

黒煙や噴煙に覆われ、地球の全貌が見えず、画像も鮮明さを欠きだして

いた。

真有はディスプレイの一部を指差した。指の先で白いものが微かに光っている。

ズームアップしていく。

彼は目を凝らした。

一瞬、画面を覆っていた薄い靄が消えた。

南極大陸の南極半島からロス海のアデア岬までの太平洋岸が大きく写しだされた。ここには三〇〇〇メートル級の高い山から五〇〇メートル足らず低い山まで、さまざまな高さの火山が連なっている。

南極大陸の氷床の下には数多くの溶岩湖があった。とすれば、広大な南極大陸には厚さ四〇〇〇メートルもある氷床の下に未だ発見されていない火山群が潜んでいるかもしれない。四〇〇〇メートルもの氷床の下ではマグマを噴きだしても爆発して氷床を割ることはできない。溶岩湖はそのとき形成されたにちがいない。

「これよ、ここも変だわ」

ラルセン棚氷はすでに崩落して流れてしまった。氷床が滑落して岩石が露出している南極半島の尖端のところどころで蒸気が噴き出していた。

アムンゼン海沿岸付近では三〇〇〇メートル級の火山のひとつが水蒸気爆発を起こし、白煙を上げている。棚氷が流れて広く開けたロス海を取り巻く沿岸部に散在する五つの三〇〇〇メートル級の火山から微かに噴煙が立ち上っていた。

彼は一瞬身体が凍りつくような恐怖を覚えた。いま白煙を上げている火山の水蒸気爆発はこれからはじまる人類の最終章の始まりの合図のように見えた。

水蒸気爆発を起した火山の回り、じつと身構えているアムンゼン海沿岸の火山群が連鎖して噴火し、一斉に溶岩を噴き上げる。ロス海沿岸の五つの三〇〇メートル級の火山が大音響とともに大量の溶岩を吹き散らし、溢れ出たマグマが氷床を溶かしながら氷床を押し流してゆく。

氷床の真下で氷の封印を施されて何千年何万年何十万年眠っていた火山群が目覚まし、大きな口をいっばいに開け、真つ赤なマグマを吐き出す。

その機を狙っていたかのように、地球は一度、二度、ブルツと身震いするように大きく揺れる。南極大陸が揺れ、氷床は亀裂を深め、砕け、流れ出す。

「ああ、真有……、大変なことになる」

彼の声が聞こえなかったのか、真有は円らな瞳を凝らしてディスプレイを一心に覗いてる。

「新しい噴火かしら……」

真有は呟きながら、画像をふたたびズームアップした。

アムンゼン海沿岸でじつと身構えていた火山群のひとつが動き出し、噴煙を上げている。隣の窪みからも微かに噴煙らしい白い煙が立上り出している。やがて火山群は一つ残らず噴きだすにちがいない。

彼は真有の背後からディスプレイを覗く。この付近は海面以下の地帯で、その上に二〇〇メートルもの厚さの氷床が広がっているとこだ。

海面上昇によって氷床が持ち上げられれば、氷床の下へ海水が流れ込んでいくだろう。氷床が浮遊し、崩壊し、海洋へ滑落していく。さらに海面が上昇し、さらに氷床を持ち上げる。

「真有、南極の氷床が全部海洋へ流れ出すことになるかもしれない」

真有はじつと掃木の目を見たまま、口を開こうとしない。彼は真有の背

に手を回して立ちつくしていた。

31

「なんだって、地軸が動きはじめたのか。やっぱり、地球が怒りだしたな」
池田と右野が飛び込んだ。

「海面が上昇します。右野さん、小山さんに連絡して、沿岸部から早く避難するように、日本全土に警報を出してください」

「いつですか、上昇するのは」

「分かりません。広い範囲が水没します。一刻も早く避難をはじめることです」
掃木は地球が揺らぎだしていること、南極大陸での火山活動と氷床の現在の状況を説明した。

「多分、今回の海面上昇は短期間のうちに数一〇メートル、いや、一〇〇メートルを超すにちがいません。時折、大波も押し寄せることもあるでしょうが、潮が満ちるようにじわじわとやってくるでしょう。気が付いたときには、すべてが海に呑み込まれてしまっているのです。だから一刻も早く避難する必要があります」

こう付け加えると、彼はACARのジュディ・ワイズを呼んだ。

「あ、有平、こっちから連絡しようと思っていたところなの。ポール・シフトが始まったわ。まえと違って、一寸、動きがヘンなの」

「動きがヘンって……」

「ランダムなの。まえば地球の自転軸（地軸）が太陽に対して垂直の方向で回転するように変化したでしょ。今度はデタラメなのよ。あっちへぶらぶら、「こちへぶらぶら」といった感じなのね。データを送るから見てみて」
「……………」

彼は不吉な予感がした。逆立ちコマが逆立ちに失敗して倒れてしまうのか。

「どうかした？」

「ううん、南極大陸で火山が活動期に入ったようだ。噴火がつづいている」

「真有が見付けたのね」

「そうだよ。でも今度は……………」

彼は一瞬顔を綻ばせたが、すぐ真顔に戻る。

「世界へ警報を出せないかな。やってみてくれないか」

海面が超上昇するおそれがあった。なんとしてもこれ以上犠牲者を増やしたくなかった。

地軸の動きは気まぐれだった。ジュディ・ワイズから送られたデータを見て、彼はふたたび不吉な気分を襲われた。地軸の動きはまるで自分の居場所が分からず、探し求めて彷徨っているような感じだった。

彼はふと地球の自転軸が定まらず、永遠に彷徨いつづけることになるのではないかと思った。地球は安住の地（位置）を追いだされ、安住の地が定まらないことに苛立ち、時折身を激しく震わせるにちがいない。

一瞬、ディスプレイのなかで、地球が激しく揺れた。地球が自ら自転軸を震わせ、全身に纏わりついて離れない放射能塵雲や黒い噴煙を必死に払い除けようとしているように思えた。

真有が振り返って、彼を見た。

「どうした……………」

「なんでもないわ。画像が一寸揺れたように見えただけかも…………、あ、ちがうわ。パパ、大変、ほら……………」

南極大陸の方々に水蒸気爆発が起きた。火山群が一斉に溶岩を噴いた。噴煙が空に広がり、氷床がつぎつぎに崩壊して南極海へ落ちていく。

天空では放射性降下物が地表を窺い、地上では海が陸地を呑み込もうと身構えていた。

第四章

32

「なんだと、潮位が一〇〇メートルも上昇するといふのか。小山くん、冗談も休み休み言いたまえ。大体、そんな水がどこにあるんだ」

小山には首相が苛立っていることは分かっていた。まだ黒いところが残っていた頭髪もすっかり白くなり、輝いてつやつやしていた肌も土色に変わってしまっている。だが現実には現実だ。彼のもとに各地から潮位上昇の報告が続々と届いていたのだ。

「南極大陸の氷床が滑落中です。氷床が全部海洋へ滑落すれば、海面が一〇〇メートル以上上昇するのです」

小山は容赦なく言い放つ。

南極大陸の面積は一四〇〇万平方キロメートルで、日本の約三八倍、オーストラリア大陸の約二倍弱だ。全土を二〇〇〇メートルから四〇〇〇メートルの分厚い氷床が覆い尽くしており、氷の全量は三〇〇〇万立方キロメートル以上もある。

地球表面の七〇パーセントが海洋で、その面積は約三億六一三〇万平方キロメートルある。南極大陸の約二五倍だ。氷床の厚さは平均二〇〇〇メートル以上あるが、二五〇〇メートルとすれば、単純に計算しても、氷の量は海面一〇〇メートル上昇分の量に匹敵するのだ。

「わが国は理不尽な核攻撃によって壊滅的被害を被ったばかりなんだ。そのうえ、潮位が一〇〇メートルも上昇すればどうなるんだ。島国の日本国

は手足をもがれ、消滅してしまうことになるのではないか」

「一刻も早く、住民を沿岸付近から避難させなければなりません。避難警報を発令していいですか」

こんなときに泣き言をいってもはじまらない。小山は首相執務室を出ると、携帯を取りだして連絡を取り始めた。

33

その日も、空は黒煙に覆われ、日中なのに夕暮れのような薄明かりの日だった。

上空数一〇〇メートルで爆発した核爆弾がつくりだした巨大な火球で焼け野原となった大都市の廃虚跡に黒いしみが広がっていく。水がしみ出るように地面を濡らしているのだ。

海水が溢れた。みるみる水高が増し、すべてが水の底に没していく。

放置されたままの遺体から小さな黒い塊がはじけた。ハエだ。腐敗した遺体に群がっていたハエが海水に驚き、一斉に飛び立ったのだ。

真っ黒に焼けただれた遺体が水の中で踊りだす。

海水は地面を這うように広がっていく。

段差のあるところで一端進行を止めて留まる。やがて水高が増し、段差を越えると、水はふたたび行進をはじめめる。

「先生、グラウンドが……」

若い看護助手が叫んだ。

高台に取り残された三階建ての小学校の校舎が避難所兼救急治療所となっていた。

爆心地から数キロ離れていたため、コンクリートの建物は倒壊を免れ、かろうじて残ったものの、窓ガラスは一枚残らず破壊された。窓枠まで飛ばされて跡形もないところもあった。屋根は完全に飛ばされ、二階と三階の床にもところどころに大きな穴が開いている。

「どうした……」

校舎より一、二メートル低いところにあるグラウンドに海水が押し寄せ、グラウンドを濡らし出していた。

薄明かりのなか、前方の焼け野原と化したかつての市街地には満々と水を湛えた風景が広がっている。水高が増して海水が広がってきたらしい。

「水が……」

「海水か……」

「どうしたんだ、ここまでくるのか」

「海面がまた上昇したのか」

窓に寄ってきた避難人が口々に叫ぶ。火傷を負って床に伏せている重傷者までが外を見ようと身を起こそうとした。

グラウンドの黒いしみがみるみる広がりにいった。

「先生、大丈夫ですか……」

「ふむ……、ここは海拔二、三メートルほどはあるはずだが……」

目の前には海水を遮るものはないもなかった。

地球逆転の際の一〇メートルにおよぶ海面急上昇で低地にある市街はすでに水浸しになっていた。そこへ核弾頭を付けたミサイルが来襲し、上空で爆発した。

核爆発から生じた巨大な火球が水没を免れた市街地を舐め尽くした。都市全体が一面焼け野原と化したのだった。

「先生、本部からなんの連絡もないのですか」

本部との連絡用の衛星通信電話も途切れがちだった。この数カ月の間、物資補給のヘリコプターが飛んできたのは二回しかなく、届けられた医療品や食料も満足できるものではなかった。その医療品や食料も底を突いていた。

避難民は爆風や火炎で破けたボロを纏ったまま、抜け落ちる頭髪を払い除けながら、じっと空腹に耐えていた。負傷者は十分な治療も施されないまま、身動きもできず、膿んできた火傷の苦痛に耐えるほかなかった。

「誰か、ラジオを持っているいないか」

避難民が持っているものは身に付けているボロしかなかった。

「きみも疲れたろう。少し休もう」

年老いた医師は壁に背をもたせて目を閉じた。

彼は夢の中で、ひたひたと迫ってくる水の音を聞いた。恐怖はなかった。むしろなにかしら懐かしい気分がした。遠い昔の出来事のような気がした。

「先生、大変です。校舎が水浸しになります」

看護助手が彼の身体を揺すっていた。

いつの間にか、グラウンドは水の底にあった。

グラウンドから校舎に入るコンクリートの階段が水に濡れ、水の尖端は入れ口を窺っている。

避難民は一階から二階へ移動しはじめていた。なかには外へ逃げ出すものもいた。

身動きできない何十人も重傷者をどうするか。

なんとか水の浸入を防ぐ方法はないか。

「みなさん、重傷者を二階へ運ぶのを手伝ってもらえませんか」

若い看護助手が避難民の間を回って歩く。

軽傷者は自力で階段を上っていく。重傷者でも歩行が可能であれば、看護助手二人が左右から抱え、なんとか本人の足で階段を上って移動した。問題は動けない重傷者だった。担架で運ぶほかないのだが、それには力のある男が六人欲しかった。自力で動ける避難民でも手足のどこかが怪我や火傷していたし、空腹を抱えていた。一度担架運びを手伝ったら、二度目はムリだった。力を出し尽くして、しばらくの間身動きすらできないありさまだった。

医師は重傷者でもできる限り自分の足で歩かせた。階段では左右で抱える二人のほかに、背後からもう一人が重傷者の身体を押しした。

ようやく最後の重傷者を二階に移したときには、一階の床はすっかり水に浸ってしまっていた。

その夜はみんながたくたくに疲れて深い眠りに落ちた。海水が二階の壁を濡らし始めたことに誰一人気付かなかった。

重傷者のなかには急激に容態が変化して誰にも気付かれることなく息を引取ったものもいた。重傷者だけではなかった。避難民のなかにも力がつきたのか、なんの前触れもなく、突然死んでいくものが相次いだ。

二階の床に水が押し寄せ、もう一度同じことが繰り返された。二階から三階への移動だ。ようやく移動し了えたときには、水はすでに三階に迫っていた。

床一面に水が広がっていく。

見る間に、水高が増した。立っているものの足元を濡らした。

足首まで水に浸かった。脹脛を濡らし、膝を襲う。

生暖かい海水が腰に達し、やがて胸もとを窺う。

穴だらけの屋根に上りものもいた。

三階に残された者たちは子供を抱え、つま先立ちで立ち、水中から必死に顔を出していた。力尽きて一人欠け、二人と欠けていった。

悲鳴もなく、ひとり、ふたりと静かに姿を消していく。すべての姿が消えたとき、水中から小さな泡がいくつか浮いて空中に消えた。

やがて、三階建ての校舎が完全に水中へ呑み込まれていった。

34

老人はすべての窓をいっばいに開放した。窓から海が迫って見える。

窓際に、ロッキングチェアを引き寄せた。

潮風が耳を擦る。まるでヨットでクルージングしている気分だった。

石造りのリゾートハウスが一軒、海面に顔を出し、波に洗われ、波間に浮いている。

海中に取り残された白い建物のそばに僅かに頭を出している岩が、かつてはそこが半島の尖端の小高い崖の上だったことを物語っていた。

白い建物は崖の上に砦のように聳えていた。だがリゾート客で賑わっていた半島は、地球逆転の際の海面急上昇で大半が水没してしまったのだ。

老人は一人、一軒残ったリゾートハウスに留まった。

小高い崖の上の白い建物は老人の楽園だった。

「グランパ、海面がまだまだ上昇するそうですよ。迎えにいきますからね。引き揚げる用意をしておいてね」

これが孫娘からの最後の電話だった。だが老人はそれが最後の電話だったとは知らなかった。

すぐあと、老人は遠くで鋭い光を放つ火球につづいて、大きなキノコ雲が立ち上るのを見た。しばらくすると、黒い雲が広がった。

方々から煙が立ち上り、空一面を覆い尽くした。日射が遮られ、暗い空になった。気温が下がり、冬のようなだった。

老人は待った。ロッキングチェアを揺すりながら。

イルカが跳ねる。

老人は微睡む。

ヨットが近づいてきた。

孫娘が両手を振っている。

微かに、海面が盛り上がった。だが老人には気付かなかった。

夜の帳が落ちて、老人はロッキングチェアから立ち上がり、ベッドに横たわる。

しばらくして、老人は深い眠りに落ちていった。

老人はベッドに横たわったまま、何日も過した。

いくら待っても、ヨットは現れなかった。

次第に、意識が朦朧とし、視界がぼけた。

海水がドアを破って浸入した。ベッドが浮き、揺らぐ。

老人はヨットのデッキに横たわり、日光浴している夢を見ていた。

水嵩が増していく。

ベッドを持ち上げ、天井へ運ぶ。

リゾートハウスが水中へ没した。

半島は完全に姿を消していった。

35

地球逆転前後の一〇メートルを超す海面急上昇で、大小の船舶が往来していた広大な河口は一面海となってしまった。

河川の両端を示す堤防は水中に姿を消した。船舶は逆流した河川水によって奥地へ押し上げられたり、引き潮で沖合へ流されていった。

魚介類や農作物を商う小舟が行き交い、年中賑わっていた網の目の水路が走るデルタ地帯も、無数の密集家屋ともども水没してしまっ

た。かつては河口から奥地へ連なる河川の回りに低地が広がり、無数の支流が流れ込み、流域には広大な熱帯雨林が繁茂していた。雲をつくり雨を降らせていた広大な流域も、海面急上昇で、一帯の熱帯雨林もろとも水浸しになってしまった。

大木を切り倒して開墾した広大な大豆畑は水中へ没し、シャベルカーやブルドーザーも水の底だ。番屋や飯場の建物は壊れ、水中に取り残されたままだった。

切り倒されて丸太になった木材が水面に浮かび、流れていく。

小舟が一艘、水面に浮いていた。

「お腹へったよう」

三歳ぐらいの男の子だ。船底で胸をはだけて赤子に乳を含ませている母

親に寄りかかり、執拗に纏わりついて離れようとしないう。

海面急上昇のとき、奥地の住民は一時木の上や船の上に逃れた。

しばらくすると、これ以上海面が上昇することはあるまいと水辺の僅かばかりの土地に家を建てた。

母子の小舟はどこからか迷い込んだのか、それともデルタの商い舟が流されてきたのか、そのまま水面に漂いつづけている。

突然、水面に白い波頭が立った。数センチほどの水の壁を押し立てて、海水が逆流してきたのだ。

小舟は大きく揺れた。

「マミー……、こわいよ」

「しっかりと掴まっているんだ」

母親は左腕に赤子を抱え、右手で幼児を脇に寄せた。

小舟は上流へ押し流されていく。

ふたたび、海面の急激な上昇がはじまったのだ。

家を建て始めたばかりの水辺の土地を濡らしたかと思うと、水が溢れ、一面が水浸しになっていく。

河川水の逆流がつづき、大量の海水が河川を上り、広がっていく。

水高が急に増し、水面が広がり出した。

小舟は激しく揺れた。

母と子は舟べりに必死にしがみついた。

数一〇メートルを超す大木が林立する熱帯雨林のなかにも水が流れ込む。

低木が水に吞まれ姿を消していく。満々と水を湛える水面に取り残されたように立っている大木も、やがて姿を消すだろう。

小舟は当てもなく流されていく。

大木が林立する熱帯雨林を新しい海が呑み込もうとしていた。

36

「水だ……」

地べたに横たわっていたひとり痩せた男が飛び起きた。まわりには身を寄せ合うように男たちがごろごろと横たわっているが、だれひとり男の声に応えない。

海水が目の前まで迫っていた。

男たちは一〇メートルの海面急上昇で難民となった。そのうえに、核爆発の放射線を大量に浴び、頭髮も抜け落ちた。

男たちは広がった新しい海の水際に腰を下ろし、ひたすら潮の引くのを待った。

一度は難民の群れに入ったものの、ふたたび引き返して自分の耕作地が水面から顔を出すのを待っていた。水が引いたとき、境界が分からなければ、いち早く境界線を引いたほうが勝ちなのだ。

海面急上昇で水中に消えてしまった大河のデルタ地帯は無数の支流が流れ込む水郷地帯で、一面真平らな沃野は彼らにとって年に三度も収穫できる米作黄金地帯だった。

毎日、海を見て風を感じ、海水の動きを観察しつづけた。

ある日、突然、かつての西と北の方（地球逆転で、いまは東と南だ）で、巨大な火球が出現した。つづいて、巨大なキノコ雲が立ち上った。

いつもと違う黒い雲が現れ、いつもよりかなり長い大雨が降った。

男たちは大雨のなか、海辺に腰を下ろしたまま、雨が止むのを待った。

大雨が止んだあと、男たちの頭髪には大量の砂がささっていた。

男たちは頭髪の砂をそのままに放置し、つぎのスコールが洗い流してくれるのを待った。スコールはすぐやってきた。だが頭髪が抜け落ち始めた。

「またかよ」

海水が地面を濡らし、横たわる背中を濡らす。

半身を起こし、海に目を向け、じっと窺う。

やがて、ひとり立ち、ふたり立つ。立ちあがった男たちは後ずさりしながら、後退しはじめる。

ひたひたと海水が打ち寄せ、足元を濡らした。

「あの噂は本当だったのか」

「うわさ……、どんな噂だ」

「国土が海の中に沈んでいく」

「え？ どこが……、ここが海の中にか」

海水が脹脛に迫っていた。

「おい、早く行こう」

「どこへ」

「海水が押し寄せて来ないところ……」

見渡すかぎり一面の平地だ。近くには丘や台地はなかった。

男たちはひたすら上流をめざす。

空腹に耐え、男たちは必死に歩く。だが海水の中を歩くのは容易ではなかった。まる一日歩いても、三、四〇キロが限度だった。

海水は一時間数一〇キロのスピードで広がっていく。男たちの足元の水高が増した。脹脛が没し、膝を濡らしている。男たちの歩くスピードが次

第に落ちていく。

「オレ、もうダメだ。先に行ってくれ」

「もう少しだ」

男は隣の男の左腕を取ると、自分の肩にかけ、右手で男の身体を抱えた。頭を上げて周囲を見渡す。

一生懸命歩いたのに、一面に水面が広がり、辺りには小高い丘も高い台地も見当たらなかった。

前に行く一団が次第に遠のいていく。

「さあ、行こう」

一息入れると、男は隣の男に促す。

「オレはもういい。早くしないと追いつけなくなるぞ」

「家族はいないのか」

「子供も連れも行方が分からない。前のときに……。それでここに探しきて、あそこで待っていたんだ」

「じゃ、ここで諦めちゃダメじゃないか。さあ……」

どんよりとした雲の多い日だった。日没したのか、闇が迫ってきた。

二人連れは歩き出した。水高が増している。膝を越して太股に達していた。

足は重かった。数歩も進まないのに身体がぐらつき、足元が覚束ない。

足が滑って大きくよろめいた拍子に、肩から腕が外れた。二人はばらばらに水中へ投げ出された。

水中へ転げた拍子に、男はしたたか水を飲んだ。ようやく立ち上がり、男は辺りを見回し、もうひとりの男を探した。何度見回しても、人影はなかった。

一〇数メートル先で、一瞬、水面から片手が突き出たように見えた。男は急いで近づく。

数歩進んだところで、突然深みに嵌まった。身体が水に流され、足が引つ張られるように沈んでいく。

水中では水が表面とは逆に流れているのだ。沖から押し寄せてきた水が表層を上流へ流れ、乾燥して粉末状になった粘土が溶けた土色の重い河水が下方へ潜り、沖合の方へ流れているのだ。

男は必死で水面に顔を出そうともがく。河川から離れようと歩いていたのに、いつの間にか、河川の本流に近づき、深みに嵌まり込んでしまっていたらしい。

奥地から流れ下る大河が河口付近で無数の支流をつくりだしていた。男はそのなかの河川のひとつに足をとられたのだった。

水中で男は激しく両手を動かした。水をかいたとき、なにかに手を打ち付けた。顔を出すと、水面にさまざまなものが出ていた。

男は必死で近くの材木をたぐり寄せると、身体を材木に載せるようにして両腕で掴まり、肩で息をついた。

男は濡れた手で顔を拭き、目を凝らす。もうひとりの男の姿は見当たらなかった。

材木がゆっくり上流の方へ流れているのに、水に浸かった足先が逆の方へ引つ張られているようだった。このことに気付くと、男は衣服で身体を材木に結わえ、足を材木に絡めて流れに身を任せた。

男を載せた材木はゆっくり上流をめざして流れていく。

37

「ここなら大丈夫だ」

「でも一番高いところで九〇メートルじゃないの。こんどは一〇〇メートルを超すそうよ」

「警報はいつもオーバーなんだ。大体、一〇〇メートルも海面が上昇するなんてあるもんか」

「お隣は引越す準備をしているわ」

「逃げ出すことはないさ。大丈夫だよ」

夫は六五歳で退職すると、老後を暖かい海辺で過したいという妻の希望を入れて、岬の丘陵を開発して建設された新興住宅団地に住まいを移した。

熟年夫婦の終の住み処となった住家は標高一〇〇メートルほどの丘陵の海に面した斜面の中腹にあった。頂上になると、周囲一円を一望できる見晴らし台があって、公園となっている。公園から尾根つたいに延びた近くの小高い丘に灯台があって、ここが標高九〇メートル地点だった。

地球逆転の際の海面急上昇によって、沿岸の建物や海辺の砂浜が消えた。漁港がなくなり、漁船が丘へ打ち上げられたりしたが、団地は安泰だった。

都会から離れていたことと、海からの風が貞越している地点だったことがさいわいして、核爆発の影響も殆ど受けなかった。

「こんどもなんでもないさ。地球温暖化による将来の海面上昇も十分見込んでここを選んだからな」

夫は妻に自慢気と言う。だが核戦争後、黒煙が空を覆いつづけ、いまだに晴れ上がらず、なんとなく不吉な予感を醸し出していた。

海面急上昇後、団地から引越す人びとがあとを断なかった。このことが

不安を煽るが、かといって、熟年夫婦にはようやく手に入れた終の住み処を易々と手放すことができなかった。

夫はときどき団地のある丘陵がぼつんと海の中に取り残されている夢を見た。

「お隣が明日引越すそうよ」

妻はすっかり白くなった頭髪の夫を見て、呟く。夫は目を海に向けたまま、返事しなかった。

海が盛り上がっているように見える。いよいよ海面の上昇がはじまるのか。

突然、海面が上昇し出した。

それ以来、一日一メートル前後のスピードで水高が増した。

夫は六〇メートルの高さにある住み処から、毎日、海面上昇を観察した。

二〇メートルを超えても、下の方に住んでいる人びとが避難して頂上へ登っていくのを見送る余裕があった。

海面はまだはるか下の方に見える。まだまだ大丈夫だ。三〇メートルも上昇すれば収まるにちがいない、と夫は高を括っていた。

三〇メートルを超した。

彼は幾分焦りだした。もしかしたらこのまま海面が上昇しつづけるような気がした。終の住み処も水没するかもしれないと思った。

「避難しようか」

「どこへ」

「頂上に決まっているじゃないか」

「だったら、まだいいわ。ここにいっても」

妻のほうが腰が座っていた。彼はもう一度住み処の標高が六〇メートルあることを思い浮かべた。

ここは終の住み処だ。たとえ海がここまで迫ってくるとしても、それまでにはまだ一カ月ほどの余裕があるだろう。目の前に海がやってくるまでここにいて、そのとき、ここを出ればいい。

彼は開き直って、迫り来る海を眺めた。

「あなた、海が……」

夫は飛び起きた。

まだ数メートルの余裕があると思っていたのに、朝起きてみると庭先まで海が迫っていた。海面上昇が収まるように、毎日祈っていたこともムダだったか。

ふたりは身支度を整え、纏めておいた荷物を抱え、外へ出た。

頂上の公園への舗装された道路に海水が染み出るように広がっていた。

老夫婦は頂上をめざして急ぐ。

彼は途中でわが家を振り返った。庭には水が溢れ、終の住み処と思っていた瀟洒な二階建てのわが家が水のなかに取り残されているのが目に入った。その途端、涙が込み上げてきた。

一瞬、いろんな思いが溢れ、さまざまな想い出が交差した。

「さあ、早く」

先に行く妻の声がした。

そのとき、不意に、今回は二〇メートルを超えて海面が上昇するにちがいないと感じた。標高九〇メートルの公園も水中へ没してしまうのだ。

「先に行ってくれ。忘れ物をしたので取りに行ってくるから」

「じゃ、先に行っているけど早く来てね」

妻の声を背に、彼はわが家へ駆け戻った。

水浸しの庭を横切り、テラスに上った。地面より一段と高いテラスはまだ濡れていなかった。

ベランダの階段を上り、リビングのガラス戸を開く。

彼はいつもテーブルの椅子に座って、何時間もはるか遠くの海を飽かずに眺めた。寄せて返す白波はまるで海が手招きして呼んでいるように見えた。

海は目の前に迫っている。テラスが濡れ、水が広がっていく。

やがてベランダを濡らし、リビングのフローリングを濡らすだろう。だが夫には動く気配すらなかった。

夫は両腕をテーブルに載せ、拳を握りしめ、迫り来る海を睨みつけていた。

遠くで、ヘリの爆音がした。

38

これまでの二回にわたる海面上昇で、すでに、一〇数メートル上昇していた。

まず、グリーンランド氷床の崩壊による数メートルの上昇があり、これにつづいて、地球逆転による一〇メートルを超える急上昇があった。

これまでの海面上昇によって、海岸から砂浜が消え、干潟が喪失してしまった。汀線の生態系が崩壊し、藻場やサンゴ礁にも日光が届かなくなっ

て、枯死し、消滅した。多くの魚介類が生息の場を失った。

また、ゼロメートル地帯の低地に広がる沿岸都市や埋め立て地に造成された沿岸工業地帯はもちろん、諸々の港湾施設も水没した。タンカー、フェリー、輸送船、漁船などの船舶は陸へ押し上げられたり、座礁したりした。船舶同士の衝突によって破損したものも多かった。

さらに、河川の奥まで海水が入り込み、淡水域の生態系に壊滅的打撃を与えた。飲み水などの生活用水や農業用水への利用に支障を来し、高潮や津波による氾濫区域も拡大していた。

これまでの海面上昇によって、すでに、このような影響を被っているところに、今回の一〇〇メートル超の海面超上昇が加わったのだった。

これで、地球の海面は以前に比べ、一一〇数メートル上昇したことになる。

だが今回の一〇〇メートルもの海面超上昇は、これまでの影響に追い打ちを掛けたばかりでなかった。実は、地球システムそのものに対して、これまでと全く異なる重大な影響をおよぼしていたのだ。

今回の一〇〇メートルにもおよぶ海面超上昇は極めて短い間に生じた。

このことがインパクトを一層大きくしたのだ。

南極大陸にあった膨大な量の氷床がほぼ三カ月ほどの極めて短い期間で崩壊、溶解、滑落を繰り返して海洋へ流出した。

その結果、氷床が溶けて生じた大量の淡水が地球上の全海域に広がり、海面が約一〇〇メートル上昇するとともに、陸地を広範囲にわたり水没させてしまった。いいかえると、海洋全域を一〇〇メートルの淡水で包むとともに、地球上から広大な陸地が喪失したのだ。

これはつぎのことを意味した。

南極大陸という地球上の一局地点における分厚い氷床が、地球の歴史からいえばほんの「一瞬」ともいえるべき短期間での喪失したということであり、これは地球表面の重量構造が突然急激に変化したということである。

すなわち、南極大陸から約三〇〇〇万立方メートルもの氷が突然姿を消し、南極大陸の岩盤にかかっていた約三〇〇〇万立方メートルもの氷の荷重、約三兆トンがゼロになったのだ。これは突然、南極大陸付近の重量が約三兆トン軽くなってしまったようなものだった。

これに代って、海洋全体で、ほぼ同等の重量が増した。その分、海底地殻への水圧が若干増えた。厳密に言えば、陸地が水没して新たに海となった箇所ではそれほど重量が増えず、海水が増えた分の重量が増えただけだった。汀線付近で一〇〇メートルの海面上昇があっても、陸地への浸水は勾配に応じていわばクサビ状に海水が入り込むだけなので、それに応じて水没陸地の岩盤へかかる海水の水圧や重量も変わるのだ。

また、海面の広がりや海水量の増大は潮汐に影響し、干満に変化が生じる。

もちろん、こればかりではなかった。

氷床溶融によって生じた大量の淡水が海域全域へ広がり、海面を覆い尽くしたが、これが地球上の熱エネルギーや物質の運搬・分配システムに多大な影響をおよぼすことになったのだ。

海洋にはコンベヤーベルトといわれている地球規模の海洋大循環（海洋熱塩循環）システムがある。これが地球最大の海洋における地球規模の熱エネルギーや物質の運搬・分配システムである。

このシステムの原動力となっているのが、海中深く沈み込む冷たく塩分

濃度の高い海水である。これが深層へ沈んでいき、深層水となって、大西洋から南極大陸の近くを通り抜け太平洋へと海底を流れ、まるでコンベヤーベルトのように大量の海水（深層水）を運ぶ。深層水は途中で冷気を放出し、希釈されてさまざまな物質を奪われて軽くなると、表面へ浮上して表面を流れてもとへもどっていく。

氷床溶融によって生じた大量の淡水が大循環の原動力である深層水の生成を阻害するおそれがあるのだ。

海洋へ流れ出た淡水は海水（塩水）とは簡単に混合しない。氷床が溶けてできた淡水は比較的純度が高い。これに対して、海水には塩分のほか、マグネシウムなどさまざまなミネラルなどが溶解しており、水温が同じであれば、淡水より密度が高く比重が重いのだ。

氷床が溶けてできた淡水は冷たく重いので、一端、海中に沈むが、周りの熱を奪い、すぐ温まり軽くなって浮上する。こうして淡水は海面に層をなして広がっていく。大量の淡水の補給がつづき、次第に海洋を覆っていく。

深層水形成ポイントは塩分濃度の濃厚な海水が冷気に出会い、急速に冷やされる海域だ。このようなポイントとして知られている箇所は北大西洋のほかにも数箇所あるらしいが、海水がいくら冷されても塩分濃度が低ければ深層へ沈み込まない。冷気があっても、濃厚な塩分濃度の海水がなければ、深層水が形成されることはない。

海面超上昇で、氷床溶融による大量の淡水が海面表層を覆い尽くしてしまっていたのだ。

深層へ沈み込む深層水の補給が滞れば、大循環コンベヤーベルトが停滞して、地球の熱エネルギーや物質の運搬・分配システムがストップしてし

まう。そして地球は寒冷化へ突入していく。

このほか、「地球の肺」が消滅がしてしまった。

一〇〇メートルにもおよぶ海面超上昇は地球上のさまざまなものを水没させたが、地球システムにとってもうひとつの大きな問題は「地球の肺」といわれていたアマゾンの熱帯雨林が水没してしまったことだった。

水没して姿を消したのはアマゾンの熱帯雨林ばかりではなかった。地球上の殆どの熱帯雨林が海面超上昇で水没したのだ。

熱帯雨林は大量の二酸化炭素を吸収し、大量の酸素を放出する。また大量の水蒸気を放出して雲を作り、降雨をもたらす。このような「肺」のような地球のシステムが失われてしまったのだった。

さらに、これらのいわば表面的な変化ばかりではなく、地球の地殻構造や内部構造への影響もあった。地球の重量バランスや重力バランスの急激な変化に加え、プレートへの荷重や海溝への水圧の変化によってマグマやマントルの活動にも微妙な変化が生じ、地殻変動を呼び起こすおそれがあった。

こうして海面超上昇は、地球システム全体を徐々に攪乱状態に陥れていったのだ。

第五章

39

「ようやく晴れたわ」

真有は窓から空を見上げた。

突然、黒いカーテンが開かれたようだった。

灼熱の太陽が顔を出した。雪は溶け、流れ出す。

核爆発から生じた放射能塵と火災の黒煙に火山からの噴煙が一緒になって、空全体に黒い浮遊性微粒子が広がり、数カ月にわたって地球を覆っていたのだ。

日射が遮られ、一日中夕暮れ時のようだった。気温が下り、氷点下となった。連日のように雪が舞った。うす黒い汚れた雪がうっすらと地上を覆い尽くした。

「まあ、海が……」

海が広がっていた。

南極大陸の噴火で崩落した大量の氷床が溶解して海の水嵩が増し、海面を押し上げていたのだ。

火山噴火は何カ月もつづいた。大量に噴き出したマグマが氷床を溶かし、氷床が崩壊、崩落した。大量の氷床が滑落していった。猛スピードで海面が上昇した。

一時、海面上昇スピードは若干衰えたが、時折、氷床の大崩壊があったりして上昇スピードが急に速まることさえあった。ある時期をこえると加

速し出した。

一カ月で二〇メートル以上も上昇し、いまでは一〇〇メートルを超えてしまった。以前の海面上昇分を加えると、すでに一一〇数メートルも上昇したことになるのか。

真有はディスプレイの画像で丹念に変化をチェックする。

世界の陸地が一変してしまった。

多くの島々は海中へ呑み込まれ、新しい海は大陸の奥まで広がった。

沿岸部で繁栄を誇った巨大都市は、かつての名残をとどめるかのようになり、超高層ビルやテレビ塔の先端を辛うじて残し、林立するビルともども姿を消した。

北米大陸では東海岸の各都市が海の中に完全に没した。ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン、ニューオーリンズは水中に没し、フロリダ半島全体とノースカロライナ、サウスカロライナ、ジョージア、ルイジアナの各州の低地が広く呑み込まれ、海となった。

ミシシッピ川流域が海となって広がり、五大湖と結ばれた。さらに、五大湖のオンタリオ湖から流れ出るセントローレンス川流域にも海水が押し寄せ、モントリオールを呑み込んで大西洋と連なった。

北米大陸が分断され、米国東部が一つの島と化した。

またカナダの北西地方やハドソン湾周辺には海が広がった。北極海諸島の多くが海中へ消えていった。

南米大陸ではアマゾン川流域が広大な範囲にわたり水没した。またラプラタ川の流域も同様だった。両方で水没面積は大陸全体の五分の一におよんだ。

ヨーロッパ、ユーラシア大陸も大変貌を遂げた。

ヨーロッパ大陸の沿岸部は軒並み水没した。フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ポーランドの各国では奥地深く海が広がった。イギリスでは多くの島嶼が水没し、低地が水浸しになり、国土が半分以下に縮小してしまった。

ことに酷いのは、ユーラシア大陸だった。モスクワ付近やウラル山脈付近を残すだけで、バルト海から西シベリア平原の大半が水没してしまった。

アフリカ大陸ではナイル川のデルタ地帯など地中海沿岸と西海岸、ギニア湾に面した諸国の沿岸が水没した。ソマリア、ケニア、モザンビークの沿岸デルタ地帯が水没し、海が広がった。

中国大陸では黄河と長江のデルタ地帯が完全に水没した。華北平原全体が海となった。香港も水没した。またアムール川からハルピンを経て渤海湾までが海となって、中国大陸の一部と朝鮮半島付近が海の中に取り残されてしまった。

フィリピン諸島、スマトラ島、ボルネオ島、ニューギニア島で低地が水没し、陸地が半減した。

メコン川とメナム川のデルタが広がるインドシナ半島で水没地帯が広がり、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムの諸国が軒並み広大な領土を失ってしまった。ガンジス川やジャムナ川のデルタ地帯のバングラデシュ、ガンジス川流域のヒンドスタン平原、インダス川流域とそのデルタ地帯からインド西部が広く水没してしまった。

チグリス川、ユーフラテス川の流域とデルタ地帯、アラビア半島のペルシャ湾沿岸と東端の沿岸部が水没した。

オーストラリア大陸では北部と南部で広範囲にわたって水没し、面積の三分の一を喪失した。

「世界の面積が五分の一ほど減ったみたい……」
真有は誰ともなしに呟いた。

40

「空高く舞い上がって上空に滞留していた放射性降下物が全部地上へ落下したというわけか」

晴れ上がった空に目を向け、地之木は大きく溜息をついた。

かつての北半球を中心とした核戦争で上空に舞い上がった放射能塵が南半球上空にも広がり、放射性降下物となって世界各地に降り注ぎ、大地や海洋のみならず、地球上のあらゆるものを放射能で汚染してしまったのだ。

清子も喜久枝も口を開こうとしない。備蓄した食糧も底をついている。大地が汚染されていれば、今年はずもウモロコシも馬鈴薯も植え付けできない。

核爆発から生じる初期の放射性降下物のなかでは、まずヨウ素131の放射能が心配だった。ヨウ素131は大気や牧草から乳牛、牛乳から人体へと容易に入るからだ。半減期は八日で、一〇分の一になるまで約四週間かかる。

上空に舞い上がり長期にわたり空中に滞留する放射性降下物には半減期の長いストロンチウム90やセシウム137が含まれている。二八年、三〇年といった長年月を経て漸くそれぞれの放射能が半分減る半減期の長い厄介者だった。

天空を彷徨い、核爆発地点から遠く離れた核戦争と無縁だったかつての

南半球の諸国にも、これらの半減期の長いストロンチウム90やセシウム137を含んだ放射性降下物が大量に降り注いだ。この種の半減期の長い放射性核種は食物などと一緒に体内に入ると、特定の器官に取り込まれて蓄積し、そこで長い間放射線を出しつづける。内部被爆だ。

半減期の長い核種が問題なのは、広く拡散し希釈されて濃度がいくら薄くなっても、自然界の生物生態系のなかで、食物連鎖を通して何千倍何万倍何億倍に濃縮することだった。小さいものを大きいものが順々に食する食物連鎖の世界で、人間はその頂点に位置するのだ。

放射能に汚染されたものを餌とすれば、小動物といえども、その体内に放射性物質が必ず蓄積する。その小動物を大動物が餌として大量に摂取すれば、大動物は体内にさらに放射性物質を貯めこむことになる。こうしてプランクトンを餌とする小魚からそれを餌とするマグロのような大型魚にいたる食物連鎖で、体内に蓄積した放射性物質の濃度は何千万倍何億倍になってしまう。

「田畑が汚染されては作物もつukれないわね」

清子が呟く。

葉物や根菜類の野菜（植物）も土壌中の放射性物質を取り込む。

放射能で自然界が汚染されれば、そこで生産される食物までもが何十年にわたって放射能に汚染され、有毒化しつづけるのだ。食べられる安全な作物をつくれなければ食料の自給自足が成り立たない。いや生存さえ、危ぶまれることになる。

「飲み水も危ないかも」

喜久枝が暗い顔を向ける。

分校の火の消えたストーブのまわりで、三人は暗い顔を見合わせた。

飲み水はろ過すれば飲めるようになるかもしれない。だが放射能に汚染された食べものはどうにもできなかった。煮ても焼いてもダメだ。ストロンチウム90やセシウム137の蓄積が少ないものを選ぶしかない。

おもにストロンチウム90は牛乳や肉類から、セシウム137は魚や野菜から体内へ取り込まれる。セシウム137は体内に入ってもいざずれ排泄されるが、ストロンチウム90は一度体内に取り込まれると排出できない。骨に蓄積すると、そこに留まって一生涯放射線を出しつづけて、造血機能にダメージを与えるのだ。

厄介なことに、ストロンチウム90が活性化すると、小麦や大麦などの穀類にも取り込まれるらしい。これを食べれば当然体内へ入って蓄積してしまう。

「探せば、放射性物質を取り込まない植物があるかもしれない。野菜のなかには化学合成物質を蓄積しやすい種類とそうでないものがあつたような気がするよ」

地之木は自ら鼓舞するように、勢いよく立ち上がった。

「みんなで佐藤さんと加藤さん宅を訪ねてみよう」

避難していた二組の老夫婦たちだ。分校での籠城生活が一カ月もつづいたころ、じっとしている生活にたまりかね、自宅へ戻ったのだった。

地之木はもう少し籠城生活をつづけたほういいと思ったが、初期の放射性降下物の放射能もかなり減衰しているころなので強いて止めることをしなかった。

だが日中も夕暮れのような毎日で、農作業もできないだろうし、牧草も育つこともあるまい。どんなふうに通しているのか気になっていたが、なかなか訪ねる機会がなく、それきりになっていた。

出掛けようと戸口へ向ったとき、窓ガラス越しに背の高い男が近づいてくるのが見えた。

地之木に気付いたのか、右手を上げて合図している。

右野だった。被害調査チームの車に近くまで送ってもらったのだという。

「そうだったのか。薄々核戦争があったらしいこと感じていたが、こちらは全く情報ゼロの別天地だったからな」

核戦争につづいて起こった火山噴火、ことに南極大陸での火山噴火、そして地球自転軸の揺らぎ、それと世界を襲った海面超上昇について、右野はこと細かに話した。

地之木は話を聞きながら、奇妙な感慨にとらわれていた。

テレビもラジオもない時代に戻り、世界の出来事とは無縁の隠者のような生活をしてきたのだ。核戦争も海面超上昇もすべてよその世界の出来事にすぎなかった。そこにはなんともいえない気楽さがあった。

右野は連絡用に高性能の無線機や衛星通信用の携帯電話をもってきてくれたが、彼には浦島太郎が竜宮城から持ち帰った玉手箱のように見えた。

「どうしますか。わたしたちと合流しませんか」

右野はしきりに誘う。

「あの核シェルターにかね」

「いずれ、予備首都建設がはじまる。『新しい文明村』の拠点することもできるんじゃないかな」

「本当かね……」

地之木は半信半疑だった。それに右野が妙に楽天的なことにも気になる。

「そうなればいいわね」

清子が喜久枝を見て言う。

「じゃ、いいね。そういうことで相談してみるから」

右野は地之木の返事も待たず、「調査チームの連中に追いつかなくちゃ」と言って、足早に去っていった。

41

真有はディスプレイに日本列島を写し出した。

日本列島上空には黒煙や雲がかかることが多かったが、ようやく晴れ上がって、画像は鮮明だった。

一〇〇メートルを超える海面超上昇で、日本列島は以前の姿をすっかり変えてしまっていた。

日本の国土は島々から成る。このため、海岸線が非常に長い。総延長は約三万五〇〇〇キロメートルにもおよぶ。そのうえ、国土の七二パーセントが山地だ。山地は水没を免れたが、海沿いの平野部や低地がすっかり水没してしまい、海岸線の形状が大きく変形してしまった。

北海道は石狩平野で二つに分断されている。沿岸部は欠け、根室半島は消え、根釧平野は奥深くまで水没してしまった。

本州では、下北半島、津軽半島は消え、仙台平野、関東平野、越後平野、濃尾平野、大阪平野が完全に水没した。瀬戸内海沿岸も大きく後退した。

四国の瀬戸内海側もかなり後退したが、太平洋側では土佐湾沿岸が深くえぐられてしまった。吉野川のデルタ地帯では奥深く海が広がっている。

九州では、筑紫平野など有明湾周辺が広く水没した。また周囲の島々の多くが消えてしまった。

「パパ、日本列島は三分の二になってしまったわ。どうしてこうなってしまったのかしら」

「ああ……」

掃木はディスプレイに南極大陸を写した。依然としてところどころに氷床のかけらが残っているものの、黒々とした溶岩の大地が広がっていた。

こんなに急速に、南極大陸からあんなに膨大な氷床が殆ど姿を消してしまふとは考えられなかった。

地球逆転による海面急上昇後、食糧不足の事態に備え、まがりなりにも復旧計画が軌道に乗りかけたそのとき、全面核戦争が勃発したのだ。

核爆発による放射性降下物が降る中、かつての南半球で火山噴火が連鎖的に頻発した。地軸が再度揺らぎ出し、海面超上昇となったのだった。

地球温暖化から発した食糧不足が、海面急上昇の煽りを受け、一段と深刻化していた。世界各地で食糧争奪紛争が頻発したものの、それがなぜ突然全面核戦争へ発展したのか、彼には理解できなかった。

二万発にもおよぶ核爆弾が極短時間に一斉に爆発した。それも地球のごく一部、かつての北半球の温帯亜寒帯ベルトの先進諸国に集中したのだ。

彼は地球への集中的な局部的衝撃が今回の海面超上昇の引き金になったように思えて仕方がなかった。だが完全に溶融するには二〇〇〇年はかかるだろうと思われていた南極大陸の氷床がなぜ急速に崩落して海洋へ滑落して散らばり、海面を一〇〇メートル以上も超上昇させたのか見当がつかなかった。

核爆発の放射能塵雲と火山噴火の噴煙とで覆われた暗闇のなかで、南極大陸の氷床が噴きだす大量のマグマに遭い、水蒸気爆発を繰り返して氷床を崩壊させたのか、それとも流れ出た灼熱の溶岩に覆われて溶けていった

のか。

「なに、日本列島が三分の一になったって……」

真有の声を聞きつけたのか、隣の部屋にいた池田が近づいてきて、ディスプレイを覗き込む。

「先生、三分の二ですよ。それより南極大陸を見て下さい。氷床が殆ど海洋へ滑落してしまっています。こんなに早く氷床がなくなるとは考えられませんか」

掃木は信じられなかった。彼は何千年何万年もの時間が一瞬のうちに過ぎたような感覚に囚われた。

「こんなにあってしまったのか」

池田の目のまえのディスプレイには南極大陸ではなく、平野部が水没して三分の二に痩せ細そった日本列島が写しだされている。

「地球は水をかぶって人間どもによって化学合成物質や放射能ですっかり汚染し尽くされたわが身を一心に洗い清めようとしているんじゃないの。いうなれば、これは地球自体の浄化行動のはじまりだ。いまに大雨が降りますよ」

「まさか……」

彼はふと、池田の言う通りかもしれないと思った。

「多分、海面を一〇数メートル上昇させた海面急上昇で、南極大陸の氷床がかなりの範囲にわたってすっかり持ち上げられてしまったのだろうね。今回の火山噴火による氷床崩壊で海面がさらに上昇して、氷床の滑落を増長させていったにちがいない。海面上昇と氷床の滑落が正のフィードバックとなって、互いに増殖増幅させ、加速していったのだろう」

南極大陸に変わったディスプレイの画像を見ながら、池田は自分に聞か

せるような口調になった。

「都市生活や生産活動で一番人間活動が旺盛だった沿岸の平野部は化学合成物質や放射能で一番汚染されたところでもあった。ここを洗浄するために、一気に水高を増し、水没させる必要があったというわけですね」

掃木は別に池田に調子を合わせたわけではなかった。

海水面が上がれば上がるほど、比重の軽い氷は自分の浮力で一層浮き上がろうとするのだ。氷の体積が大きければ大きいほど、その力（浮力）もますます大きくなる。

沿岸部の氷床が持ち上げられると、氷床と地面（あるいは氷床）との間に隙間ができる。そこへ海水が流れ込み、さらに持ち上げる。これが沿岸部から中心の奥地へ向って順次つづいていった。こうして海面上昇が海面上昇を呼ぶように、氷床滑落到拍車が掛っていったのだ。

「海が急速に広がっていったが……」

池田は真有をじっと見た。掃木には池田がなにを考えているのか、手に取るように分かった。池田は真有を通して若者の未来を思い、人類の未来を案じているのだ。

「地球が完全に浄化するまで大雨がつづくだろう。放射性物質や化学合成物質はやがて海底へと沈み、深海部へと移行して、プレートと一緒にマグマに取り込まれていくことだろう」

掃木には池田がそうあって欲しいと願っているように聞こえた。

世界は海面超上昇で五分の一の陸地を喪失した。

その分、海が広がった。それだけ大きくなった海面は強烈な陽光のもとで水温を上昇させ、大量の水蒸気を放出する。大気中に舞い上がった水蒸気は、巨大な積乱雲となって世界各地に豪雨をもたらすのだ。

熱帯性低気圧は熱せられた海域で巨大化し、大量の水蒸気を取り込み、世界のいたるところに超大雨を降らすことだろう。

山地だけになった日本列島にも、連日滝のような大雨が降るのだ。まるで汚染した表皮を剥ぎ取るように、いたるところで山肌は削り取られ、山崩れが起きるだろう。

42

「どうしました、その頭は……」

地之木は驚き、声を上げた。清子も喜久枝も口を開けたままだ。

ニコニコ顔で迎えてくれた老女の頭に頭髪が一本もなかった。避難してきたときには老女の頭にふさふさした頭髪があった。白髪だったが、頭髪を束ねて頭に載せていた。それが一本残らず剥げ落ちてしまっていた。

放射線の影響にちがいがなかった。だが老女はいつものように放射線を被爆したのだろうか。

老女は老夫とともに、核戦争が始まるまえに分校に避難してきた。核戦争が終わってから、しばらくして老夫婦は帰宅したのだった。

避難している間に、老女が大量の放射線を浴びたようには思えない。短時間だったが、一度家の様子を見に一時帰宅したことがあった。もし大量の放射線を浴びることがあるとすれば、そのときか。

地之木は一瞬、どきっとして自分の頭へ手をやった。毛の感触があった。

あのとき、彼も老夫婦に同行したのだ。だがずっと一緒にいたわけではなかった。送り迎えに同行しただけだった。

戻ってきてからしばらく分校に滞在し、一カ月ほどしてから老夫婦は家へ帰っていった。

一時帰宅したとき、降り積もった放射性降下物を素手で触ったのだろうか。それとも、強烈な放射線を放出する放射性降下物が混じる雨の中で、畑に出て農作業をやっていたのだろうか。

「他に調子が悪いとこはないのですか。吐き気とか、ないですか」
地之木は大量の放射線に曝されたときの症状を思い浮かべた。

大量の放射線を浴びると、吐き気、嘔吐、吐血、高熱、激しい下痢、腸からの大量出血といった症状があつて、死亡にいたる。頭髪が全部抜け落ちることもあるのだ。

「別に、これといったことはなにもないよ……、なにしろ歳だから変なところがあつてもしょうがないよ」

老女は首に巻いていた手ぬぐいを広げ、禿げた頭に被った。

地之木は歯痒かった。急性の放射線症かもしれない老女を目のまえにして手も足も出ないのだ。

「牛がいたんでしたね」

老夫が外へ連れ出しているという。牛には干し草を与え、毎日牛乳を搾って飲んでいると言い、コップをもってきて三人に牛乳を振る舞おうとした。

老女の脱毛は放射性降下物の雨に濡れたからなのか。それとも毎日飲んでいられる牛乳が放射能に汚染されているせいなのか。

彼は牛乳を飲まないほうがいいとは言えなかった。数カ月つづいた太陽のない暗闇のような日々で農作物は育たず、食べるものが極度に逼迫しているのだ。

三人は奥の山間部から避難してきたもう一組の老夫婦を訪ねる気も失せ

て、分校へ引き返してしまった。

43

全面核戦争での即死者数は約二〇億人、世界人口の二五パーセントにおよんだ。これは核爆発時の熱放射と爆風によるものだった。

一週間から二週間内に、熱傷や爆風による負傷、致死量を超えた電離放射線の被爆で数億人が死亡した。数週後、大量の電離放射線を浴びた数億人が息を引き取った。

これらの電離放射線被爆による犠牲者は核爆発時に致死量の「初期」放射線を浴びた人びとだった。

核爆弾では爆発時に爆破エネルギーの約一五パーセントが人間を殺傷する電離放射線となって放出する。三分の一が一分以内に放射される「初期放射線」だ。残りが「残留放射線」で、放射性降下物（放射性物質）からじわじわと長い歳月にわたって放出されるという。

全面核戦争による犠牲者は、現在、全世界で三〇億人を超えた。世界人口の約四〇パーセントだった。

だがこれで終りでなかった。生存している残りの六〇パーセントのなかから「残留」放射線による犠牲者がこれから何年にもわたって発生するのだ。

それだけではなかった。突如として、海面が超上昇した。海面が一〇〇メートル以上も超上昇してしまつたのだ。

全面核戦争では核爆発が先進諸国や軍事大国に集中したのに対して、海面超上昇は全世界をくまなく襲い、世界中の沿岸低地を呑み込んでしまった。核戦争の埒外におかれた国々も例外ではなかった。核戦争による直接の被害を受けなかった国々の方が、むしろ海面超上昇の被害が大きかった。

海面超上昇の犠牲者は全世界で数千万人におよんだ。犠牲者数は核戦争に比べて遥かに少なかったが、被災者数が飛び抜けて大きかった。

土地や生活基盤を奪われた被災者は全世界で一〇数億人を超えた。アメリカ、南米、東南アジア、南アジア、極東アジアの諸国、ロシア、中国、アメリカ、カナダ、オーストラリアでは何十何百万何千万の人びとが難民と化した。

全面核戦争で生き残った全世界の人びとは放射性降下物による放射能汚染に戦慄き、海面超上昇の被災者は難民となって、世界各地を彷徨うことになった。

44

「有平、地軸の揺れは収まりそうにないわね」

ジュディ・ワイズだ。

地軸は位置が定まらず、揺れていた。地球は自転軸をぐらぐら揺らしながら、公転軌道を回っていた。

かつて、地球は自転軸を二三度傾斜して左回りに回転しながら太陽の周りを回っていた。地球逆転で自転軸が逆転して以来、地球の回転（自転）も右回りに変わり、傾斜もなくなって地上から四季も消えてしまっていた。

それがいま、地球逆転で太陽に対して垂直となった地球の自転軸（地軸）が揺れだし、太陽に対して傾斜し出しているのだ。

「もとに戻る気配すらないのか」

掃木は地軸が再逆転してまえの位置に戻り、以前のように、太陽が東から昇ることを期待していた。

「まえと条件がかなり変わってしまったから、すぐもとに戻るといってはいないんじゃないかしら」

二万発もの核爆発、火山噴火の連鎖、南極大陸氷床の崩壊・滑落・流出とつづくなかで、地球の自転軸が揺れ出したのだ。南極大陸氷床の喪失、一〇〇メートルを超える海面上昇とつづき、地球逆転時とはまわりの条件がすっかり変わってしまった。地球の自転軸の動きも規則的なものではないし、またもとへ戻ろうとするものでもないらしいという。

「やはり、そうか。じゃ、どうなるんだ……」

地軸が揺れだしたとき、この調子で再逆転してまえの位置へ収まってほしいと思っていたが、やはりダメか。

「かなり長い間、地球は彷徨いつづけることになるかもしれないわ。今回の出来事が地球のマントルにもなんらかの影響をおよぼすことになるかと考えられるし……」

「うん、そうかも」

「それにね、一〇〇メートルも上昇した潮位がこのままの状態で収まることはないと思うの。地軸の傾斜で以前のように四季が生じ、太陽光線が弱まれば気温が低下して雪を降らし、やがて氷河や氷床が形成されていくことになるでしょうし……」

「それまで自転軸の揺れは収まりそうもないのか……」

全面核戦争ですっかり放射能塗れになったうえに、一〇〇メートルも海面を超上昇してしまっただけで、なにがなんでも地球が再逆転してもとの位置に戻ってほしかった。だが地球は、彼の思いとは別に、自転軸を揺らしながら新たな極を求めて彷徨いつづけるのだ。

「どんな揺れ方になるか想像もつかないけれど……」

厳寒の冬が突然訪れたり、酷暑の夏がつづいたり、それとも長い暗黒の世界が襲ってくるのだろうか。

彼は真有にふたたび「箱船」に閉じ込められたときのようなことが襲ってくるように感じて戦慄した。

「真有は元気？ 会いたいわ」

彼の心中を感じたのか、ジュディが呟く。

「ジュディ、会いたい……」

彼の脳裡に彼女と過した夜が蘇った。

「わたしも……、でも無理だわ」

民間の空港も核攻撃のターゲットだった。旅客機も破壊され尽くされてしまった。飛んでいきたくともできなかった。

「うん……」

「有平、ACARももう直き閉鎖されるかもしれないわ。この辺にも放射性降下物が沢山降ってきているのよ」

「本当か。それで……」

「どうしようか考えているところなの」

「こっちは来ないか」

「でも……」

「車は……」

「大丈夫、でも燃料が手に入りにくいわ」

「アラスカ辺りで落ち合おうか」

掃木は冗談ふうと言った。

「そうしましょうか。歩いて行けるかも」

ふたりは笑い声を上げ、頷きあった。彼には見えなかったが、彼女が何度も頷いているように感じた。

受話器を置いてからも、彼は耳元で彼女の声が響きわたっていた。

45

政府の調査では、核攻撃と海面超上昇による日本国内における死者および行方不明者数は数千万人におよぶと推定された。これはあくまで推定であって、実数ではない。もっと多いかもしれないし、逆の場合も考えられるという。

一〇〇メートルを超える海面超上昇によって三分の一の領土を喪失したが、ここは全人口の八〇パーセントを擁する人口稠密かつ総資産の九〇パーセントを保有する最も経済社会活動の旺盛な地域であった。

日本は今回の全面核戦争と海面超上昇によって、一挙に人口が半分以下に減り、資産の大半を失ってしまった。

東京、大阪、名古屋といった人口一〇〇〇万人を超える大都市圏はもちろんで、人口二〇万人以上の規模の都市はすべて核攻撃の対象となった。これに軍事施設、工場地帯、エネルギー施設、交通通信施設も標的だった。

核爆発による超高温と爆風とで約二〇〇〇万人が即死した。ほぼ同数の

人びとが熱傷と電離放射線で負傷し、生死を彷徨い、そして死んでいった。爆心地から離れたところにも大量の高レベル放射性降下物が降り注ぎ、広範囲にわたって重度の放射線被爆者（急性放射線症患者）が発生した。

そのとき、海面超上昇がはじまった。

核攻撃を免れ、核爆発直後の高レベル放射性降下物にも見舞われなかった沿岸市町村にも容赦なく海水が押し寄せた。住民は刻々と迫り来る海に追われ、放射性降下物が降り注ぐ中、避難民となって高台や山地へ向った。

核戦争でガソリンも食料も乏しく、交通機関も破壊されて動かなかった。

道路は避難民で溢れ、身動きできないほどの混雑となった。病人や足を引く高齢者は置き去りにされた。新生児を抱えた母親や幼児の手を引く父親が追いかけてくる海に呑み込まれまいと必死に急ぐ。

核戦争の犠牲者たちの遺体がつぎつぎに海に呑み込まれ、海深く沈んでいった。核爆発で壊滅した沿岸都市も、瓦礫とともに、海の底へ姿を消した。

沿岸低地と平野部を失った日本列島は山地と高原台地の骨と皮だけに瘦せ細ってしまった。標高の高い市町村には避難民が押し寄せ、食料の争奪戦がはじまった。

だが腹を空かした避難民は敵ではなかった。避難地にたどり着いた途端に倒れ込み、しばらくすると息絶えた。空腹と長旅の疲れとストレスと、赤痢や流行性肝炎などの感染症が原因だった。

多くの人びとは栄養失調と疲労に加え、いつの間にか放射性降下物を被り、放射線の影響で免疫力が著しく低下していたのだ。

46

「ここに留まっていようかと思うけど……」

地之木は清子と喜久枝の顔を交互に見ながら、切りだす。

老女に会ってすっかり脱毛した頭を見たとき、彼は激しいショックを受けた。早く逃げ出したいとさえ思った。安全なところへ脱出したかった。

右野の誘いによって、明日にも「臨時官邸」の核シェルターへ避難しようかとさえ思った。

だが分校に戻ると考えが変わったのだった。

「ここに留まるって、どういうこと。頭髪が抜けてしまいかも……、座して死を待つつもり？」

喜久枝が目を剥いた。

「もうこれ以上抜けないよ」

彼は半分禿げかかった頭を撫でた。

「すっかり禿げてもしらないわよ」

喜久枝は憎まれ口をきく。

「本田先生は避難して、一体なにをしようというのですか。シェルターの密封閉鎖空間のなかに閉じこもり、ひたすら時間を消費して、ストロンチウム90が半減するのを待とうというのですかね」

彼は改まった口調で言う。

「……………」

喜久枝は口を開けたまま、彼に目を向けた。清子も急になにを言いだすのかという面持ちで彼を見ている。

「われわれは現代文明のもとで、天に向かって唾を吐きつづけてきた。地球

温暖化の原因である二酸化炭素、環境ホルモンや有害な化学合成物質など、さまざまな『毒唾』をね。天に向って『毒唾』を吐きながら、いままさら、天から降ってくる『毒唾』を避けようとしてもはじまらない。自業自得さ。われわれ現代に生きるものは一人残らず『毒唾』を吐く現代文明を育てた張本人なんだ。そのひとりとして甘んじて『毒唾』を受けることにしたいんだ」

しばらくの間、誰も口を開かなかった。

「文明転換はどうしたの。新しい文明は……、『新しい文明村』は……」

清子が低い声で搾り出すように言う。

「できたらそうしたかった。つい最近まで新しい文明への転換が可能だと信じていた。犠牲を最小限に抑えて文明を転換しようとする新しい文明を構想し、実現のための一歩として『新しい文明村』づくりを実行してきた。だがいま思えば、思い上がっていたんだ。現代文明が核エネルギーを掌中にし、核爆弾をつくりだした時点で、現代文明の破滅への暴走がはじまっていたんだ。それはもはや誰にも止めることができないものだったのだ。そのことに気付かなかった。いや、うすうす気付いていながら、まだなんとかできると高を括っていた。現代文明をつくりだしたのはわれわれなんだと。だからわれわれ現代人は現代文明を十分コントロールできるはずだ、と思い込んでいた。だから、まだなんとかスムーズに文明転換ができると思った。だがそうではなかった。幻想だった。現代文明は暴走をつづけ、押しボタンひとつで凶暴な巨大な力がわがもの顔で動き出し、何億何十億人も人間を捻り潰したのだ」

「……………」

「一瞬のうちに、世界中の現代都市を破壊し、何十億もの人びとを殺傷し

た。これが現代文明の最大の成果だったのだ。この成果を得るために現代文明は巨大化高度化大量化を目指して突き進んだのだ」

破壊されたのは都市や人間だけではなかった。森林など生物生態系も崩壊し、生命そのものが破壊されてしまったのだ。

森林は自然植生のなかの中心で、生物圏の生物生態系に大きな影響力をもっている。また、地球温暖化の原因物質である二酸化炭素の吸収源でもあった。

核爆発による火災や電離放射線で広大な面積の森林が消失してしまった。

核爆発のあったところはもちろん、遠く離れたところの森林地帯にも被害がおよんだ。核爆発で成層圏に舞い上がった放射能塵が上空全体に広がり、核爆発のなかった地域にもくまなく放射性降下物が大量に降り注ぎ、電離放射線を放出したのだ。

放射線を受けた森林地帯では背の高い樹木の林冠から消失し、つづいて低木が背の高い順に枯れていった。動植物群はダメージを受け、地球が延々と築きあげてきた生物生態系が根底から崩壊して、生命が消え、不毛な土地となっていく。

核戦争は一瞬のうちに終わったものの、じわじわと人間や生物の生存環境を徹底的に破壊しているのだ。

「でもこれで現代文明の命運が尽きたのでは……」

「現代文明はやがて死に絶えるだろう。そして人類もいずれ……ガンや遺伝的影響で滅びることだろう」

「じゃ、いまが新しい文明を構築するチャンスじゃないの。地之木さん、人類が減るまえに『新しい文明村』を完成させましょうよ」

「地球上はすべて死の灰で汚染され尽くしている。『新しい文明村』をつ

くるようなところは残っていないよ」

「あるわ。きつとあるわよ。放射性降下物は一樣に降ることはないわ。風に流されるし、雨で洗い流されることもあるわ。地上のすべてが死の灰で汚染されているなんて、そんなことはないわ。この近くにも森が残っているとあるじゃないの。最後まで諦めちゃダメ」

清子は彼をじつと見つめた。

47

「スタッフが見つかったそうだ」

池田が右野を伴って入ってきた。

「え、スタッフ？」

掃木がディスプレイから目を上げた。彼は一瞬、なんの話か理解できず、ふたりの顔をぼんやりと眺めていた。

「当センターのスタッフだよ。真有くんいつまでも手伝わせるわけにいきまい」

「このスタッフですか。もう、スタッフはいいですよ。開店休業のような状態ですし、わたしもそろそろ引退の時期かと……」

「なにをいうか。スタッフとは名ばかりで、実は地之木さんたちにこっちは移って合流してもらおうかという話だよ。なあ、右野くん」

右野が小山に話して、了解を取ったという。

「『新しい文明村』はどうなったのですか」

「ムリじゃないのかな。なにしろ、放射能汚染が広がってしまって、食料

の自給自足はできないだろうから」

「かといって、放射能の減衰を待ってはいいつになるか。二〇年三〇年も待ちますか。でもどうやって待つことが出来ますか」

掃木はジュディ・ワイズと交わした冗談を思い起こした。

「パパ、アラスカからカナダにかけて広大な森林が残っているみたい」

「そうか。気流の関係で放射性降下物の降下量にも濃淡があるのだろう。とにかく、ここでの仕事も一段落したようだし……、真有、どうする？」

彼は真有に顔を向ける。

「外へ出て見たいわ」

シェルターに閉じこもった生活も半年になる。いつまでもここに閉じ込めて置くわけにはいかない。かといって、放射性降下物が降り注いでいるなかを動き回ることもできまい。彼はもう一度真有に見た。彼女は澄んだ底知れない透明な目で彼をじつと見ていた。

「まだ、地軸の揺れが解決していない」

池田が未練がましく、彼に目を向ける。

「先生にお任せします。でもその問題には解決なんてないんじゃないんですか。当分の間、揺れているでしょうから」

彼は珍しく気色ばんだ。不意に、いままでしてきたことがなんの意味もないことのように思えた。

地球は地球で勝手に動き、人間は人間で勝手に振る舞っているにすぎなかった。人間はいつの間にか地球の支配を離れ、地球の掟に従おうとしなくなっていたのだ。というよりも、人間は地球の制約条件のもとでしか生きることができないのに、人間が地球を支配し始めていたのだった。人間にはそんな資格も能力もないのに、自らを買いかぶって思い上がり、自ら

を全能者に仕立ててしまっていたのだ。そのとき、人類は滅亡への道を歩み始めたのだった。

彼自身、ディスプレイのまえに座り、すべてが分かるような気がして写しだされた画像を見ていた。だが自分にはなにも分かっていたいなかったことがようやく分かったような気がした。

「さあ、真有、出掛けよう。あとは先生にお願ひします」

彼は立ち上がると、真有を促して部屋を出た。

一瞬、地球が大きく揺らいだような気がした。

48

「地之木さん、ここに留まるって本当ですか」

右野が部屋に入ってくるなり言った。

地之木は窓辺に佇み、外を眺めていた。校庭で清子と喜久枝が池田と談笑している。掃木と真有の姿もあった。

「……どうしたのですか」

右野は地之木に近づいて、ふたたび口を開く。

「折角だけど、『新しい文明村』をつづけていたんだよ。放射性降下物が降り注ぎ、この辺も放射能に塗れてしまったようだけど……」

地之木が一度は「臨時官邸」のシェルターへの移動を了承しながら、なぜ急に気持ちが変わったのか、右野にはどうしても分からなかった。

「あっちへ移ってもできることじゃないですか」

「ああ、でもここでつづけてみたいんだ……」

怪訝な顔の右野に、彼はつづけた。

「……確におかしいことかもしれない。アクティブな放射性降下物で頭髪が抜け落ちるおそれがあるというのに、ここに留まって自給自足で生活しようというのは、どう考えても正気の沙汰じゃないよね。終末戦争のような核戦争が勃発するまえに文明転換を果せばよかったんだけど、ダメだった。完全に間に合わなかった。でもね……」

……いま振り返って見ると、人類は核エネルギーを手に入れ、核爆弾を開発したときから一直線に全面核戦争へ突き進んできたように思えるんだよ。われわれ人類は核エネルギーと引き換えに、まるで大きな手足だけの化け物のように、手足だけを極端に大きくしてしまい、巨大手足の巨人となってしまう。頭は極端に小さく、巨大な手足を無闇矢鱈と振り回すだけの巨人だ。自分の手足でありながら、それを自ら律することができない巨人だった……

……もし手足と同じく、頭も大きくできておれば、われわれに核エネルギーをコントロールする叡知も授かっていただろうにね。そうすれば、凶暴な暴力に溺れることもなく、人類には永遠への道が拓けていたことだろうに……

……人類は絶滅の危機を予知したのか、生物種の最後の足掻きか、最後になって、人口大爆発に種の保存を賭けたのか。だがこれがかえって仇となった。地球温暖化の果てに食糧不足を招いてしまった。食糧不足から食糧争奪戦へと発展し、紛争の頻発を招いてしまった……

……全面核戦争で半数が犠牲となったとしても、まだ四〇億人はいる。ガンや遺伝的影響など放射性降下物の長期的影響や感染症の蔓延などで一〇億人が死亡することがあっても、まだ三〇億人だ。もしかしたら……

……でもムリだね。核爆発で森林は消失し、不毛な土地が広がっている。海は放射能で汚染され、魚介類も汚染されてしまった。自然界の動植物は放射能で汚染され、有毒化してしまっている。自然が与えてくれた食べものを自ら汚染したものは飢えを凌ぐためにははや有毒なものでも食べるほかないのだよ。そして静かに死を待つほかないんだ、この地球ではね。人類はもはや滅亡への道を歩むほかないのかもしれない……

……でもね。核戦争のまえから、われわれは現代文明のもとで生みだされたさまざまな化学合成物質で汚染され有毒化したものを食べつづけてきたんだ。ダイオキシン、水銀等の重金属類、PCB、環境ホルモン様化学合成物質などだ。これらは予期に反して生じた汚染かもしれないが、われわれは殺虫剤、殺菌剤、化学肥料、化学添加物、保存料などと称して、さまざまな化学合成物質を鼻高々に使用して自ら食べものを故意に汚染していたのだ……

……いまさら、喚いてみてもしかたがない。すべて人間が撒いたものなんだ。大量生産大量消費大量廃棄方式を武器に現代社会の花形システムとなった原理主義的資本主義市場経済システムは、人類に幸福をもたらすどころか、ひとを蹴落とし、われ先に儲けようとする浅ましい精神構造を増長させ、むしろ人類社会の破滅へのステップを加速させるものにすぎなかった。市場原理主義経済のグローバリゼーションは人類破滅へのグローバリゼーションだったのだ……

……悪足掻きはしたくない。われわれは天に向かって『毒唾』を吐いたのだ。いまさら逃げ隠れしてもはじまらない。天から『毒唾』が落ちて『毒唾』に塗れようが、ここで生活をつづける気になったのはこういう次第なんだ。別に高邁な考えがあつてのことではないよ。自ら撒いたものは自ら

刈り取るほかないからね……」

「……………」

右野はただ地之木の顔をじつと見つめている。彼は右野の視線を避けるように身体を回転させ、窓の外に向かって手を振った。

「さあ、みんなになかに入ってもらおう。報告しておきたいことがあるんだ」

地之木は含羞みを浮かべ、微笑んだ。

一団がお喋りをしながら、分校の教室のなかに入ってきた。

「真有ちゃんもカナダへ行っちゃうのか」

「あの辺は大丈夫だったの」

「行けるのかなあ、飛行機も船もないよ」

「海の上を歩いていくのよね、パパ」

掃木はにやにやして聞いている。

「報告したいことがあるんですが……」

火気のないストーブの周りに並べてある椅子に全員が腰を下ろすのを待つて、地之木が立ち上がった。

「皆さん。地之木さんがお話したいと言っていますよ」

右野が談笑に湧いている連中を制して、地之木に促す。

「実は皆さん。右野くんから誘われて、われわれ三人がセンターへ参加する予定でしたが、中海さんとわたしがここに残って、センターへは本田喜久枝さんだけが行くことになりました……。よろしくお願いいたします」

「それだけ。肝心なことが抜けているわよ」

喜久枝が不満そうに呟く。

「……実は、今日、わたくしと中海清子は一緒になって、ここで『新しい文明村』をつづげることにしたのです」

地之木は清子を見た。彼女は含羞みの笑みを浮かべ、深く頭を下げた。

「パパ、わたしもここにいたい」

真有が突然立ち上がって、清子のそばに走り寄って「いいでしょ、おばさま」と手を握った。清子と会ったときから、真有には彼女がどことなく亡くなった大叔母と似ているように思え、親しみを覚えていたのだった。

「パパが許してくださるなら、いいわよ」

「パパと一緒にダメ？」

真有が掃木を振り返る。

「実は、おれもここにいたいな。真有ちゃん、いいかな」

「池田先生、本当ですか。冗談でしょ」

「どうです。あなたもここにいては。センターなんかに移らずに……」

池田が喜久枝を誘う。

「といわれても……、清子」

喜久枝は困惑顔で清子に助けを求める。

「右野くんもどうかね」

池田はすっかり居座るつもりでいる。

「真有ちゃん。ここにいたいなんて言い出すから、へんなことになったんだぞ」

右野は真有を睨む。

「ごめんなさい。でも……」

「いいかい。ここにいと頭の髪が全部抜けてしまうかもしれないんだぞ。」

それでもいいのかい」

右野は真有に顔を近づけ、手を伸ばし、頭髪に触れようとした。

「助けてー」

真有は清子のかげに隠れた。背が低い清子の後ろから真有の顔が覗いていた。

地之木と清子の生存を賭けた生活がはじまった。

喜久枝も分校に留まった。右野もひやかし半分でふたりの生活を見守っていた。

掃木と真有はいつ実現するか分からないアラスカ・カナダ行き準備に

余念がなかった。徒歩にするか、船にするか。ルートは……。

池田はひとり、悠々と分校での生活を楽しんでいるふうだった。

エピローグ

全面核戦争とつづいて生じた二〇〇メートルを超す海面超上昇とによって、世界人口の約半数が犠牲となった。

グローバル化した世界の全面核戦争では全世界が核爆頭ミサイルのターゲットとなってしまう。戦後の「漁夫の利」国を排除するために、世界の国家組織のすべてが核攻撃の対象とされるのだ。

すべての国の首都上空で核爆弾が爆発し、すべての国の政治機構が破壊された。

世界中の人口二〇万人以上の都市や工業地帯もターゲットとなり、核爆発の洗礼を受けた。世界人口は激減し、世界中の経済社会活動が停止した。

グローバル化していた世界経済システムは極めて効率よく一瞬のうちに崩壊し、国際貿易や国際金融システムは破綻し、国際経済が壊滅した。

これに加えて、地球環境が極度に悪化した。

全面核戦争は地球環境を放射能で汚染したばかりではなかった。

森林地帯での大火災発生で大量の二酸化炭素が放出された。と同時に、大規模な森林地帯の消失によって二酸化炭素の吸収源がなくなり、大気中の二酸化炭素濃度が急激に増加した。地球温暖化が倍加した。

核攻撃や火災によって、軍事施設、工業地帯、化学工場、石油タンクなどから極めて有害な化学合成物質が大量に放出された。これらの化学合成物質は大気、水域、土壌を汚染し、地球規模へと広がっていった。

さまざまな化学合成物質が大気中で反応し、新しいさまざまな有害物質を形成する。対流圏ではオゾンが急増する一方、成層圏では減少し、有害

紫外線が長期にわたってヒトや生物に悪影響をおよぼす。

このほか、核爆発で成層圏に噴き上げられた微粒子や火災の黒煙で長期にわたり日射不足が生じ、多くの生物が死滅し、農作物や植物の生育にも悪影響がおよんだ。

放射能汚染、有害化学合成物質の環境汚染などのほかに、地球温暖化による大干ばつ、長期にわたって継続する大雨、日射不足、熱波、大洪水、巨大竜巻など、気象異変が頻発した。そのうえ、これらが相乗的に作用して地球上の生物生態系を襲い、徹底的に痛めつけた。

核爆発にともなう地球環境悪化に加え、海面超上昇による農耕地の消失によって、世界は極端な食糧不足の陥った。加えて、食用となる野生の木の実や魚介類が放射能汚染や化学合成物質汚染で有毒化してしまった。

一年経つたいま、国際社会はいまだ機能せず、世界はなす術がなかった。

全面核戦争、海面超上昇、その後の試練をどうにか生き抜いた人びともつぎつぎと息の根を断たれていった。

多くは精神障害や免疫不全といった核爆発後遺症に悩まされる一方で、食糧不足による飢えや栄養不良に襲われ、毎年、餓死か、ガン、感染症、遺伝性疾患で何百万何千万人が死んでいった。

核戦争後、急増した大気中の二酸化炭素濃度も次第におさまり、やがて二酸化炭素濃度が減少に転じていった。南極大陸氷床に閉じ込められていたガスの放出も済み、広がった海が二酸化炭素を吸収し出したらしい。

地球温暖化の暴走の果てに、海面は三段跳びで上昇した。一段目で数メートル海面が上昇し、二段目で一〇メートル海面が急上昇した。最後の三段

目で一〇〇メートル海面が超上昇した。

現代文明の「毒唾」に塗れた地球はまるで全身を洗い清めるかのように頭から水を被り、シャワーのような大雨を連日降せていた。

すべてが終わった。

すべてが今世紀の出来事だった。

地球は地軸を揺らしながら、ゆっくり寒冷化へ舵をきった。

現代文明は主体・客体の二元論を武器に、巨大化高度化大量化を目指し、客体である地球（自然）の征服・支配をとことん追求した。

主体・客体の二元論は自分以外の人間をも客体と認識する。こうして現代文明は地球の征服・支配と同様に、人間が人間を征服・支配するシステムをつくりあげていったのだ。

これに加え、分析的な方法を駆使し、対象をひたすら細分化していった。全体であるべき人間をも細分化し、いまや遺伝子レベルや細胞レベルになってしまった。

全体を忘れ、全体を見失った人間は、地球が有限であることをわきまえず、ひたすら果実を追い求めてアクセルレバー（加速装置）を踏みつけ、コントロール機能もブレーキレバー（制御装置）もないまま、現代文明を暴走へと駆り立てた。

巨大化高度化大量化をめざした現代文明は大量生産大量消費大量廃棄方式のもとで生産や消費を拡大する一方、破壊力や殺傷能力をも巨大化高度化大量化していった。

全面核戦争で見境もなく発射された二万発も核弾頭ミサイルはまさに巨大化高度化大量化科学技術の粋だった。

現代文明は科学技術の巨大化高度化大量化をとおして巨大な力を掌中すると同時に、現代文明の吐き出す「毒唾」も巨大化高度化大量化していった。

現代文明の果実は最大の「毒唾」である核爆発ですべてが吹き飛んでしまった。現代文明はまさに「毒唾」文明だったのだ。

人間は現代文明が「毒唾」を吐きながら産み出した果実を貪り喰い、いつしか現代文明の奴隷になりさがり、暴走の果てに「毒唾」に塗れ、自壊への道を転げ落ちていったのだ。

現代文明に溺れたわれわれ人間には最後まで地球（自然）という巨大な複合システムを全体的に理解し把握することはできなかった。

地球は奢れる人間の行動を忌々しく思い、リセットボタンに指を載せ、じつと海面超上昇の機会を窺っていたのだ。

そんななか、微かな光が射込んだ。僅かに残った森林で若い芽が吹きだしはじめていた。

（元）

（この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実在するものとは一切関係がありません）

主要参考文献

スウェーデン王立科学アカデミー編 高榎堯訳 『一九八五年六月 世界核戦争が起きたらー人類と地球の運命ー』（一九八三）

海面超上昇―現代文明の毒唾 4

生野以久男

二〇〇七年四月一日第一版発行

(c) Ikuo Ikuno 2007

発行所 kindkpress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一― 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kindkpress.com 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上での例外を除き、禁
じられています。

ISBN なし